

市内遺跡発掘調査報告13
日田市埋蔵文化財調査報告書第112集

吹上 VI

—自然科学分析調査の記録・調査の総括—

吹

上

VI
—自然科学分析調査の記録・調査の総括—

市内遺跡発掘調査報告13・日田市埋蔵文化財調査報告書第112集

2014年

日田市教育委員会

2014年

日田市教育委員会

序 文

本市に所在の吹上遺跡は、県内でも古くから大規模な弥生時代集落遺跡として知られ、今でも遺跡のある畑では土器や石器を拾うことができます。

遺跡はこれまでに当委員会が11回の調査を行い、当時の住居や墓などが発見されると共に多くの遺物が出土しています。

今回報告いたします自然科学調査の記録と総括は、11次に及ぶ発掘調査において出土した遺物の科学的側面からの調査記録と吹上遺跡の評価を総括するものであります。昭和54年度から平成12年度までの24年間の発掘調査と平成14年度から平成25年度までの12年間の報告書作成の集大成といえます。

この間、遺跡はその重要性が注目を浴び、豪華な副葬品が出土した墳墓群一帯は県史跡として保存されるなど、遺跡全体が開発から護られてきました。さらには、墳墓群の出土品が一括して国の重要文化財に指定され、その価値は日田のみならず、日本の歴史解明に大きく貢献する成果であることが認められています。これらはひとえに、遺跡の保存にご尽力を頂いた関係者の方々への努力の賜物と言え、吹上遺跡は多くの方々によって守られてきたかけがえのない遺跡なのであります。

このような吹上遺跡の調査にかかる報告の第6巻にあたる本書には、これまでの調査に携われ、ご指導いただいた各先生方のご協力により、最先端の自然科学分野での調査成果が収録されており、今後の埋蔵文化財保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、吹上遺跡の保護にご理解頂くとともに甚大なるご協力を賜りました地元地権者の皆様方、調査から報告書作成に至るまで、多大なるご協力とご指導を賜りました関係機関の方々と、調査への協力をいただきました皆様方に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月31日

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した吹上遺跡の自然科学分析調査・調査の総括の報告書である。
調査時の調査組織及び調査協力者については『吹上Ⅰ』第1章第4節に記し、本報告における組織および協力者は第14章第1節に記載している。
2. 本書の調査報告の記録に用いた航空写真は、平成17年に株式会社写測エンジニアリングに委託した航空測量の成果品を使用している。
3. 地形図は株式会社写測エンジニアリングに委託した成果品を使用した。また、各遺構図合成及び変遷図作成に使用した図面とその製図は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。
4. 赤色顔料分析の一部には九州国立博物館に委託した成果品を使用している。
5. 方位はすべて磁北を示し、座標数値は世界測地系による。
6. 重要文化財『大分県吹上遺跡出土品』は大分県立博物館に保管されているが、それ以外の出土遺物及び記録類（図面、写真等）は、日田市埋蔵文化財センターに保管している。また、出土人骨は九州大学に保管いただいている。
7. なお、本報告の作成において、関係機関及び各指導の先生方に報告を依頼し、玉稿を賜った。
8. 第14章の関係する執筆者名は文頭に記載し、それ以外の第14章第1・8節、第15章の執筆は渡邊が行った。全体の編集は渡邊が行った。
9. 題字は、元日田市文化財調査員である武石邦氏の揮毫によるものである。



日田市の位置

10. 吹上遺跡の調査報告書については全6分冊である。これまでに5分冊を刊行しており、本書が第6分冊「吹上VI」として、全11次の調査に伴う出土人骨や自然科学調査などの分析の記録と調査総括の2章で構成される。

なお、全分冊の目次と内容については下表のとおりである。

第1分冊	書名	吹上遺跡Ⅰ-3～5次調査の記録-
	発行年	2003年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第42集、日田地区遺跡群発掘調査報告3
	内容	第1章 調査の経過
		第2章 遺跡の立地と環境
第3章 3次調査の記録		
第4章 4次調査の記録		
	第5章 5次調査の記録	
第2分冊	書名	吹上遺跡Ⅱ-9～11次調査の記録-
	発行年	2004年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第52集、日田地区遺跡群発掘調査報告5
	内容	第6章 9次調査の記録
第7章 10次調査の記録		
第8章 11次調査の記録		
第3分冊	書名	吹上遺跡Ⅲ-7・8次調査の記録-
	発行年	2005年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第57集、日田地区遺跡群発掘調査報告6
内容		第9章 7次調査の記録 第10章 8次調査の記録
第4分冊	書名	吹上遺跡Ⅳ-6次調査の記録-
	発行年	2006年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第70集、日田地区遺跡群発掘調査報告8
	内容	第11章 6次調査の記録
第5分冊	書名	吹上遺跡Ⅴ-1・2次調査の記録-
	発行年	2013年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第110集、市内遺跡発掘調査報告12
	内容	第12章 1次調査の記録 第13章 2次調査の記録
第6分冊	書名	吹上遺跡Ⅵ-自然科学分析調査の記録・調査の総括-
	発行年	2014年
	シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第112集、市内遺跡発掘調査報告13
	内容	第14章 自然科学分析調査の記録 第15章 調査の総括

本文目次

第14章 自然科学分析の記録	
第1節 分析の概要と経過	3
第2節 吹上遺跡出土人骨について	4
第3節 吹上遺跡4・5号人骨の装身具着装状態について	21
第4節 吹上遺跡から出土した弥生時代青銅器の鉛同位体比	25
第5節 吹上遺跡出土ガラス管玉の調査	29
第6節 4・5号喪棺墓出土の勾玉の材質分析	34
第7節 吹上遺跡出土の赤色顔料について	37
第8節 吹上遺跡5号喪棺墓出土イモガイ貝輪付着赤色顔料の分析	47
第9節 自然科学分析調査の総括	48
第15章 調査の総括	
第1節 各調査区の概要	
1. 各調査の概要	51
2. 補足遺物の記録と修正事項	56
第2節 吹上遺跡の出土遺物と遺構の特色について	
1. 出土土器と石器の特色について	58
2. 墳墓と副葬品の特色について	65
3. 古代末の遺構と遺物	76
第3節 吹上遺跡の出土遺構の変遷について	
1. 吹上遺跡の遺構変遷について	77
2. 墓地の変遷について	81
第4節 北部九州の弥生遺跡における吹上遺跡の位置づけ	
1. 日田地域の弥生集落の変遷について	85
2. 北部九州の弥生遺跡における吹上遺跡の位置づけ	92
第5節 総括	98

挿 図 ・ 写 真 目 次

(第14章 自然科学分析調査の記録)	
第1節 第1図 調査区配置図 (1/2000)	2
第2節 第1図 中顔幅・上顔高 (女性)	7
第1表 主要頭蓋計測項目の平均値比較 (女性)	14
第2表 頭骨形態小変異	14
第3表 上肢骨の計測値と他集団との比較 (男性)	14
第4表 下肢骨の計測値と他集団との比較 (男性)	15
第5表 上肢骨の計測値と他集団との比較 (女性)	15
第6表 下肢骨の計測値と他集団との比較 (女性)	15
第7表 身長 の 推定値 と 他 集 団 と の 比 較 (藤 井 式 を 用 い て 算 出)	15
第8表 歯冠計測値	15
第9表 吹上遺跡石棺被葬者のQモード相関係数	15

写真図版1	4次1号石棺出土頭蓋骨(正面観)	写真図版3	6次4号喪棺出土上肢骨
	4次1号石棺出土頭蓋骨(側面観)		6次4号喪棺出土下肢骨
	4次1号石棺出土頭蓋骨(上面観)		6次3号喪棺出土大腿骨
	9次1号喪棺出土頭蓋骨		9次2号喪棺出土左上腕骨
	6次4号喪棺出土頭蓋骨		9次3号喪棺出土右上腕骨
	6次3号喪棺出土頭蓋骨	写真図版4	4号人骨筋付着部の発達
写真図版2	4次1号石棺出土上顎骨	写真図版5	5号人骨筋付着部の発達
	9次1号喪棺出土下顎骨		
	9次12号喪棺出土歯牙		
	4次1号石棺出土四肢骨		
	4次2号石棺出土四肢骨		
第3節	図1. 吹上4号人骨骨盤		21
	図2. 吹上4号人骨胸腹部		21
	図3. 吹上4号人骨寛骨背後		22
	図4. 吹上5号人骨出土状態		22
	図5. 吹上5号人骨イモガイ装着状態		22
第4節	図1 日田市吹上遺跡から出土した青銅器の鉛同位体比(A式図)		28
	図2 日田市吹上遺跡から出土した青銅器の鉛同位体比(B式図)		28
	図3 今までに測定された細形銅戈、中細形銅戈と吹上遺跡資料の鉛同位体比分布(A式図)		28
	図4 今までに測定された細形銅戈、中細形銅戈と吹上遺跡資料の鉛同位体比分布(B式図)		28
	図5 既測定の詳細銅剣、把頭飾の分布と日田資料の鉛同位体比(A式図)		28
	図6 既測定の詳細銅剣、把頭飾の分布と日田資料の鉛同位体比(B式図)		28
	表1 日田地域から出土した青銅製品の資料出土地(日田市教育委員会所蔵)		27
	表2 日田地域から出土した青銅製品の鉛同位体比値		27
	写真1 2号喪棺墓出土銅戈		27
	写真2 4号喪棺墓出土銅戈		27
	写真3 1号木棺墓出土銅剣		27
	写真4 1号木棺墓出土把頭飾		27
第5節	Tab.1 元素分析結果		31
Fig.1	ガラス管玉に見られる螺旋状パターン	Fig.7	試料A分析面の反射顕微鏡写真(拡大)
Fig.2	分析試料実測図	Fig.8	試料Aの反射電子画像
Fig.3	試料A側面	Fig.9	試料Bの反射電子画像
Fig.4	試料B側面	Fig.10	物質a・a'のラマン分光分析結果
Fig.5	試料A分析面の反射顕微鏡写真	Fig.11	物質bのラマン分光分析結果
Fig.6	試料B分析面の反射顕微鏡写真	Fig.12	物質cのラマン分光分析結果
第6節	第1図 吹上遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル		35
	第1表 分析試料と分析結果		34
	第2表 蛍光X線分析による元素の強度と重量%		35
	写真1 4号喪棺出土勾玉		36
	写真2 5号喪棺出土勾玉		36

第7節 表1 吹上遺跡出土赤色顔料の分析結果一覧	42
図1-1 吹上遺跡出土の赤色顔料	43
図1-2 吹上遺跡出土の赤色顔料	44
図2 吹上遺跡出土赤色顔料の蛍光X線スペクトル図	45
図3 吹上遺跡出土赤色顔料のX線解析図	46
第8節 図1 No.2-10 イモガイ貝輪とその分析箇所	47
図2 No.2-10 イモガイ貝輪の蛍光X線分析スペクトル	47

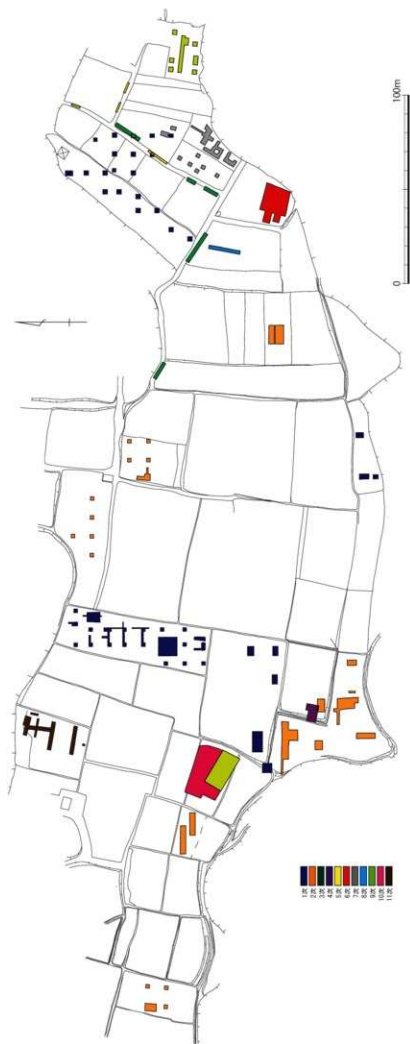
(第15章 調査の総括)

第1図 吹上原台地形測量図(1/5500)	50
第2図 調査区配置図(1/2000)	52
第3図 遺構配置図(1/800)	53-54
第4図 6次調査4号喪棺墓出土ガラス管玉・5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(1/2、1/3)	57
第5図 各地域の影響が見られる吹上遺跡出土土器(1/6・10)	59
第6図 弥生前期後半の日田盆地の土器(1/15)	59
第7図 弥生時代中期の日田地域の土器(1/15)	60
第8図 弥生時代後期前半の日田地域の土器(1/15)	62
第9図 弥生時代後期後半の日田地域の土器(1/15)	63
第10図 日田地域の喪棺①(1/25)	66
第11図 日田地域の喪棺②(1/25)	68
第12図 日田地域の喪棺③(1/25)	69
第13図 日田地域の喪棺変遷(1/30)	70
第14図 出土副葬品類	73
第15図 市内出土金属器類及び副葬品	75
第16図 時期別領域変遷図(1/4000)	78
第17図 吹上遺跡時期別遺構変遷図(1000)	79-80
第18図 6次調査区遺構変遷図(1/200)	82
第19図 南西端墳墓群変遷図(1/500)	82
第20図 日田地域弥生遺跡分布図(1/300,000)	85
第21図 日田盆地の主要弥生遺跡	88
第22図 弥生集落変遷図(1/400,000)	90
第23図 北部九州地域圏推定図	93
第1表 出土管玉観察表	57
第2表 出土石器組成	64
第3表 日田地域弥生遺跡消長一覧	86
第4表 北部九州主要厚葬墓一覧	93
写真1 出土管玉	
写真2 4号喪棺墓出土ゴホウラ貝輪(右手4)	
写真3 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(左手3)	
写真4 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(左手11)	
写真5 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(右手4)	

第 14 章 自然科学分析調査の記録



5号墓棺墓人骨出土状況



第1図 調査区配置図 (1/2000)

第1節 分析の概要と経過

本章においては、これまでの各章の報告において、分析編に委ねるとしてきた人骨を含む自然科学分野での調査記録を報告する。それぞれの内容は以下のとおりである。

第2節においては、第4・6・9次調査（各年度調査）において出土人骨の取り上げを九州大学に依頼した成果を元に執筆いただいた。それぞれの調査体制は、第1章第4節に記載しているとおりであるが、改めて以下に記す。（職名は当時のままとする。）

第4次調査 土肥直美（九州大学医学部助手）、田中良之（同医学部助手）

第6次調査 田中良之（九州大学大学院教授）、金宰賢（同助手）、石井博司（九州大学比較社会文化研究科）

第9次調査 田中良之（九州大学大学院教授）、金宰賢（同助手）

第3節においては、第6次調査の墳墓より出土した青銅製品の分析を平成7年に東京文化財研究所平尾良光氏（現別府大学名誉教授）に依頼し、成果の一部は平成11年発行の『古代青銅の流通と製造』にて報告されているが、その成果を元に改めて執筆いただいた。

第4節においては、第6次調査4号喪棺墓より出土したガラス管玉の破片の分析を平成22年に九州大学に依頼した成果を執筆いただいた。なお、分析に用いた資料は破壊分析の素材となるため、重要文化財指定対象物（当時は未指定）以外の微細破片2点を選別した。

第5節においては、第6次調査4・5号喪棺墓より出土した硬玉勾玉の材質分析を熊本大学大坪志子助教に依頼した成果を元に執筆いただいた。分析は重要文化財指定以前の平成19年に行われた。

第6節においては、第6次調査の墳墓より出土した赤色顔料の分析を九州国立博物館志賀智史氏に依頼し、執筆いただいた。赤色顔料のサンプル及び分析は、調査当時のものを対象として実施した。

第7節においては、平成24年度に重要文化財吹上遺跡出土品のイモガイ貝輪に付着していた赤色顔料を修理受託業者である元興寺文化財研究所がその過程において分析し、執筆いただいた。

なお、これまでの調査組織及び調査協力者については『吹上Ⅰ』第1章第4節及び『吹上Ⅰ～Ⅴ』の各章第1節に記載しており、本報告に関する平成25年度の組織体制は以下のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 財津俊一（同文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（同文化財保護課埋蔵文化財係長）、華藤善紹（同係副主幹）

報告書担当 渡邊隆行（同係主査）第1・9節

分析執筆 第2節：九州大学 舟橋京子・岩橋由季・米元史織・田中良之 ※各所属の詳細は本文に記載

第3節：九州大学 田中良之

第4節：東京文化財研究所 鈴木浩子・平尾良光（現別府大学名誉教授）

第5節：九州大学 谷澤亜里・足立達朗・小山内康人・田中良之

第6節：熊本大学 大坪志子

第7節：九州国立博物館 志賀智史

第8節：元興寺文化財研究所 川本耕三

調査協力 大分県立歴史博物館第2節 出土人骨の分析

第2節 吹上遺跡出土人骨について

舟橋京子¹・岩橋由季²・米元史織²・田中良之³

1：九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

2：九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

3：九州大学大学院比較社会文化学府・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

1. はじめに

大分県日田市吹上遺跡4次・6次・9次調査において検出された甕棺から人骨が出土した。調査を担当した日田市教育委員会より九州大学医学部第二解剖学講座・九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座に調査依頼があり、3度にわたり人骨の調査および取り上げを行った。その後人骨は九州大学へと搬入され、第二解剖学講座・本講座および平成25年5月新設の九州大学アジア埋蔵文化財センターにおいて整理・分析をおこなった。その結果を報告する。4次調査出土人骨に関しては、第二解剖学講座により整理・分析・報告がすでに行われているためその結果を引用する(土肥他1987)。なお、人骨は現在全て九州大学大学院比較社会文化学府古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

2. 出土状態

≪4次調査1号石棺≫

本個体は、石棺内に頭位を東にとった仰臥伸展の状態で見つかり、埋葬されている。

石棺内西側から下顎がオトガイを西に上面を上にした状態で出土しており、頭蓋は右側位転落し側頭部を上顔面を西に向けた状態で出土している。左右上肢骨は肘関節を強屈した状態で出土している。石棺中央付近からは左右寛骨が、さらに西側からは大腿骨と脛骨がほぼ解剖学的な正位置を保った状態で出土している。

≪4次調査2号石棺≫

本個体は、石棺内に頭位を北にとった仰臥伸展の状態で見つかり、埋葬されている。

石棺内北側から頭蓋が顔面を南に向けた状態で出土している。頭蓋の南側からは頭蓋骨および上肢骨が出土している。第3腰椎から仙骨は関節した状態で出土している。左右の上肢は肘関節を軽屈し手を下腹部においた状態である。棺内南側からは下肢が膝関節を伸展した状態で出土している。左右寛骨と大腿骨もそれぞれ関節した状態である。

≪6次調査3号甕棺≫

人骨は合わせ口式甕棺の下腹部付近からまとまった状態で出土している。頭蓋骨が最も上から出土しており、その直下から左大腿骨が近位を東に長軸を東西にした状態で出土している。左大腿骨直下からは左腓骨が大腿骨と長軸をそろえた状態で出土している。これらの下肢の西側よりも低い位置から、右腕骨が長軸を下肢同様東西にした状態で出土している。これら四肢骨の南側からは頭蓋骨片が出土している。

以上のように人骨は解剖学的な位置関係を全く示さず、関節状態にあったものが軟部組織の腐朽に伴い下方にずり落ちたという状態でもない。加えて、後述するように保存状態がよくないものの全身の骨格がそろっていたとは考えられない遺存の仕方である。したがって、本人骨に関しては、改葬の可能性が考えられる。

≪6次調査4号甕棺≫

本個体は三連甕棺の中裏肩部付近から頭蓋骨が出土し、下裏から頭椎以下の全身の骨が出土しており、頭位を上裏側にとった仰臥屈伸の状態である。頭蓋骨は右側頭部を上、顔面側を北東側に向けた状態で出土している。頭蓋の東側から、第6胸椎から仙骨までが、第3腰椎以下で右側に1.5cmほど長軸がずれているものほぼ同

節した状態で出土している。環椎・軸椎は転落して第12胸椎の南側から出土している。椎骨の両側からはそれぞれ左右の肋骨が腰椎付近まで落ち込みまとまった状態で出土している。右肋骨の西側からは右肩甲骨・右上腕骨が出土している。右上腕は外側を上し近位を西にし長軸を東西にした状態で出土している。右上腕骨の東側からは前腕が近位を西にし長軸をほぼ東西にした状態で出土している。右桡骨は後面を上し、右尺骨は後面外側を上し、肘関節を若干屈し前腕をやや回内した状態で出土している。左肋骨の東側からは左上腕骨・尺骨が出土している。左上腕骨は近位を南に後面を上し長軸を南北にした状態で出土している。左尺骨は近位を南東にし、左上腕骨と関節した状態で出土している。

下肢は膝関節を強屈し両膝が左右に開いて器壁にもたれかかった状態である。仙骨の左右からは仙腸関節がほぼ関節した状態で左右寛骨が出土している。寛骨の東側からは股関節が関節した状態で左右大腿骨が出土している。右大腿骨は内側を上し遠位を南東にした状態で出土しており、その北側直下からは左脛骨・腓骨が出土している。左大腿骨も内側を上し近位を北東にした状態で出土しており、左大腿骨遠位の南側に接して左脛骨が出土している。

この他にも頭蓋西側の中裏胸部付近から肋骨片が出土し、左肋骨付近からは第一中足骨が出土している。

以上の出土状況から本人骨は下裏口縁側に頭をとり仰臥位で下肢を強屈した状態で埋葬されていたが、裏棺の傾斜が大きいため、軟部組織の腐朽に伴い頭椎・左右肋骨および上肢が下方に転落あるいはずれたと推定される。頭蓋西側の肋骨および第一中足骨は本来の位置関係からかなり動いた位置から出土している。これらの人骨は裏内に雨水が流入した際に浮遊して本来の位置から移動したと推定される。

上裏には銅戈と鉄剣が置かれており、右前腕にはゴホウラ製貝輪の装着が認められる。右寛骨直上および胸椎から寛骨の直下から管玉が並んだ状態で出土している。さらに腰椎付近からは勾玉も出土している。これらの副葬品の出土状況に関する詳細は別項を設ける。

≪6次調査5号裏棺≫

本個体は合わせ口式の裏棺の上裏から頭蓋骨から上部胸椎までが出土し、下部胸椎以下が下裏から出土しており、頭位を上裏側にとった仰臥屈葬である。

頭蓋は粘土で設けられた枕の上から頭頂部を西にし顔面が南を向いた状態で出土している。頭蓋の西側からは上部胸椎および左右肋骨片と左右肩甲骨・左右鎖骨が出土している。これらの部位は胸椎を挟んでおおよそ北側に右側、南側に左側が位置している。下裏の口縁付近から左上腕骨が近位を東にし長軸を東西にした状態で出土している。左前腕は近位を北東に遠位を南西にし、上腕と関節し回外した状態で出土している。この北側からは左手の基節骨・中節骨が近位を南側にしまとまった状態で出土している。頭蓋の北西側からは右上腕骨が長軸を東西に近位を東にした状態で出土している。この西側からは右前腕が近位を北にし長軸を南北にした状態で出土している。右上肢は関節状態になく、肘関節を軽屈し前腕を回内した状態である。左上腕骨間のやや右上腕寄りの位置から腰椎が上面を東に前面をやや斜め上にし関節した状態で出土している。さらにその西側からは仙骨・左寛骨が上面を上し前面を西にし、仙腸関節がほぼ関節した状態で出土している。これらの骨の西側からは左右下肢が膝関節を強屈し膝が左側に倒れた状態で出土している。

以上の出土状況から、本人骨は上裏側（東側）に頭位をとり仰臥位で下肢を軽屈し、下肢を強屈し左側に倒した状態で埋葬されていたと推定される。その後軟部組織の腐朽に伴い、傾斜のある上裏側に位置していた上肢が下裏底部側にずり落ちた際、左上肢は手関節が外れ、掌は腹部付近に崩落し前腕部は裏棺壁に添って遠位側が若干持ち上がったような状態になったと推定される。

本個体の頭部付近から勾玉が出土している。左右上肢骨は貝輪を装着した状態で出土している。特に左上肢は肘関節付近から中手骨・基節骨まで貝輪装着範囲が及んでいる。

◀ 9次調査1号墓棺 ▶

本個体は、接口式墓棺の上裏側に頭位をとった屈葬である。上裏の口縁付近から頭蓋片が出土している。下裏からは、口縁側から頭蓋骨、左鎖骨、下顎骨、右上腕骨が出土している。さらにこれらよりも底部側（西側）からは右大腿骨および椎体片が出土している。

以上のように本人骨は全く関節状態にないものの、上裏側から下裏底部側に向かって、頭蓋、上肢、下肢の順で出土していることから、頭位を上裏側（東）にとった屈葬であると推定される。

◀ 9次調査2号墓棺 ▶

人骨は、接口式墓棺下裏の底部付近からまとまった状態で出土している。胴部よりから上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。この南西側からは肋骨・左脛骨・大腿骨・中足骨・歯牙がまとまった状態で出土している。以上のように本人骨は下裏底部付近に落ち込んだ状態で出土しており全く関節状態にないもの、おおむね上肢が北（下裏胴部側）下肢が南（下裏底部側）から出土していることから、頭位を上裏側（北）にとった屈葬であると推定される。

◀ 9次調査3号墓棺 ▶

人骨は、接口式墓棺下裏に仰臥屈葬の状態で見つかり、最も口縁よりから左右の上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。左右上腕骨の間からは頭蓋片・歯牙・肋骨片が出土している。上腕の南西側すなわち下裏底部側からは下肢がまとまった状態で出土している。右下肢は長軸を北西―南東にし、大腿骨が近位を南東にし、脛骨が近位を北西にした状態で出土している。左下肢は右下肢の南側に重なるようにして、長軸を東西にした状態で出土している。これらの下肢は膝関節を強屈し膝が右側に倒れた状態である。左脛骨遠位端に接してその東側から左距骨・踵骨など足骨がまとまった状態で出土している。以上のように本人骨は頭位を上裏側（北）にとった仰臥屈葬であり、埋葬後下裏底部方向に上半身がずり落ちたと推定される。

◀ 9次調査12号墓棺 ▶

人骨は、合わせ口式の小児用墓棺から頭位を上裏側にとった屈葬の状態で見つかり、頭蓋片が上裏側（西）、下肢が下裏底部側（東）から出土している。人骨は上裏内胴部付近から頭蓋片・歯牙が出土しており、その東側つまり上裏口縁側から肋骨および下肢が出土している。下肢は上裏と下裏の口縁付近から長軸をほぼ東西にした状態で出土している。大腿骨は近位を東にし脛骨は近位を西にした状態で出土している。脛骨の回からは歯牙が1点出土している。以上のように本人骨は頭位を上裏側（西）にとった屈葬であり、埋葬後全体的に下裏底部方向にずり落ちたと推定される。

◀ 9次調査5号石棺墓棺併用墓 ▶

本個体は、裏と石材を併用した棺内から、頭位を裏側にとった伸展葬の状態で見つかり、裏内から椎骨片が出土している。石棺内北西側からは椎骨・寛骨・大腿骨片が出土している。石棺の小口側（南東）からは左右脛骨および距骨・踵骨が出土している。以上のように本人骨は石棺内の裏に近い北西側から腰部および大腿骨が出土し、小口側から下腿と足骨が出土していることから、石棺内に下半身が伸展した状態で埋葬されており、上半身は裏内に位置していたと推定される。したがって、本個体は頭位を裏側（北西）にとった伸展葬であると推定される。

3. 人骨所見

以下に人骨の所見を報告する。なお、4次調査出土人骨に関しては既報告文（土肥他1987）の内容を引用する。なお、体裁に関しては一部改編を加えている。

≪4次調査1号猿棺人骨≫

残存部位は以下に示すように下半身が大半である：上腕骨遠位部細片、仙骨小片、左右大腿骨骨体上半部、左右脛骨下半部、赤色顔料の付着した頭蓋骨細片1個。

大腿骨はややきゃしゃな印象を受け、粗線の発達も不良であることから、女性の可能性が強いように思われる。年齢については、骨端線が消失しており、成人に達していたことは確かであるが詳細は不明である。

≪4次調査1号石棺出土人骨≫

【保存状態】

頭蓋骨は、比較的保存良好であったが、四肢骨の骨質は非常にもろく計測に耐えるものはほとんどなかった。残存部位は以下のとおりである：右側頭部と下顎枝を破損する頭蓋骨、左右の肩甲骨片、左右上腕骨上半部、左前腕骨骨体部、右橈骨骨体下半部、左右大腿骨下半部、右脛骨骨体部、左右寛骨片、及び少量の椎骨と肋骨片。残存歯の歯式を以下に示す。

×	M ¹	P ²	P ¹	×	C	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂

(○)歯根開放 ×歯根閉鎖 /欠損 △歯根のみ ●遊離歯 ()未萌出 ×歯痛 以下同様)

【年齢・性別】

乳様突起・眉弓の発達は弱く、四肢骨もきゃしゃである。また、大坐骨切痕の角度も大きいことから、性別は女性と推定した。

年齢は、頭蓋主縫合が内板・外板ともに全て開離していることと、歯牙咬耗度(Brocca1～2度)から成年(30代)と推定した。

【形質】

計測値を表1に示す。脳頭蓋の各示数は、それぞれ中頭(M8/1)・正頭(M17/1)・平頭(17/8)に属している。顔面の高径は低く、各示数は低顔の傾向を示している。図1は、周辺集団のものとともに上顔高と中顔幅の分布を見たものであるが、本人骨は平均的な豊後古墳人(永井1985)の特徴を持っているようである。眼窩は中～高型、鼻示数は広鼻型に属していた。また、鼻根部は表1の数値からも明らかのように扁平で、歯槽性突顎の傾向がうかがえる。

さらに、頭蓋非計測的小変異の観察の結果、表2に示すように、顎管欠如(右)前頭側頭連結(左)、眼窩上縁孔(左)が認められた。

【特記事項】

頭蓋骨に赤色顔料の付着が認められた。

上顎左側切歯は矮小化し、円錐歯となっている(図版2)。そして、先天的な欠如と思われる上顎右側切歯の位置には上顎犬歯が転位している。本来の犬歯の位置は歯槽が完全に閉鎖しており、小白歯の舌側は近心側に捻転している。このような犬歯の転位は、側切歯が欠如する個体において、乳歯と永久歯が交替する際にしばしば起こるとされている(藤田1949)。また、その際、乳犬歯はそのままある時期まで(若～壮年期まで残ることもある)残存す

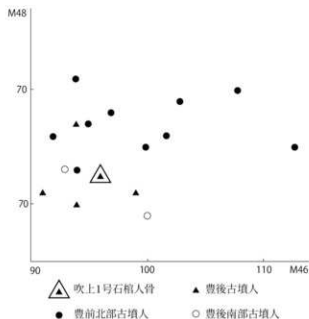


図1 中顔幅・上顔高(女性)

ることが多いが、次第に歯根が吸収され、遂には脱落すると言われている（藤田 1949）。本人骨はこの様な例と思われる。永久歯の転位についてはしばしば報告されており（河西 1952；柏村 1954）、側切歯と犬歯が完全に入れ替わることもあり得る（木本 1957）ため抜歯の可能性を全く否定してしまうことは出来ないが、一見ただけでは、風習的抜歯と誤認してしまう危険性を持つ例であろう。この様な例は全体からすれば希有なものであろうが、風習的抜歯を推定する際には、今後とも注意深い観察が必要と思われる。

また、本人骨の第 3 大白歯は全て未萌出であった。レ線による観察が不可欠であることは言うまでもないが、歯槽骨の形状等から推察すると、先天的な欠如の可能性が高い。

咬合型式は鉗子咬合、咬耗度は Brocca の 1～2 度であった。また、大白歯の咬頭型は表 7 に示すように上顎が 4・4 型、下顎はすべて +5 型であった。う歯、歯周症等は認められなかった。

《4 次 2 号石棺出土人骨》

【保存状態】

1 号石棺人骨と同様に、保存状態は不良である。残存部位は以下の通りである：少量の頭蓋骨小片、右上腕骨骨体部、左上腕骨遠位部、左右前腕骨の遠位部、左右寛骨（右は保存不良）、右大腿骨上半、遠位端を欠く左大腿骨、左右の脛骨片。

残存歯の歯式を以下に示す。

M ³	/	M ¹	/	/	(C)	(I ²)	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	/	/
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	/	/	M ₂	/

【性別・年齢の推定】

大坐骨角はやや大きく、微かな前耳状溝が認められるが、恥骨下角および恥骨の形状は男性的である。また、四肢骨も太く頑丈なことから、性別は男性と推定した。

年齢は、歯牙咬耗度（Brocca の 1～2 度）と恥骨結合面観（埴原の 3～4 期（埴原 1952））から成年（30 代）と推定した。

【形質】

1) 四肢骨

計測表は表 5・6 に示す通りである。大腿骨に扁平傾向が認められる。

【特記事項】

ほぼ全身骨に赤色顔料の付着が認められる。

上顎右側切歯と犬歯は接合しており、また、上顎右第 3 大白歯は矮小化している。1 号石棺人骨の例と共に興味深い所見である。咬合型式は不明、咬耗度は Brocca の 1～2 度であった。表 7 に示すような咬頭型は上顎第 1 大白歯が 4 型、下顎第 1 大白歯が Y5、第 2 大白歯が +5、第 3 大白歯が +6 型であった。

《6 次調査 3 号墓出土人骨》

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨はラムダ縫合を含む右頭頂骨片と後頭骨片が遺存している。主要三縫合は、矢状縫合が外板は開いているが内板は閉じかけており、ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。

上肢骨は、右上腕骨骨体部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達しているものの骨体は細い。

下肢骨は、左大腿骨遠位側 3 分の 1、左脛骨近位端片、左腓骨遠位側 3 分の 1 が遺存している。

〈性別と年齢〉性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、頭蓋主要三縫合の閉鎖状況から成人と推定される。

【特記事項】

頭蓋片には赤色顔料の付着が認められる。

≪ 6 次調査 4 号墓棺出土人骨 ≫**【保存状態】**

本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は左眼窩付近を除く前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨が遺存している。冠状縫合は外板・内板ともに閉鎖している。矢状縫合は外板は閉鎖しかけであり内板は閉鎖している。ラムダ縫合は外板が開いており、内板はほぼ閉鎖している。歯牙は上顎左犬歯もしくは下顎右第一小臼歯のエナメル質片が遺存している。咬耗度は橋原の 2° b である。外後頭隆起・乳様突起は発達している。

軀幹骨は、環椎・軸椎の他第 6 - 第 12 胸椎・腰椎 5 点および仙骨と左右肋骨数本ずつが遺存している。腰椎にはリッピングが認められる。

上肢骨は、右肩甲骨と右上腕骨頭片および遠位片と左上腕骨遠位側 3 分の 1、右橈骨・尺骨および左尺骨近位側 3 分の 1 が遺存している。

下肢骨は左右寛骨、右大腿骨および左大腿骨・右脛骨の近位側 3 分の 1、右腓骨骨体部、左脛骨近位端片および左右脛骨遠位端片が遺存している。他にも左右距骨が遺存している。寛骨の大坐骨切痕角は小さい。大腿骨の粗線および脛骨ヒラメ筋線は発達している。

【年齢・性別】

年齢は、頭蓋主縫合の閉鎖状況と歯の咬耗度および腰椎のリッピングから熟年と推定される。性別は、大坐骨切痕角が小さく大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線が発達していることから男性と判定される。

【形質的特徴】

本個体は、四肢骨の計測が可能であったのでその計測値を表に示す（表 3・4・7）。橈骨は骨体の周径が計測可能であり、いずれの値も比較集団と同じ程度である。尺骨は最大長は比較集団の中で津雲縄文集団と同程度の値であり、周径は比較群中最も小さい値である。大腿骨は最大長・自然位長ともに比較群中最も小さい値である。矢状径は比較集団中最も大きく、横径は津雲縄文集団と同程度の値である。骨体中央断面示数は 121. 2 であり強い柱状性を示す。脛骨の計測値はいずれも北部九州古墳集団と同程度の値である。

大腿骨最大長を用いた藤井式に基づく推定身長は 153.2 cm であり、比較群中最も低い値である。

【特記事項】

頭蓋から大腿部にかけて赤色顔料の付着が見られる。

上述の下肢の発達以外にも、上肢の円回内筋・方形回内筋付着部や尺骨粗面および下肢の大殿筋粗面・腸腰筋付着部など四肢骨全体的に発達が見られる。

腰椎および寛骨の閉鎖孔にリッピングが認められる。

◀ 6次調査5号壘棺出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は冠状縫合を含む前頭骨片・右頭頂骨片と矢状縫合およびラムダ縫合を含む左右頭頂骨片・後頭骨片が遺存している。冠状縫合は外板は開いており内板は閉鎖している。矢状縫合は外板・内板ともに開いている。歯牙も依存しており、残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

/	/	/	●	●	/	/	/	/		/	/	/	●	●	/	/	/
M ₃	M ₂	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/	P ₁	P ₂	/	/	/
●	●													●	●	●	
C																	

歯牙の咬耗度は折原（1957）の 1° c ~ 2° a である。

軀幹骨は、胸椎 10 点・腰椎 4 点および仙骨右側 3 分の 2 と左右肋骨数本ずつが遺存している。腰椎にはリッピングが認められる。

上肢骨は、左右肩甲骨の関節窩付近片と左および右鎖骨の内側 3 分の 1、骨頭を除く右上腕骨、骨体部をのぞく左上腕骨、右桡骨・尺骨の遠位側 2 分の 1、左桡骨・尺骨、左第 1 - 5 中手骨・左三日月骨・左舟状骨・左大菱形骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。

下肢骨は、腸骨翼および恥骨下枝を除く右寛骨、左寛骨の恥骨上枝、右大腿骨大転子付近片・骨体部・遠位端、左大腿骨遠位端、骨体部を除いた右脛骨、左脛骨・右腓近位部、左腓骨骨体部・左距骨・左踵骨・左立方骨・左内側楔状骨・左中足骨 2 点および右中間楔状骨・内側楔状骨・右中足骨 2 点が遺存している。寛骨の大坐骨切痕角は大きい。前耳状溝が見られる。大腿骨の粗線および脛骨ヒラメ筋線はやや発達している。

【年齢・性別】

年齢は、頭蓋主縫合の閉鎖状況および歯の咬耗度から成年後半から熟年前半と推定される。性別は、上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線はやや発達しているもの的大坐骨切痕角が大きいことから女性と判定される。

【特記事項】

上半身に赤色顔料の付着が見られる。

女性ではあるものの、上述の部位以外にも肋鎖靭帯・大胸筋・大門筋・広背筋・回内筋・方形回内筋など様々な筋の付着部に発達が見られる。

第 4 腰椎の椎弓右上部に骨増殖が認められる。

前耳状溝が認められることから、妊娠・出産経験があったと推定される。

◀ 9次調査1号壘棺出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨は右眼窩付近と冠状縫合を含む前頭骨片、右頬骨の眼窩付近片、ラムダ縫合を含む左右頭頂骨片、鱗状部を除く右側頭骨、後頭骨および下顎体が遺存している。主要三縫合は、冠状縫合が外板は閉じかけており内板は閉じている。矢状縫合が外板・内板ともに閉じており、ラムダ縫合は外板は開いており内板は閉じかけている。眼窩上隆起はやや発達しており乳様突起・外後頭隆起は発達していない。歯牙は上顎中切歯のみが遺存している。残存している下顎は右犬歯および左小臼歯部以外は全て歯槽が閉鎖している。

軀幹骨は、椎骨片 5 点が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨・左肩甲骨関節窩付近・左上腕骨骨頭・右上腕骨骨体部が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。

下肢骨は、右大腿骨近位側片が遺存している。

【性別と年齢】性別は、眼窩上隆起・上腕三角筋粗面はやや発達しているものの、乳様突起・外後頭隆起が発達していないため女性と判定される。年齢は、頭蓋主要三縫合の閉鎖状況および歯槽の閉鎖状況から熟年以上と推定される。

◀ 9 次調査 2 号墓棺出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。

歯牙は下顎左第一小白歯と第一大臼歯が遺存している。歯牙咬耗度は橋原（1957）の 2' b である。

軀幹骨は、肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左上腕骨骨体部が遺存している。上腕骨骨体部はやや細いものの三角筋粗面はやや発達している。

下肢骨は、左右不明大腿骨遠位端片、左脛骨骨体部・距骨片・中足骨 2 点が遺存している。脛骨骨体部はやや細い

【性別と年齢】性別は、上腕および脛骨の骨体が細いことから女性の可能性が考えられる。年齢は、歯牙咬耗度から成人と推定される。

◀ 9 次調査 3 号墓棺出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は右上顎骨の眼窩付近片と下顎の左下顎頭付近片が遺存するのみである。歯牙も一部遺存しており、上顎左中切歯・犬歯・上顎右第二小白歯・上顎左右第一大臼歯やその他部位同定困難なエナメル質片が遺存している。歯牙咬耗度は橋原（1957）の 1' c である。

軀幹骨は、軸椎の歯状突起付近および肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左上腕骨骨体部と基節骨 1 点が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。

下肢骨は、左右大腿骨骨体片、右脛骨骨体部・左右脛骨近位端・左右脛骨遠位端・左腓骨片・左距骨・左踵骨・左立方骨・左第 5 中足骨が遺存している。大腿骨の粗線は発達している。

〈性別と年齢〉性別は、上腕三角筋粗面および大腿骨粗線が発達していることから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度から成年と推定される。

◀ 9次調査 12号墓棺出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。歯牙が一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccc} \bullet & & & & & \bullet \\ (M^1) & / & / & / & / & (I^1) \\ & \bullet & & & & \bullet \\ & m^2 & / & / & / & i^1 \\ & m_2 & m_1 & c & / & / \\ & \bullet & \bullet & \bullet & & \bullet \\ (M_i) & / & / & (C) & / & (I_i) \\ & \bullet & & \bullet & & \bullet \end{array}$	$\begin{array}{cccccc} & & & & & \bullet \\ & / & / & / & / & (M^1) \\ & \bullet & & & \bullet & \bullet \\ & i^1 & / & / & m^1 & m^2 \\ & / & / & / & m_1 & m_2 \\ & & & & \bullet & \bullet \\ (I_i) & / & / & / & / & (M_i) \\ & \bullet & & & & \bullet \end{array}$
--	--

第一大臼歯は歯冠のみ完成した状態である。

軀幹骨は、肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右不明尺骨骨幹部片が遺存している。

下肢骨は、左右不明大腿骨骨幹部片、左右不明脛骨骨幹部片が遺存している。

【性別と年齢】性別は、判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は、歯牙の萌出状況から幼児（3歳前後）と推定される。

◀ 9次調査 5号石棺墓棺併用墓出土人骨 ▶

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くない。

軀幹骨は、椎体片が遺存している。

下肢骨は、左右不明寛骨片・左右不明大腿骨片・左右脛骨遠位部片・左右距骨片・左右踵骨片・左右不明中足骨片が遺存している。

【性別と年齢】性別および年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

4. 親族関係

出土遺跡においては4次調査出土人骨間で親族関係の推定が可能であった。以下に4次調査の報告を引用する（土肥他 1987）。

出土 1・2号石棺は主軸を直行させて築造されたものである。この頭位の差異については、甲元真之によって被葬者の出自の差を反映したものであるとの解釈が示されている（甲元 1977）。これに即して本例を見るならば、1・2号石棺に葬られた男女は血縁的におそらくは他人であり、しかもきわめて近接して葬られていることから夫婦であった可能性すらあることになる。

そこで、歯冠計測値を用いた血縁者推定法（土肥他 1986）を本例に適用したところ、有効と考えられる歯種の組み合わせ全てにおいて高得点を得ることができた（表 8・9）。しかも、その中にはイトコまで親等が離れると有効性を失う組み合わせ（P¹P²M¹P₁P₂M_i）も含まれている。甲元の仮説は弥生時代の北部九州～山口地方について提唱されたものであり、本例とは時期・地域ともに異なることから甲元説自体を本例で云々し得ないことは言うまでもない。しかし、表 5の結果はこの2体が血縁関係にあった可能性を強く主張しており、甲元説に即した解釈が成立困難であることを示している。

都出比呂志は、共同墓地の頭位について、甲元説をある程度承認しつつも、出自原理にもとづかない事例の

存在も示唆している(都出 1986)。よって、仮に出自によって頭位が規定される社会が存在したとしても、吹上遺跡の事例は、都出が示したような、出自による頭位規制を行わない例の一つとして考えた方がいだろう。しかし、本遺跡における墓群の全体像も群構成も今のところ不詳であり、今回の事例のみで該期のこの遺跡における親族関係を推定し得るものではない。したがって、本遺跡を含めた日田盆地における資料の増加を待ちたい。

5. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。その結果は以下の通りである。

形質的特徴に関しては、本遺跡出土人骨は4次調査の1体を除いては保存状態があまり良くなく、計測に耐える人骨は少なかった。その結果を見ると、眼窩はやや高く一方で顔が低く鼻が広いといった形質的特徴を示している。4次報告後の資料の増加により、このような北部九州・弥生・古墳人と豊後古墳人の形質的特徴を併せ持つ様相が日田・玖珠など豊後山間部において見られることが明らかになってきており、豊後古墳人内の地域性が指摘されている(田中・大森 1999; 石川他 2004; 田中他 2013)。本例もまた、個人的な特徴の可能性を残す一方で、当該地域の形質的特徴を示す可能性も考えられる。

副葬品を豊富に有する6次調査4号・5号喪棺出土人骨に関しては、ともに四肢の筋付着部に発達が見られることから、すでに田中が指摘していた様にある程度肉体労働を伴う生業活動に従事していたことは明らかであろう(田中 2000)。副葬品の出土状況に関しては興味深い所見が得られており、詳細は別項をご参照いただきたい。

親族関係に関しては、近接する石棺に埋葬された男女に血縁関係が推定されている。古墳時代前半期という石棺の構築時期を考慮すると、4次調査報告後に研究が大きく進展した古墳時代親族構造研究(田中 1995)のモデル通り、埋葬の際に夫婦が単位となっていない状況を示しうる事例であるといえよう。

最後に本報告にあたり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜った。深謝したい。

<参考文献>

- 石川健・舟橋京子・渡辺誠・原田智也・田中良之, 2004: 長湯横穴墓出土人骨について。長湯横穴墓群 桑畑遺跡。大分県教育委員会。
河西秀智, 1952: 歯牙位置交換の2例。解剖学雑誌, 27。
柏村 毅, 1954: 両側性に永久歯の位置交換と先天欠如をみた一症例。解剖学雑誌, 29。
本本信義, 1957: 転換歯の1例。歯科学報, 57。
甲元良之, 1977: 弥生時代の社会。金剛院・佐原真編。古代史発掘。講談社。
田中良之, 1995: 古墳時代親族構造の研究
田中良之, 2000: 墓地からみた親族・家族。古代史の論点2。小学館。
田中良之・大森円, 1999: 陣ヶ台遺跡出土の人骨について。陣ヶ台遺跡。玖珠町教育委員会。
田中良之・舟橋京子・米元史織・高松浩史・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩, 2013: 志津里遺跡B地区出土人骨について。志津里遺跡B地区1～3次発掘調査報告書。大分県教育庁埋蔵文化財センター
都出比呂志, 1986: 墳墓。近藤義郎他編。岩波講座日本考古学4。岩波書店。
橋原 博, 1957: 日本人歯牙咬耗度に関する研究。熊本医学会雑誌, 31-4。
上肥直美・田中良之・船越公威, 1986: 歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用。人類学雑誌, 94 (2)
上肥直美・田中良之・永井昌文, 1987: 吹上遺跡出土人骨について。日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ。日田市教育委員会。
永井昌文, 1985: 北部九州・山口地方、シンゴジウム「国家成立前後の日本人」。季刊人類学, 16 (3)。
植原和郎, 1952: 日本人男性屍骨の年齢変化について。人類学雑誌, 62。
藤田恒太郎, 1949: 歯の解剖学。金原出版。東京。

第1表 主要頭蓋計測項目 の平均値比較 (女性) (mm)

項目	吹上 ¹⁾ 4次1号 右値	志津里 ²⁾		鹿嶋 ³⁾		鹿後 ⁴⁾		肥前 ⁵⁾		北豊前 ⁶⁾	
		〔古墳〕		〔古墳〕		〔古墳〕		〔古墳〕		〔古墳〕	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	177	2	177.0	14	171.6	4	174.3	3	175.7	15	177.9
8 頭蓋最大幅	138	4	139.5	15	135.4	4	136.7	1	136.0	17	138.5
17 Ba-Brr高	125	2	131.0	12	128.5	3	131.0	4	134.3	10	130.9
8/1 額長幅示数	78.0	2	78.8	12	79.1	3	78.3	1	76.8	15	77.4
17/1 額長幅示数	70.6	1	74.0	9	74.7	3	74.3	2	73.0	8	74.1
17/8 額示数	90.6	2	93.9	9	95.3	2	97.1	1	92.6	10	94.1
45 額骨弓幅	(128)	2	130.5	12	129.9	2	131.0	3	136.0	6	133.0
46 中額幅	97	3	102.0	18	98.2	3	97.3	4	102.0	16	99.1
47 額高	104	0	-	7	106.4	1	114.0	0	-	4	115.5
48 上額高	63	3	63.0	17	65.6	2	67.5	3	69.7	14	67.2
47/45 額示数 (K)	81.3	0	-	6	81.6	1	86.4	1	85.1	2	83.5
47/46 額示数 (V)	107.2	0	-	7	107.8	2	108.8	1	123.9	4	113.4
48/45 上額示数 (K)	49.2	1	48.3	12	50.2	2	51.5	1	49.3	5	51.7
48/46 上額示数 (V)	64.9	2	61.8	17	67.0	2	69.6	2	70.7	14	67.9
51 額高 (左)	38	4	40.0	17	40.8	3	41.7	4	42.0	16	41.4
52 額高 (右)	33	4	32.3	17	33.4	3	33.7	6	33.5	17	33.9
52/Bi (L) 額高示数 (左)	86.8	8	80.6	16	81.9	3	80.9	4	80.5	16	81.6
54 鼻橋	26	3	26.0	15	24.4	4	26.3	4	25.3	14	25.6
55 鼻高	47	3	49.0	16	48.1	2	49.0	3	47.0	13	48.4
54/55 鼻示数	55.3	3	53.1	14	51.0	2	55.2	3	53.0	13	53.2
Frontal Chord	90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Subtense	11.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Index	13.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Chord	2.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Subtense	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Index	26.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Zygomatic Chord	96	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Subtense	23.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Index	34.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

項目	吹上 ¹⁾ 6次4号櫛櫃	南島 ²⁾		豊後 ³⁾		肥前 ⁴⁾		北九州 ⁵⁾		津波 ⁶⁾		西日本 ⁷⁾	
		〔古墳〕		〔古墳〕		〔古墳〕		〔古墳〕		〔現生〕		〔現代〕	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	4	178.3	6	175.0	3	173.3	86	177.0	39	175.9	57	172.8	
8 頭蓋最大幅	2	132.5	10	134.7	4	137.8	84	138.4	41	141.2	57	134.0	
17 Ba-Brr高	1	125.0	8	127.5	2	132.0	66	130.7	28	127.1	57	131.3	
8/1 額長幅示数	2	75.1	6	75.8	3	80.0	72	78.1	37	80.2	57	77.6	
17/1 額長幅示数	1	70.2	5	72.5	2	74.3	62	74.1	28	72.2	57	76.0	
17/8 額示数	1	95.4	7	94.1	2	97.8	56	94.9	27	89.5	57	98.0	
45 額骨弓幅	2	129.5	9	131.4	3	132.0	61	131.3	15	132.6	57	123.9	
46 中額幅	3	98.7	11	96.6	4	98.0	67	99.8	21	99.6	57	93.4	
47 額高	2	115.5	7	106.6	4	105.5	45	116.3	21	106.2	14	112.9	
48 上額高	3	62.7	11	62.8	3	61.3	66	70.1	23	62.6	55	68.2	
47/45 額示数 (K)	1	86.9	6	80.8	3	77.6	34	88.7	11	80.1	14	90.8	
47/46 額示数 (V)	2	113.8	7	108.6	4	107.7	39	116.7	15	108.9	14	119.0	
48/45 上額示数 (K)	1	52.5	8	47.2	2	43.6	49	53.7	11	47.6	55	55.0	
48/46 上額示数 (V)	2	63.9	10	65.2	3	62.7	57	70.2	15	63.8	55	72.9	
51 額高 (左)	2	42.0	11	40.0	3	42.0	66	41.6	18	41.9	57	40.5	
52 額高 (右)	2	33.5	11	31.9	4	32.0	65	34.1	14	31.2	57	34.0	
52/Bi (L) 額高示数 (左)	2	79.8	11	80.1	3	76.2	62	82.0	14	81.5	57	83.9	
54 鼻橋	2	27.0	9	25.8	4	26.0	72	26.6	36	25.4	57	25.0	
55 鼻高	4	45.8	10	47.4	4	45.3	71	49.8	25	46.2	57	48.6	
54/55 鼻示数	2	57.7	9	54.5	4	57.7	69	53.5	23	54.7	57	51.4	

1) 土肥田 (1987) 2) 田中雄 (2013) 3) 九州大学医学部解剖学第2講座 (2012) 4) 中嶋・永井 (1989) 5) 高田 (1988) 6) 原田 (1954)

第3表 上肢骨の計測値と他集団との比較 (男性) (mm)

項目	吹上 ¹⁾ 6次4号櫛櫃	北九州 ¹⁾		北九州 ²⁾		津波 ³⁾		九州 ⁴⁾		
		〔古墳〕		〔現生〕		〔縄文〕		〔現代〕		
		R	L	N	M	N	M	N	M	
3 最小周	-	42	25	42.2	78	43.1	38	44.0	63	40.1
4 骨体横径	-	15	30	17.3	79	17.2	42	17.1	63	16.0
4a 骨体中央横径	-	15	10	16.7	50	16.0	42	12.0	63	15.2
4b 骨体矢状径	-	11	30	12.3	79	12.5	42	12.0	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	-	11	10	12.3	50	12.6	-	-	63	11.9
5/4 骨体断面示数	-	73.3	30	71.1	79	72.6	42	70.2	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	-	73.3	10	74.1	50	78.6	-	-	-	-
尺骨										
1 最大長	247	-	2	241.5	12	253.2	19	249.1	62	236.2
1 横径	220	-	4	223.5	15	224.7	25	219.7	64	209.2
3 最小周	-	33	13	36.8	63	37.4	34	37.7	65	35.8
11 矢状径	-	12	24	13.4	100	13.2	50	14.3	63	12.8
12 横径	-	13	24	17.4	100	17.6	50	16.3	64	16.5
3/2 長厚示数	-	-	4	17.3	15	16.8	25	17.4	63	17.0
11/12 骨体断面示数	-	92.3	34	77.3	100	75.4	50	88.5	63	74.9

1)九州大学医学部解剖学第2講座 2)中嶋・永井 (1989) 3)清野・平井 (1928) 4)専頭 (1957)、溝口 (1957)

第2表 頭骨形態小変異

TRAITS	吹上1号石塚		
	R	M	L
1. Occipital lambda	-	-	-
2. Os infra	-	-	-
3. Bistretic suture (10mm ²)	-	-	-
4. Superior sagittal sinus groove, turning to the left	-	-	-
5. Complan canal, completely divided	+	-	-
6. Jugular canal, completely divided	-	-	-
7. Jugular foramen, completely divided	-	-	-
8. Precondylar tubercle	-	-	-
9. The third occipital condyle	-	-	-
10. Astenic ossicle	-	-	-
11. Occipitomastoid ossicle (excl. astenic ossicle)	-	-	-
12. Occipitomastoid ossicle (incl. astenic ossicle)	-	-	-
13. Pterygospinous foramen	-	-	-
14. Temporal dehiscence (1mm ²)	-	-	-
15. Parietal notch bone (5mm ²)	✓	-	-
16. Parietal foramen absent	-	-	-
17. Squamous ossicle	✓	-	-
18. Epitric ossicle	-	-	-
19. Frontotemporal articulation	-	-	+
20. Metopism	-	-	-
21. Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	-	-	+
22. Accessory infraorbital foramen	-	-	-
23. Medial palatine foramen	-	-	-
24. Maxillary tonsil	-	-	-
25. Palatine tonsil	-	-	-
26. Posterior vestige of transverse pterygoid suture	-	-	-
27. Zyg-facial foramen absent	-	-	-
28. Closed bridge	-	-	-
29. Multiple mental foramina	-	-	-
30. Mandibular tonsil (incl. tricus)	✓	-	-
31. Malobryd canal	✓	-	✓

+有り -無し / 不明

第4表 下肢骨の計測値と他集団との比較 (男性)

項目	(mm)									
	吹上		北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨										
1 最大長	398	-	34	427.9	60	430.9	19	414.1	59	406.5
2 自然位長	392	-	19	426.0	18	427.7	19	411.0	59	403.2
6 中央矢状径	31.5	-	79	28.7	162	29.7	47	29.0	59	28.5
7 中央横径	26	-	80	27.6	166	28.0	47	26.0	59	25.6
8 中央周径	92	-	74	88.5	161	90.8	47	87.4	59	82.4
9 骨体上横径	31	-	65	32.3	115	32.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	28	-	65	25.7	115	26.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数	23.5	-	19	20.4	18	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	121.2	-	79	104.6	162	106.4	47	111.8	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	90.3	-	65	80.1	115	80.5	43	83.1	58	82.8
胫骨										
8a 栄養孔最大径	34	-	54	34.7	153	36.5	38	35.2	60	30.6
9a 栄養孔位横径	23	-	54	24.2	153	23.3	38	22.2	61	23.7
10a 栄養孔位周径	94	-	54	94.3	151	96.9	38	92.8	61	88.9
9a/8a 栄養孔位断面示数	67.6	-	54	69.9	152	69.5	38	63.0	60	77.5

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)中橋・永井 (1989) 3)清野・平井 (1928) 4)阿部 (1955)、齋藤 (1955)

第5表 上肢骨の計測値と他集団との比較 (女性)

項目	(mm)									
	吹上		北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨										
7 骨体最小周	62	-	15	54.5	47	56.9	42	53.9	36	54.8
尺骨										
3 最小周	36	-	8	33.3	34	34.4	24	32.8	12	32.1

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)中橋・永井 (1989) 3)清野・平井 (1928) 4)専ら (1957)、横口 (1957)

第6表 下肢骨の計測値と他集団との比較 (女性)

項目	(mm)									
	吹上		北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨										
6 中央矢状径	26	-	42	24.5	112	25.9	45	25.2	13	23.6
7 中央横径	31	-	42	25.9	112	26.6	45	24.2	13	23.2
8 中央周径	94	-	40	78.9	111	82.2	45	78.0	13	74.2
9 骨体上横径	35	35	33	30.5	86	31.2	42	28.4	13	27.5
10 骨体上矢状径	26	26	33	21.9	86	23.2	42	22.2	13	21.3
6/7 中央断面示数	83.9	-	42	94.9	112	97.7	45	104.5	13	102.0
10/9 上骨体断面示数	74.3	-	33	72.0	86	74.9	42	78.2	13	77.1
胫骨										
8a 栄養孔最大径	34	-	22	30.9	97	31.3	37	30.5	14	28.1
9a 栄養孔位横径	23	-	23	21.1	98	22.7	36	19.4	14	21.1
10a 栄養孔位周径	94	-	24	82.9	96	84.0	35	81.3	14	78.2
9a/8a 栄養孔位断面示数	67.6	-	22	68.9	97	72.6	36	63.6	14	74.9

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)中橋・永井 (1989) 3)清野・平井 (1928) 4)阿部 (1955)、齋藤 (1955)

第7表 身長の推定値と他集団との比較 (藤井式を用いて算出)

吹上遺跡の吹上骨出土人骨		ISS 2
北部九州・山口 (古墳)		162.6 (34)
南部九州 (古墳)		158.3 (7)
中橋 (古墳)		159.1 (14)
吉富 (古墳)		160.8 (17)
関東・東北 (古墳)		162.1 (28)
北部九州・山口 (弥生)		162.6 (129)
津雲 (縄文)		159.9 (13)
北部九州 (近代)		167.7 (37)

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)池田 (1985)
3)中橋・永井 (1989) 4)清野・平井 (1928)
(): 個体数

第9表 吹上遺跡石棺被葬者

の Q モード相関係数

要素	吹上 4次1号石棺	
	吹上 4次1号石棺	吹上 4次2号石棺
上下顎 P1Q1P2M1M2	0.581	
上下顎 P1P2M1	0.571	
上顎 Q1P1M1	0.817	
下顎 P1P2M2	0.822	

第8表 歯冠計測値

項目	R	4次1号石棺人骨		R	4次2号石棺人骨		
		特記事項	L		特記事項	L	特記事項
MD	U1	8.8	-	8.8	-	9.7	
	U2	-	-	欠如?	-	欠如?	
	UC	7.6	転位	-	転位	8.6	
	UP1	7.6	7.7	-	-	8.2	
	UP2	7.0	7.1	-	-	7.3	
	UM1	10.2	咬蝕型4	10.0	咬蝕型4	10.7	
	LM2	-	咬蝕型4	-	咬蝕型4	-	
	BL	UP1	9.7	9.6	-	-	10.3
		UP2	9.5	9.4	-	-	9.7
		UM1	11.3	11.3	-	-	11.5
LM2		-	11.2	-	-	-	
MD	U1	-	-	6.1	-	6.0	
	U2	6.0	6.1	7.0	-	7.0	
	LC	6.9	6.6	7.6	-	7.6	
	LP1	7.6	7.7	7.7	-	7.6	
	LP2	7.4	7.4	7.5	-	-	
	LM1	11.6	咬蝕型+5	11.6	咬蝕型+5	咬蝕型+5	
	LM2	10.9	咬蝕型+5	10.7	-	咬蝕型+5	
BL	LP1	8.2	8.0	7.9	-	8.0	
	LP2	9.0	8.2	8.7	-	-	
	LM1	10.7	10.7	11.4	-	-	
	LM2	9.6	9.6	10.4	-	-	



4次1号石棺出土頭蓋骨（正面観）



9次1号墓棺出土頭蓋骨



4次1号石棺出土頭蓋骨（側面観）



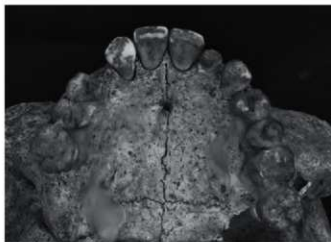
6次4号墓棺出土頭蓋骨



4次1号石棺出土頭蓋骨（上面観）



6次3号墓棺出土頭蓋骨



4次1号石棺出土上顎骨



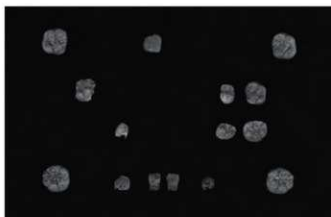
4次1号石棺出土四肢骨



9次1号墓棺出土下顎骨



4次2号石棺出土四肢骨



9次12号墓棺出土歯牙



6次4号墓棺出土上肢骨



6次3号墓棺出土大腿骨



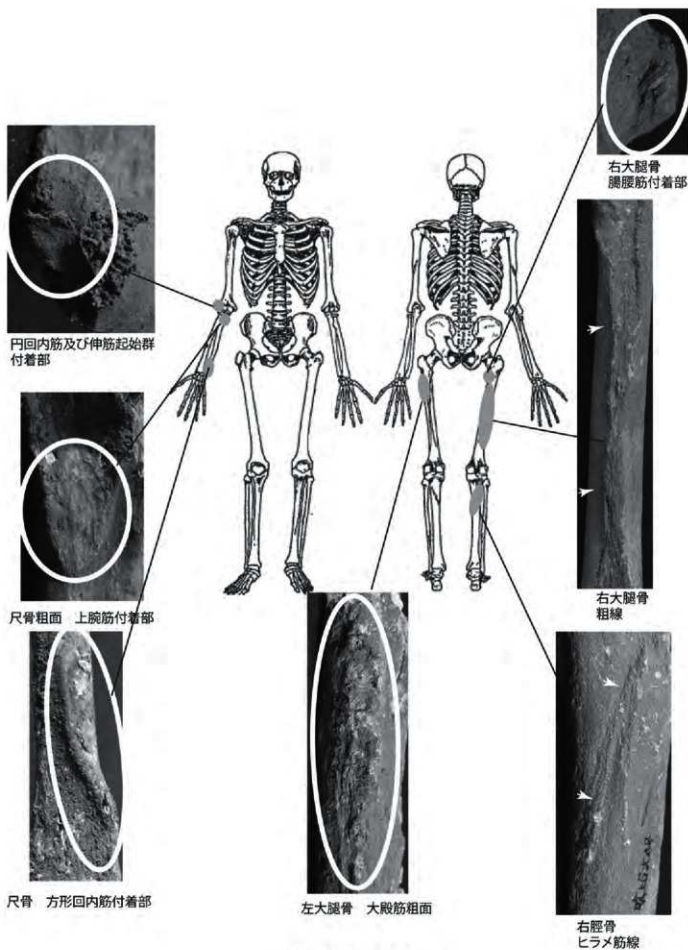
6次4号墓棺出土下肢骨



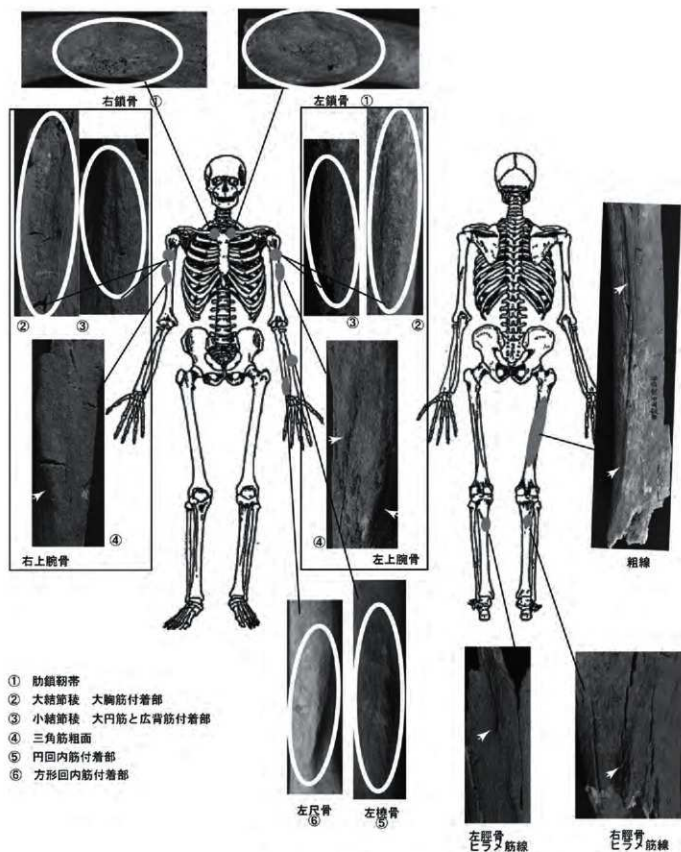
9次2号墓棺出土左上腕骨



9次3号墓棺出土右上腕骨



4号人骨筋付着部の発達



5号人骨筋附着部の発達

第3節 吹上遺跡4・5号人骨の装身具着装状態について

田中良之¹

1：九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財センター

1. はじめに

吹上遺跡では青銅器を中心とした副葬品が出土しているが、4号喪棺と5号喪棺からは貝輪や玉類が出土している。これらは原位置に近い状態で出土しており、着装状態を知ることのできる興味深い事例である。したがって、以下にその状態を検討して、これらの使用状況を考察することにしたい。なお、人骨および副葬品の出土状態は別項に詳述してあるので、ここでは簡単に触れることにしたい

2. 4号喪棺（人骨）

4号人骨は、頭のみが下腹口縁部に乗った状態で、体部は下腹内にあった。喪棺の傾斜が大きいため傾斜が水平に近くなる喪棺胸部下半まで腰部が落ち込んでおり、胸椎も落下している。勾玉も腰椎の位置にあるが、頸部から落下したものと考えられる。下肢を強屈した状態であり、一見すると坐葬のように見えるが、仰臥葬である。上肢は右腕を伸ばし、左は上腕骨が下に落ちているため本来の姿勢は不明である。

さて、4号喪棺の上蓋には銅戈と鉄剣が置かれており、ゴホウラ製貝輪が右前腕に、頭部から腰部・臀部にはガラス管玉が検出された。このうち、ゴホウラ製貝輪はいわゆる立岩型であり、回内した前腕からみて螺頭部を上にした状態で手を挿入していたことが知られる。貝輪は15枚であり、近位から遠位へと順次サイズを落として製作されていた。したがって、15枚セットの状態で入手して着装されたと考えられる。

ガラス管玉は総数500点を超え、頭部から腰部・臀部まで広く認められたが、主体は胸部下部から腰部に分布していた。そして、寛骨上に乗った状態で出土したものもあるが（図1）、多くは人骨を取り上げた後に検出された。すなわち、図2のように、胸椎・肋骨を取り上げた下から検出されており、さらには図3は仙骨と左寛骨を取り上げた状態であるが、骨を除去した下に管玉が位置していたことがわかるだろう。また、図1の上部にも腰椎取り上げ後に管玉が検出された状態が見て取れる。

このように、ガラス管玉はほとんどが遺体と喪棺との間に位置していた。この喪棺は傾斜角が大きいため、上部にあったものが下に落下した可能性はあるが、遺体と喪棺とに挟まれた状態のものが多く、特に腰部では喪棺は水平に近くなっているため、原位置に



図1. 吹上4号人骨骨盤



図2. 吹上4号人骨胸腰部

近いとみられる。したがって、寛骨などの人骨前面に位置したガラス管玉は、首飾りなどで体の前面にあったものが落下してきた可能性もあるが、ほとんどは遺体の下に敷かれていたものである。そして、胸部部にびっしりとあること、一部にタテとヨコの関係のように直角に近い角度で位置する(図1～3)ことを考えると、紐で綴った首飾りのようなものではなく、布に縫い込まれた状態であるか、編まれたものであると考えられる。さらに、頭部から腰部・臀部にまで及ぶことから、敷物として遺体の下に敷かれていた可能性が高いであろう。



図3. 吹上4号人骨寛骨背後

3. 5号喪棺(人骨)

5号喪棺は、上襖は傾斜を持たせてあるが、下襖は水平に近い。人骨もそれに沿って、頸部から上を上襖に、胸部から下は下襖にある。頭の下には粘土で枕を設けてあり、人骨は大きく動いていないとみていいだろう。人骨は仰臥位であり、下肢はやきつめに屈して足を底部に置いており、左下肢は棺壁に沿って立て膝の姿勢となっている。右腕は直角に屈して手を下腹部に置いている。左腕は肘をゆるく曲げた状態で前腕は棺壁に沿って立て膝になった大腿骨にそって前腕が立ち上がった状態である(図4)。



図4. 吹上5号人骨出土状態

この5号人骨の頸部から三孔を穿った勾玉(緒締玉)が検出された。頭部は粘土枕上にあったことから、原位置を動いておらず、勾玉は左鎖骨近位の位置にあり、喉元と言っていい場所であることから、実際に緒締めとして使用していた可能性がある。

貝輪はイモガイ製で、ゴホウラ製貝輪が男性の右腕に装着するのに対して、通常はイモガイ製貝輪は女性の左腕に装着する。しかし、5号人骨は左腕に12枚、右腕に5枚を装着している。このうち、右腕の分は手首までに収まっており、前腕に装着していた状態であることは疑いない。



図5. 吹上5号人骨イモガイ装着状態

ところが、左腕は、10枚は左前腕にはまった状態で左大腿骨上にあるが、2枚は棺底に落下した状態で検出された。その1枚には中手骨、もう1枚には基節骨がはまっており、前腕の10枚は遠位端まではまっていて、橈骨遠位端には手根骨が乗ったままの状態であった(図5)。これらの出土状態から、左腕のイモガイ製貝輪は順次装着していき、10～11枚目で手首を超えて手の部分(手根骨・中手骨)にまではめられていた

ものが、大腿骨に沿って立ち上がった手首の部分から落下したと考えられる。したがって、右腕には手首から手の甲まで貝輪が装着されていたのである。

4. 考察

以上から、4号人骨においては勾玉の本来の位置は不明であるが、ゴホウラ製貝輪は右前腕に装着した状態であり、ガラス管玉は敷物の一部として用いられていた。そして、5号人骨の勾玉（緒締玉）は実際に緒締玉として使用されていた可能性がある。さらに、イモガイ製貝輪は左腕には10枚が装着され、手首を超えて手のひらまではめてあったことも明らかになった。

これらから、まずはガラス管玉の使用法が首飾り等の綴られたもの以外に、布に縫い付けたり、編み込んだりすることもあったことが明らかとなった。もとより玉類は装飾品の部品であり、その組み合わせや使用法は多様である。吹上遺跡の場合は敷物の装飾として用いられたということであるが、出土状況が不明確な多数出土の玉類の用途を考える上で重要な知見であろう。

また、5号人骨のイモガイ製貝輪については、左右に装着していたに加えて、本来の装着部位である左腕に10枚を装着し、2枚は手首をこえて手の甲と指にまではめていた。したがって、これらは生前に装着していたものではなく、埋葬時に装着されたものである。おそらく、入手した17枚をすべて装着して死出の旅を飾ったものと考えられる。

では、4号人骨のゴホウラ製貝輪はどうであろうか。ゴホウラ製貝輪については、古く中山平次郎が成人の手のサイズからみて着脱不能であり、未成人のある段階に装着して、生前は取れなかったと推定し、弥生時代の階層性に言及して以来ほぼ定説化していた（中山1934；小林1949；高倉1975）。そして、右腕を貝輪で飾ることによって労働に関わらない社会的立場を象徴するという、弥生時代の社会段階の評価に関わる器物として評価されるに至った（高倉1975）。しかし、一方では小林行雄は兵庫県河原遺跡の事例から生前に着脱した可能性も指摘しており（小林1949）、木村幾多郎は、佐賀県大友遺跡のゴホウラ製貝輪を詳細に検討する中で、人骨着装のセットの貝輪が脆弱な部分まで痛むことなく保存されていたことなどから、着脱可能であったと結論した（木村1981）。

4号人骨の貝輪は、近位（肘側）から遠位（手首側）へと順次小さいものを装着しており、セットとして製作され入手したのと考えられる。これらの貝輪は、近位のものに着脱可能であるが、遠位のものはおそらく不能なサイズである。しかし、4号人骨は熟年の男性であり、10代前半に装着したとすれば30～40年ほど経過して埋葬されたことになる。その間、貝輪にまったく損傷がないという点は木村の指摘の通りであり、不可解である。しかも、若年期から貝輪を装着したままであれば右前腕筋群の発育不良や皮膚病などの疾病も想定されるが、4号人骨は上肢・下肢ともに筋付着部が発達しており、右前腕は円回内筋・方形回内筋が発達している（舟橋他、本書）。つまり、右手は活発に使用されていたのである。そして、遠位側の貝輪の内径からは着脱可能とは考えられないことを考慮すると、これらはいわば「死装束」として、埋葬時に装着されたものと考えられる。

ゴホウラとイモガイといった南海産貝輪は、男性が右腕、女性が左腕に装着するという男女対称をなし、男女それぞれのリーダーシップのシンボルとして採用されたと考えられ、男性が右＝利き腕という一般的認識を考えると高倉の指摘のように労働のシンボルとして右腕着装が選択され、対称的に女性は左腕着装となった可能性がある。そして、本例からいずれも埋葬時に装着されて、その使用法が男女で同じであったことが明らかになった。さらに、4号人骨同様、5号人骨も上下肢の筋が発達しており（舟橋他、本書）、やはり労働に従事していたことを示していることから、弥生時代中期後半の厚葬墓被葬者においてもいわゆる「貴族化」は起こっていないことが知られるのである。

5. おわりに

以上のように、吹上4号・5号人骨における装身具類の装着状態は、きわめて興味深く示唆的なものであった。これらの用法について、および当時の社会の評価にも関わる事例であると考えられ吹上遺跡をはじめとする日田地方の弥生時代、および北部九州弥生社会研究にとって重要な知見となると考えられる。

最後に、調査研究の機会を与えていただいた日田市教育委員会各位および現地においてともに調査にあたった金宰賢・石井博司氏に感謝の意を表したい。

文献

- 木村幾多郎,1981：装身具, 大友遺跡. 呼子町文化財調査報告書第1集, 呼子町教育委員会, 佐賀, pp190-199
- 高倉洋彰,1975：右手の不使用. 九州歴史資料館研究論集1 pp1-32
- 中山平次郎, 1934：飯塚市立岩運動場発見の竇棺内遺物, 福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書9, pp1-55
- 小林行雄, 1949：弥生時代の服飾, 日本考古学概説, 創元社, 東京, pp114-120

第4節 吹上遺跡から出土した弥生時代青銅器の鉛同位体比

鈴木浩子¹・平尾良光¹

¹：東京文化財研究所（所属は当時のままとしている）

1. はじめに

日田市教育委員会から同市の吹上遺跡より出土した弥生時代青銅器4点に関して、化学組成と鉛同位体比を測定し、資料に関する自然科学的な情報を調査する依頼を受けた。これら資料は弥生時代の割合に早い時期に導入されたとしており、鉛同位体比は日田地域と外部との交流に関する情報となるので、調査の意義があると思われる。

2. 資料

資料が出土した吹上遺跡は大分県日田市大字渡里・小迫に位置し、日田盆地北部の通称吹上原と呼ばれる標高130mの独立した台地上に分布している。台地上での遺跡の分布広さは約9万m²と推定される。遺跡周辺には吹上原地同様の発達した洪積台地が隣接しており、朝日宮ノ原遺跡（宮原地）、小迫辻原遺跡（辻原地）、後迫・草場第2遺跡（山田原地）といったいずれも弥生時代から古墳時代にかけての集落や墓地遺跡が営まれている。吹上遺跡ではこれまでに弥生時代前期後半から後期終わりまでの遺物や集落遺跡が確認されている。

3. 出土遺構と資料

6次調査地点は台地の東南端部にあたり、ちょうど台地が屈曲する部分である。調査区からは弥生時代前期後半～中期初頭の袋状貯蔵穴4基、弥生時代中期後半の喪棺墓8基と木棺墓3基、12世紀後半代の経塚1基などが確認されている。

本調査に供された資料は6次調査区で出土した銅戈2点・銅剣1点・青銅製把頭飾1点の4点である。出土場所・遺物の種類・測定方法などを表1としてまとめる。これらの測定試料は大分県日田市教育委員会から提供された。

測定した資料が出土した墳墓の様相は以下のものである。

・2号喪棺墓

中細形銅戈は2号喪棺墓から出土した。この墓墳の平面プランは長方形で、東西220cm×南北210cmである。喪棺は主軸を東西方向にとる合口の成人棺である。墓墳内からは標石と思われる河原石が確認されている。下腹部付近からは棺外副葬品として中細形銅戈が出土している。全長27.2cm、重さ約200gで、樋の部分に綾杉紋が描かれている。

・4号喪棺墓

細形銅戈は4号喪棺墓から出土した。この墓墳の平面プランは長方形で、東西270cm×南北230cmである。主軸を東西方向にとる合口の成人棺であるが、上腹を覆うようにして外腹が配置されるという特異な埋葬形態をとっている。棺内からはゴホウラ製貝輪を右腕に15個装着した熟年男性人骨と硬玉製勾玉1点、およびガラス製管玉約490点以上の装身具が確認されている。また外腹内には細形銅戈と鉄剣の武器類が1点ずつ副葬されており、前者には柄、後者には柄と鞘と推定される木質痕が残存している。細形銅戈の全長は26.8cm、重さ300gである。鉄剣は全長45.5cmで、茎の長いことが特徴である。

・1号木棺墓

細形銅剣と把頭飾は1号木棺墓から出土した。この墓墳は南北230cm×東西250cm×深さ80cmのほぼ四

丸方形をなしており、中央に棺が据えられている。木棺の大きさは小口と側板の小溝から 170cm×80cm と推定され、木棺両小口の外側には安山岩製の大きな岩が置かれている。木棺内部には西側の小口付近に頭部の位置を示すと考えられる赤色顔料が認められる。また副葬品として細形銅剣と青銅製十字形把頭飾が各 1 点出土している。細形銅剣は全長 26.8cm で、青銅製十字形把頭飾は全長 3.8cm、幅は十字部分で 5cm×3.8cm である。

4. 調査方法

資料の化学組成を測定するために蛍光 X 線法を利用した。分析用に供された試料は表面の錆を除いた内部から得られた金属部分であるため、本来の化学組成に近い値が得られると期待された。蛍光 X 線分析はセイコー電子工業社製の蛍光 X 線分析装置 SEA5230E で行った。測定条件は 測定時間：300 秒、雰囲気：大気、測定面積：φ 2.5mm、励起電圧：50kV、管電流：8 μA、定量方法：FP 法を利用した⁽¹⁾。

資料に使われた金属材料の産地を推定するために、鉛同位体比法を利用した。鉛同位体比法は鉛を構成する²⁰³Pb、²⁰⁸Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁹Pb という 4 種類の安定同位体の比が鉱山や鉱床の成因によって異なることを利用して、文化財資料に含まれる鉛の同位体比を測定し、鉱山や産地の明らかな文化財資料の鉛同位体比値と比較することから材料産地を推定する^(2,3)。

鉛同位体比の測定は次の手順で行った。試料から採取した一部分析用試料 (5mg) を石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。この溶液を蒸留水で希釈し、直流 2 V で電気分解した。鉛は二酸化鉛として白金電極に析出するので、白金電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で鉛を溶解した。この溶液の鉛濃度を測り、0.2 μg の鉛を分取した。この鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に載せた。以上のように準備したフィラメントを Finnigan MAT262 の中にセットし、測定諸条件を整え、1200℃ で鉛同位体比を測定した。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料 NBS-SRM-981 で規格化した。測定された鉛同位体比値を表 2 で示した。

5. 化学組成の測定結果と考察

蛍光 X 線分析法では測定部表面から約 100 マイクロメートルまでの深さの化学元素組成に関する情報を得られる。それ故、表面に錆などがあればその影響を受けやすく、測定された化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。そこで定性的な結果を次にまとめる。

<中細形銅戈および細形銅戈>

測定結果から判断すると、2 本の資料とも銅、スズ、鉛を主成分とし、銀、ヒ素、ニッケル、鉄を微量に含む。スズと鉛の見かけ上の強度は高い。アンチモン、亜鉛は見えない。これらの組成を今までの測定値と比較して検討すると、弥生時代に見られる典型的な青銅資料と類似している。資料が埋蔵されている 2000 年の間に雨水や地下水で青銅が錆化し、銅、スズ、鉛は酸化物となる。この時一般的には銅が溶け出し、スズと鉛は残る傾向にある。それ故、本資料でもこの現象でスズと鉛が多く残ったと考えることができる。今回の青銅製遺物は化学組成から弥生時代に利用された一般的な青銅材料と類似した材料であると判断される。

6. 鉛同位体比の測定結果と考察

得られた鉛同位体比を今までの例にしたがって、図 1 の A 式図と図 2 の B 式図にプロットした^(2,3)。これらの図から今回測定された資料はすべて D 領域に位置しているため、4 資料とも朝鮮半島産の青銅 (鉛) を用いて製作されていると判断される。朝鮮半島産材料が使われているが、同位体比がそれぞれ異なるため、同一素材で製作されたとは思えない。この違いはそれぞれの資料の製作時期とも関わってくる可能性がある。

これまでの研究において、細形青銅器は朝鮮半島産材料である D 領域の値を示している。考古学の一般論では細

形の武器形青銅器は舶載品であり、仿製品も含まれる可能性があると思括されている。しかし、当時の日本では銅の生産は行われていなかったと考えられるため、仿製品であっても青銅材料を大陸あるいは朝鮮半島から導入している。それ故、鉛同位体比が朝鮮半島産の材料を示したとしても、その遺物が朝鮮半島で作られたのか、日本で模造されたのかは鉛同位体比からは判断できない。

図3と図4で今までに測定された細形、中細形銅戈の値を図示し、日田の資料と比較してみる⁽⁴⁾。図から細形銅戈はほとんどが朝鮮半島産材料である。中細形銅戈になると、主体は中国華北産材料となる。本調査に供された資料が朝鮮半島産材料を利用した細形銅戈と中細形銅戈であり、分布も今までの資料と類似していることからこれら資料が日本で青銅利用が始まった弥生時代の比較的早い時代の典型的な資料であると考えられることができる。図の中で日田の細形銅戈に近い鉛同位体比を示す資料は東京国立博物館(36786)が所蔵する福岡県春日市須玖岡本遺跡出土の中細形銅戈である。

細形銅剣に関しては今までに60点以上の資料に関して鉛同位体比が測定されているので、それらを図5と図6に示す⁽⁴⁾。また把頭飾に関しては6点の測定値があり、それらも一緒に示す。それらの分布領域は朝鮮半島産材料から中国華北産材料まで広がっている。あたかも時代に関係なく朝鮮半島産材料と中国華北産材料を利用しているようにも見える。このことは銅剣の製作が比較的容易で、何時でも何処でも作ることができるので、材料の時代性や地域性が傳れることを示唆しているのかも知れない。その中でも吹上遺跡から出土した細形銅剣は朝鮮半島産材料であり、他の細形銅剣と矛盾がない。把頭飾に関しても、同様に典型的な朝鮮半島産材料が利用されている。

把頭飾に関して銅剣と一緒に出土し、鉛同位体比を測定している例がいままでに3例(福岡県福岡市西区吉武遺跡群桶波K-75号裏棺墓、佐賀県鳥栖市袖比町袖比本村遺跡SJ1140裏棺墓、佐賀県神埼郡三田川町吉野ヶ里遺跡SJ1057裏棺墓)見つまっている⁽⁴⁾。今回の吹上遺跡資料で4例目である。これらの場合の同位体比は類似している場合もあるが、銅剣とははっきり異なった値を示している。このことは把頭飾が銅剣と一緒に作られた

のではなく、別々に作られていることを示唆する。



写真1 2号裏棺墓出土銅戈



写真2 4号裏棺墓出土銅戈



写真3 1号木棺墓出土銅剣



写真4 1号木棺墓出土把頭飾

- 1) 中井泉:『蛍光X線分析の実際』,朝倉書店(東京)(2005)
- 2) 平尾良光編:『古代青銅の流通と鑄造』,鶴山堂(東京)(1999)
- 3) 平尾良光編:『古代東アジア青銅の流通』,鶴山堂(東京)(2001)
- 4) 平尾良光:鉛同位体比の測定と分析,『第6巻、弥生・古墳時代、青銅・ガラス製品』『考古資料大観』,森田稔・井上洋一編,小学館(東京),p.45-p.368(2003)

表1 日田地域から出土した青銅製品の資料出土地(日田市教育委員会所蔵)

資料名	資料出土地	測定項目	測定番号
中細形銅戈	大分県日田市吹上遺跡2号裏棺	鉛同位体比 化学組成	HS182
細形銅戈	大分県日田市吹上遺跡4号裏棺	鉛同位体比 化学組成	HS183
把頭飾	大分県日田市吹上遺跡1号木棺墓	鉛同位体比	HS228
細形銅剣	大分県日田市吹上遺跡1号木棺墓	鉛同位体比	AO1240

表2 日田地域から出土した青銅製品の鉛同位体比値

資料名	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{209}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{209}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{210}\text{Pb}$	測定番号
中細形銅戈	20.700	15.997	41.570	0.7728	2.0082	HS182
細形銅戈	18.756	15.684	39.243	0.8362	2.0923	HS183
把頭飾	20.058	15.904	40.642	0.7929	2.0262	HS228
細形銅剣	20.427	15.947	40.879	0.7807	2.0012	AO1240
誤差	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

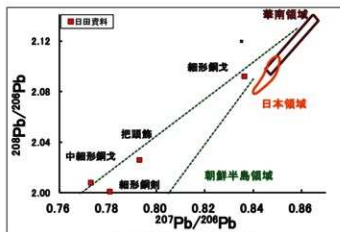


図1 日田市吹上遺跡から出土した青銅器の鉛同位体比 (A式図)

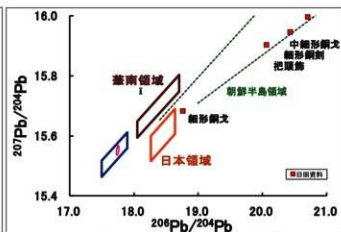


図2 日田市吹上遺跡から出土した青銅器の鉛同位体比 (B式図)

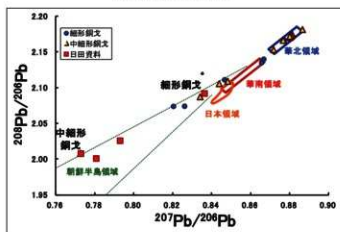


図3 今までに測定された細形銅戈、中細形銅戈と吹上遺跡資料の鉛同位体比分布 (A式図)

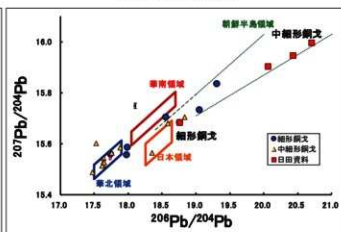


図4 今までに測定された細形銅戈、中細形銅戈と吹上遺跡資料の鉛同位体比分布 (B式図)

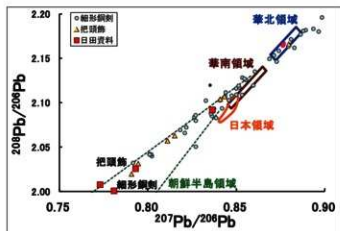


図5 既測定の詳細銅劍、把頭飾の分布と日田資料の鉛同位体比 (A式図)

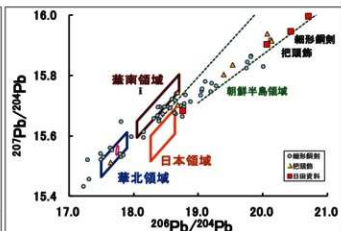


図6 既測定の詳細銅劍、把頭飾の分布と日田資料の鉛同位体比 (B式図)

第5節 吹上遺跡出土ガラス管玉の調査

谷澤亜里¹・足立達朗²・小山内康人³・田中良之³

1：九州大学大学院比較社会文化学府 2：九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

3：九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

1. はじめに

吹上遺跡4号裏棺墓からは、ガラス管玉525点が出土した。類似したガラス管玉は、三雲南小路1号裏棺墓、立岩堀田28号裏棺墓、安徳台2号裏棺墓、上月隈ST007裏棺墓など、弥生時代中期後半の北部九州地域の厚葬墓で特徴的にみられる点で注目されている（小寺2006、大賀2010）。そこで、吹上遺跡出土管玉の考古学的な位置づけを明確にするため、材質調査を行った。以下、結果を報告する。

2. 資料と方法

吹上遺跡4号裏棺出土ガラス小玉525点は、全て整美な円筒形を呈し、法量は直径4～5mm、全長10mm程度にまとまる。多くの個体が風化により完全に白色化しているが、濃青緑色で半透明のガラス質を残す個体も認められる。資料によっては風化の進行した部分とガラス質部分が形成する螺旋状のパターンが認められるが、孔方向に斜交する程度は個体差が大きい（Fig.1）。以上のような特徴より、当資料は大賀（2010）のガラス管玉分類におけるTY II型に分類される¹¹。なお、この種のガラス管玉ではしばしば人工顔料「漢青」に同定される不透明青色粒子が観察されている（肥塚2002）が、吹上遺跡出土資料についてルーペを用いた観察では、このような青色粒子を明確に認めることはできなかった。

材質調査の対象試料としたのは、ガラス管玉の破片2点である。風化の進行がゆるやかで鮮緑色のガラス質部分を残すものを試料A、風化がかなり進行し白色化したものを試料Bとする（Fig.2～4）。これらをエポキシ樹脂包埋後、カーボラダム研磨およびダイヤモンド研磨を行い、新鮮な面を作出した。この状態で顕微鏡観察を行ったところ、ガラス内部が均質ではなく、いくつかの包有物が認められた（Fig.5・6）。そこで、電界放出形電子線マイクロアナライザー（FE-EPMA：日本電子製 JXA-8530F）を用いて基礎ガラスと包有物の化学組成分析を行った。分析は、エネルギー分散型X線検出器を用いたスタンダードレス分析であり、加速電圧15kV、照射電流4nA、測定時間60秒の条件で測定を実施した。分析結果は100重量%で規格化したものを示した。

また包有物については、顕微レーザーラマン分光分析装置（日本分光製NRS3100）を使用した相同定も行った。分析条件は、励起波長532.02nm、露光時間10秒、積算回数1回である。物質の同定には、アリゾナ大学が公表しているラマンスペクトルデータベース（<http://rruff.info/>）を参照した（Downs2006）。

3. 分析結果

試料Aのガラス部分（Fig.8-glass）からは、Na, Si, Cl, K, Ca, Cu, Ba, Pbが検出された。測定結果を酸化物重量%で示したものをTab.1に示す。以上の結果より、本資料が鉛バリウムガラスであることが同定された。

試料Aの内部には最大100 μ m程度で不定形な物質aと、10 μ m程度で多角柱状を呈する物質bが確認された（Fig.7・8）。物質aからは、分析点a1～3で、石英（Quartz：SiO₂）の標準試料データに合致するラマンシフトが得られた（Fig.10）。角がとれた融食形状の外形を考慮すれば、ガラスの素材となったシリカの溶け残りである可能性が想定される。物質bからは分析点b1（Fig.8）でSi, Baが検出され、分析点b1～6のラマン

シフトはサンポーナイト (Sanbornite: BaSi_2O_6) に同定された (Fig.11)。鉛バリウムガラスの原料のバリウムに由来するものと考えられるが、結晶形が明瞭な自形を示すことから、冷却過程においてガラス融液から晶出したと考えられる^{31,32)}。

試料 B では、顕微鏡観察により健全なガラス質は遺存していないことが確認された (Fig.6)。FE-EPMA を用いて得られた反射電子画像では、二次的に再沈殿したような構造を認めることができる (Fig.9)。試料内部に多数認められる不定形な物質 a からは、石英 (Quartz: SiO_2) の標準試料データに合致するラマンシフトが得られた。また、 10μ 程度の物質 c からは、緑鉛鉱 (pyromorphite: $\text{Pb}_5(\text{PO}_4)_3\text{Cl}$) に同定されるラマンシフトが得られた。鉛ケイ酸塩ガラスでは、リングが供給される環境下で風化した場合、緑鉛鉱が二次的に生成することが指摘されており (肥塚 2002)、当資料でも同様に生成されたものと考えられる。なお、緑鉛鉱に同定されるラマンシフトを示す物質は試料 A でもみられ、元素分析では P, Cl, Pb が検出されており、その含有量からも緑鉛鉱であると考えられる (Tab.1)。

4. おわりに

今回の調査により、吹上遺跡出土のガラス管玉は、類例と同様に鉛バリウムガラスを素材とすることが明らかとなった。この種のガラスは漢代以前の中国に特有のものでされ、弥生時代の日本列島でも多数確認されている (山崎 1962, 肥塚 1995 など)。同時期の北部九州地域から出土する類似したガラス管玉では、立岩堀田 28 号裏棺墓 (山崎 1977)、三雲南小路 1 号裏棺墓 (望月 1983) 安徳台 2 号裏棺墓 (比佐 2006)、上月隈 ST007 裏棺墓 (比佐ほか 2000) 例で Pb, Ba などの元素が特徴的に確認されており、同様に鉛バリウムガラスを素材としていられる。

ただし、いくつかの類例で確認されている着色因子である漢青 (肥塚 2002) は、吹上遺跡出土管玉では、肉眼観察においてもその後の詳細な調査においても確認することはできなかった。当資料は漢青添加による着色ではなく、銅イオンなどが着色に関与していると考えられる。安徳台例や上月隈例では漢青とみられる粒子が確認されている (比佐ほか 2000, 比佐 2006) ことをふまえれば、弥生時代中期後半に北部九州地域で流通したガラス管玉は、基礎ガラスや製作技法、法量はよく類似しているが、着色剤にはヴァリエーションが認められるといえよう。

また、今回の分析ではガラスの内部に石英とサンポーナイトに同定される包有物を確認することができた。これらは、鉛バリウムガラスの生産地や加工地を考えるうえでの手がかりとなる可能性もあり、今後も比較検討を継続したい。

最後になりましたが、調査・報告の機会を下さいました、日田市教育委員会の渡邊隆行氏に感謝申し上げます。また、大分県立博物館の友岡彦彦氏には資料の実見で、奈良文化財研究所の肥塚隆保先生からは文献の入手にあたりご配慮を頂きました。記してお礼申し上げます。

³¹⁾ このタイプの管玉について、製作技法を巻き付け技法とするか振り引き技法とするかは論者や資料により異なっている (大賀 2010, p.224)。

³²⁾ 中国出土の鉛バリウムガラスでも、内部より BaSi_2O_6 の結晶が検出された事例がある (Brill et al. 1991)。

<参考文献>

大賀克彦 2010「弥生時代におけるガラス製管玉の分類検討」『小羽山墳墓群の研究—研究編—』福井市郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会、213-230 頁

肥塚隆保 1995「古代珪酸塩ガラスの研究—弥生～奈良時代のガラス材質の変遷—」『文化財論叢Ⅲ：奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集』

同明舎出版、929-967 頁

肥塚隆保 2002 「鉛バリウムガラスより発見された珪酸銅バリウム (BaCuSi4O10) について」『文化財論叢Ⅲ：奈良文化財研究所創立 50 周年記念論文集』奈良文化財研究所、705-717 頁

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』566 号、13-25 頁

小寺智津子 2006 「弥生時代のガラス製品の分類とその副産物に見る意味」『古文化談叢』第 55 号、47-79 頁

比佐岡一郎・片多権樹・肥塚隆保 2000 「上月階遺跡第 3 次調査 ST007 費棺墓出土ガラス玉の保存処理及び自然科学的調査について」『上月階遺跡群 3』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 634 集、35-42 頁

比佐岡一郎 2006 「安徳台遺跡出土ガラス製品の保存科学的調査について」『安徳台遺跡群 那珂川町文化財調査報告書 第 67 集、154-156 頁

望月明彦 1983 「ガラスの ICP 分析」『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書 第 65 集、福岡県教育委員会、271-275 頁

山崎一雄 1962 「化学的方法」『世界考古学体系』第 16 巻、平凡社、129-135 頁

山崎一雄 1977 「飯塚市立岩および春日市須玖岡本関係資料の化学分析」『立岩遺蹟』河出書房新社、403-406 頁

Brill, R. H. Tong, S. S. C. & Dohrenwend, D. 1991. Chemical Analyses of Some Early Chinese Glasses. In Brill, R. H. & Martin, H. H. (eds), *Scientific Research in Early Chinese Glass: proceedings of The Archaeometry of Glass Sessions of the 1984 International Symposium on Glass, Beijing, September 7, 1984 with Supplementary Papers*. New York: Corning Museum of Glass.

Downs, R. T. 2006. The RRUFF Project: an integrated study of the chemistry, crystallography, Raman and infrared spectroscopy of minerals. Program and Abstracts of the 19th General Meeting of the International Mineralogical Association in Kobe, Japan. 003-13

Tab.1 元素分析結果

	P ₂ O ₅	SiO ₂	PbO	BaO	CuO	FeO	CaO	K ₂ O	Na ₂ O	Cl
試料A glass	34.47	47.27	14.74	0.84	0.17	0.63	0.15	1.10	0.64	
試料A b2	43.92		56.08							
試料A b4	44.02		55.98							
試料A c1	12.68		86.39							0.93
試料A c2	13.15		85.92							0.93
試料B c6	13.46		85.97							0.57
試料B c7	13.78		85.46							0.76



Fig.1 ガラス管玉にみられる螺旋状パターン



Fig.2 分析試料実測図



Fig.3 試料 A 側面



Fig.4 試料 B 側面

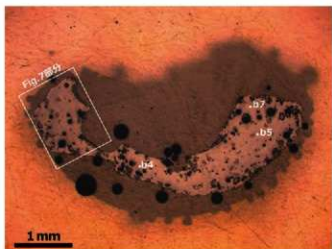


Fig.5 試料 A 分析面の反射顕微鏡写真

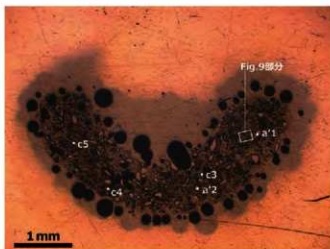


Fig.6 試料 B 分析面の反射顕微鏡写真

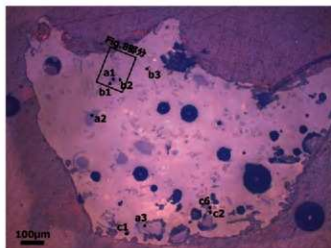


Fig.7 試料 A 分析面の反射顕微鏡写真 (拡大)

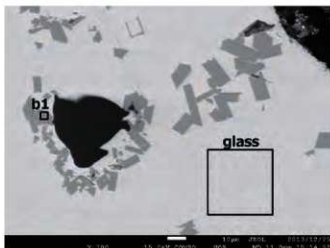


Fig.8 試料 A の反射電子画像



Fig.9 試料 B の反射電子画像

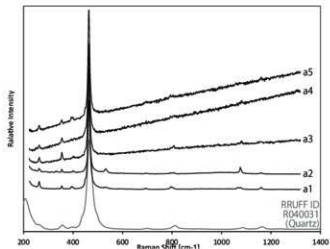


Fig.10 物質 a・a' のラマン分光分析結果

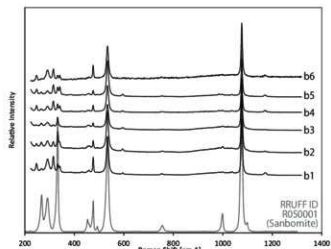


Fig.11 物質 b のラマン分光分析結果

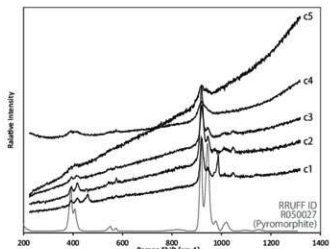


Fig.12 物質 c のラマン分光分析結果

第6節 4・5号墓棺墓出土の勾玉の材質分析

大坪志子¹

1：熊本大学埋蔵文化財調査センター

1. 遺跡の所在と性格

遺跡名：吹上遺跡
所在地：大分県日田市大字小迫字吹上原
調査機関：日田市教育委員会
調査担当者：土居和幸、永田裕久
調査期間：平成7年5月8日から平成8年1月23日
遺跡の年代：弥生時代中期後半

2. 分析資料と出土状況

分析を行ったのは、吹上遺跡から出土した緑色を呈する石材で製作された、2点の石製装身具である。4号墓棺墓出土の勾玉は寛骨周辺からガラス管玉と同箇所でも出土したものを取り上げ、5号墓棺墓出土の勾玉は首付近から単体で出土したものを取り上げた。

3. 分析条件

第1表 分析資料と分析結果

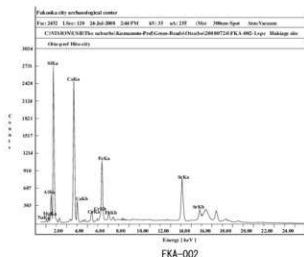
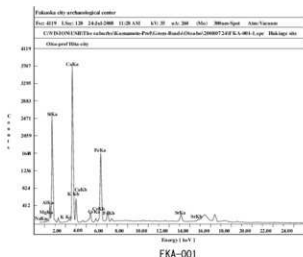
資料No	種類	遺構	共存土器	時期	図番号	同定結果
FKA-001	勾玉	4号墓棺墓	立岩式	弥生時代中期後半	写真1	ヒスイ(オンファス輝石)
FKA-002	繡繡形勾玉	5号墓棺墓	立岩式	弥生時代中期後半	写真2	ヒスイ(オンファス輝石)

吹上遺跡の資料分析には、福岡市埋蔵文化財センターの蛍光X分析器(エネルギー分散型:エダックス社製イーグルμ)を使用させていただいた。分析条件は印加電圧:35 kV、電流:任意、測定雰囲気:真空、測定範囲:0.3 mmφ、測定時間:120秒である。測定作業は、同センター片多雅樹氏の指導のもと大坪が行った。石材判定は、片多氏、大坪、森康氏(北九州市立いのちのたび博物館)による。

4. 石材の所見と分析結果

玉の石材に利用される緑色石材の主なものには、ヒスイ、碧玉、アマゾナイトなどがある。ヒスイは縄文時代から古墳時代まで使用され、碧玉は韓半島からの搬入品も含め弥生時代早期から古墳時代まで使用された。アマゾナイトも弥生時代早期から散見されるが、量的に微量である。クロム白雲母は縄文時代の後期後葉から九州を中心に使用されるが、縄文時代晩期前葉でほぼ終焉を迎える(大坪2010)。ただし、伝世したのか後世の人が拾ったのか、クロム白雲母製品が弥生時代・古墳時代の遺構から出土する例が僅かながらにある。これらの石材のうち、碧玉は透明感や色調、アマゾナイトも鮮やかな水色を呈する点で、目視によるヒスイとの区別は容易である。しかし、クロム白雲母は場合によってはヒスイとの区別が困難なものもある。FKA-001については、目視ではクロム白雲母の可能性があった。

クロム白雲母は、鮮やかなやや濃い緑色を呈し、若干半透明で黄色の斑点や縞が入ることが特徴である。部分により、黄色の斑点や縞がほとんど無い場合や、全体的に色が薄い緑灰色のものもある。クロム白雲母を蛍光X線分析した場合に検出される主な元素は、Al(アルミ)・Si(ケイ素)・K(カリウム)・Cr(クロム)・Ti(チ



第1図 吹上遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル

第2表 蛍光X線分析による元素の強度と重量%

遺跡名	検出玉	形状	Na	Mg	Al	Si	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Ni	Rb	Sr	
吹上遺跡	FKA-001	勾玉	Net	1.50	5.19	30.34	202.65	7.44	344.61	ND	24.58	4.50	172.19	ND	ND	24.33
			Wt%	4.73	5.77	15.78	58.17	0.33	12.75	ND	0.41	0.05	1.92	ND	ND	0.10
吹上遺跡	FKA-002	縄縊形	Net	1.70	3.79	29.67	168.66	ND	260.67	ND	7.24	ND	122.54	8.85	ND	167.89
			Wt%	5.86	4.92	17.79	57.30	ND	11.38	ND	0.14	ND	1.57	0.09	ND	0.87

タン)・Fe(鉄)である。このうち、KとCrのピークがクロム白雲母の特徴である。蛍光X線分析によってヒスイを分析した場合に検出される主要元素はNa(ナトリウム)・Si(ケイ素)・Ca(カルシウム)・Fe(鉄)である。このうち、Naの検出がヒスイか否かの重要な要素となり、ほかCaのピークも特徴である。

分析の結果、FKA-001・002ともにヒスイである。いずれもNaが検出され、ほか特徴となる元素もピークを示している(第1図)。森氏によれば、第2表の重量%(Wt%)をみるとFKA-001・002ともにCaが10%を超え、Caに富む特徴があり、これら2点はオンファス輝石である。

石材の肉眼観察による特徴は次のとおりである。FKA-001は全体が透明感のある暗緑色である。頭部の黄～褐色部分が、クロム白雲母によく見られる黄色の斑や筋のようであったが、分析の結果はヒスイ(オンファス輝石)であった。FKA-002は、001と同じく暗緑色である。全体的に緑色部分と乳白色部分が混在するが、緑色部分が基本となっている。縄文時代の大理石などのヒスイ製品は、乳白色部分のなかに緑色部分が斑状に入ることのほうが多いが、九州において弥生時代の有力者の墓と推察される墓域から出土するヒスイ製玉類は、緑色部分を重視し利用する傾向にある。FKA-001・002もまた、このような弥生人の嗜好を良く示す例である。

5. 玉類の見所

FKA-001は、縄文時代の勾玉とは異なり立体的で、緩やかな曲線を描く勾玉である。弥生時代以降に登場するいわゆる定形勾玉については、木下尚子(木下1987)は①大きな円頭部、大きく屈曲する胴部、頭部の明瞭なくびれ ②胴部横断面は正円に近く、全体に豊富な印象 ③大型(3～5cm) ④上質の硬玉製あるいは緑色ガラス製、製作は極めて入念 ⑤頭部に細く鋭い刻線で、粗孔から放射状に3～4本の条線を刻むものが多いと定義している。これに照らすと、頭部が丸く顎を持つように作り出されていない点、2cm足らずでやや小さい点、頭部に刻みを持たない点などから定形勾玉とは言えない。しかしながら、②・④の条件は備えており、縄文時代の勾玉とは明らかな違いを見せている。木下の垂定形勾玉としてよいだろう。

FKA-002は、縄縊形勾玉である。頭部から尾の先まで、全体に刻みを入れており、細部まで丁寧に研磨を施している。このような類例には、頭部と尾がほぼ対称的に作られたものがあるが、本品は頭部は直線的にカット

され、尾を細く丸く仕上げている。穿孔は通常の勾玉に施される、本体に対し直行する孔と、頭頂部から背面までを貫く孔が施されている。全身に刻みを持ち、十字に交差する孔を持つヒスイ製緒締形勾玉は、佐賀県宇木汲田遺跡 24 号喪棺墓、50 号喪棺墓、柏崎松本遺跡 3 号喪棺墓、福岡県吉武高木遺跡 2 号木棺墓、10 号喪棺墓に類例がある。特に後三者は、FKA-002 のように頭部が平坦で尾と形が異なり、よく似ている。

6. 本遺跡出土資料の意義

九州北部の玄界灘沿岸地域では、弥生時代前期末から、ヒスイ製の獣形勾玉が登場し、中期前半～中頃には獣形勾玉に加え、緒締形勾玉、丁子頭勾玉、定形勾玉が見られるようになる。同時期に、国内の他の地域ではこのようなヒスイ製玉類が見られないことから、九州北部でのヒスイ製玉類の製作が唱えられるようになった（浅野良治 2003、田平 2008）。近年、佐賀県唐津市中原遺跡から豊富なヒスイ製玉類が出土したことで、その可能性はいよいよ高くなった（小松 2011）。唐津地域において北陸で加工された素材を入手し、定形勾玉・垂定形勾玉・獣形勾玉・緒締形勾玉などが創出され、九州各地さらには九州島外へと拡散したと推察されている。ヒスイ製玉類が福岡・佐賀両県に集中する傾向のなかで、さらには FKA-002 のような緒締形勾玉が上述したように唐津市～福岡市西部に限られるなかで、吹上遺跡で出土した点は注目される。十字に交わる穿孔をもつ緒締形勾玉の類例は、中期初頭～中期後半に取まり、本遺跡の FKA-002 も同様である。吹上遺跡とヒスイ製玉類を重用した地域との交流は、今後、九州北部で製作された玉類の流通と拡散を考える上で、重要な示唆を与えてくれるであろう。

<参考文献>

大坪志子 2010 縄文時代九州産石製装身具の波及。先史学・考古学論究 V。龍田考古会、p 223-237。

木下尚子 1987 弥生定形勾玉考。東アジアと考古と歴史 中。岡崎敬先生追記官論。同朋出版社、p542-591。

小松謙 2011 唐津地域の弥生時代石製装身具・弥生時代中期・後期の玉作りの可能性。魏志倭人伝の未遼国・伊都国・王（慕）と翡翠玉、第 9 回日本玉文化研究会発表要旨、p 11-40。

田平徳栄 2008 九州における弥生時代ヒスイ勾玉の製作と流通について。佐賀県立名護屋状博物館研究紀要、第 14 集、p 1-22。



写真1 4号喪棺出土勾玉



写真2 5号喪棺出土勾玉

第7節 吹上遺跡出土の赤色顔料について

1. はじめに

大分県日田市にある吹上遺跡の第6次調査で出土した赤色顔料について、その種類や使われ方を知るために分析調査をおこなった。資料は6基の墳墓から出土した土壌等を含む赤色物68点である。これ以外に裏棺や一部の副葬品、人骨に付着する赤色物についても調査を行った。墳墓の時期は1号木棺墓が弥生時代中期前半～中頃、2号・4号・5号・6号裏棺墓が中期後半、3号裏棺墓が中期末～後期初頭と考えられている。

弥生時代～古墳時代の赤色顔料は、これまでの調査によって水銀を主成分とする「朱」(HgS, 鉱物名称:辰砂/Cinnabar)と、赤色の酸化鉄に発色の要因がある「ベンガラ」(α -Fe₂O₃, 鉱物名:赤鉄鉱/Hematite等)の二種類が知られている。

2. 調査方法と各調査結果

(1) 九州国立博物館に持ち込まれた資料

【目視と実体顕微鏡観察(表1、図1)】68点の資料を自然乾燥させた後、赤色物の分布や遺存状態を確認するためにおこなった。墳墓では二種類の赤色顔料が使用されることも多いので、特に留意して観察した。実体顕微鏡による調査では赤色顔料が単体で纏まっていれば、朱はショッキングピンク色～オレンジ色、ベンガラは暗赤色他に見える。しかし土壌との混在状況や有機物の介在状況等で見え方は大きく異なってくる。

観察の結果、全ての墳墓で朱の色調を持つ赤色物を認めた。1号木棺墓では、資料採取位置は不明であるが、遺構実測図から床面西端が特に赤かったことが伺える。西端から離れる銅剣付近の資料(資料1-8～1-14)はほとんど赤くなかったため、現場での所見が裏付けられる。2号裏棺墓では、約1cm角の土器小破片内面に1mm以下の範囲で朱の色調を持つ赤色物が認められたが、あまりにも微量のため発掘時の混入の可能性が考えられた。6号裏棺墓についても、朱の色調を持つ赤色物が直径約1mmの砂粒数点にだけ付着している状況であったため、これも混入と考えられよう。

1号木棺墓や2号・3号・5号裏棺墓では、朱に混じって地山起源と考えられるバイラン土や赤色酸化鉄粒が確認された。特に5号裏棺墓の勾玉穿孔内付着物(資料5-6)には、朱と共に赤色酸化鉄粒が多く含まれており、一見ベンガラ小塊が含まれているようにも見える(図1-12)。この小塊内には明褐色をした鉱物粒が含まれており、赤色部分は風化礫のような印象を受ける。またこの資料中には朱以外に裏棺内の泥状堆積物の小破片も含まれており、勾玉周辺にあった土も含まれているようである。これらのことから、ここで認められた赤色酸化鉄粒はベンガラでは無いと判断している。

【生物顕微鏡観察(表1、図1)】赤色顔料の種類、混在状況、粒子形態等を知るために行なった。実体顕微鏡による観察結果をふまえて赤色部分からサンプリングし、合成樹脂オイキットでプレパラートに封入したものを資料毎に準備し、側射光および透過光にて主に400倍の倍率で観察した。生物顕微鏡(側射光)では、朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に見え、ベンガラであれば暗赤色他の粒子が見える。今回は朱の可能性のある資料のみであったため、朱の粒度の計測のため、資料封入時なるべく粒子が潰れないように心がけた。

観察の結果、全ての墳墓で朱の特徴を持つ粒子を確認した。ベンガラの特徴を持つ粒子は確認できなかった。朱の粒径範囲は、厳密には計測していないが1号木棺墓が約0.5～25 μ mであった(図1-2)。3号・4号・5号裏棺墓では約0.5～10 μ mであったが、4号裏棺墓のうち裏内出土鉄刺に付着する資料(資料4-10)については、約0.5～15 μ mとやや大きい粒子を含んでいた(図1-3,7,8,10,13)。

【蛍光X線分析(表1、図2)】主成分元素を知るために行った。測定にはInnov-X社 α -4000 (Ta,50kv,30秒)を用いた。朱は水銀(Hg)が、ベンガラは鉄(Fe)が検出される。ただし、鉄は土壌にも含まれている。

分析の結果、全ての墳墓で水銀と鉄を検出した。生物顕微鏡での観察結果をふまえれば、水銀は朱に由来し、鉄はベンガラではなく土壌に由来するものと考えられる。その他、特徴的な元素として銅(Cu)や錫(Sn)、鉛(Pb)を検出した資料が認められた。これらの元素は青銅製品やガラス製品に由来するものと考えられる。

【X線回折(表1、図3)】晶構造を知るために行った。測定にはリガク社 RINT Ultima III (Cu40kV40mA, 平行法)を用いた。朱は辰砂(Cinnabar)が、ベンガラは赤鉄鉱(Hematite)他が同定される。生物顕微鏡観察と蛍光X線分析の両結果から赤色顔料と判断した資料のうち、1号木棺墓、3号・4号・5号裏棺墓から各1資料を選び出し測定した。結果、全て辰砂(HgS)が同定された。

【硫黄同位体比分析(図1-14~16)】朱(HgS)と判断した資料について、その構成元素の一つである硫黄(S)の同位体比(δ 34 S)を測定し、産地を推定した。測定方法や条件は南他(南2003, Minami, et al.2005)および柳沢等(Yanagisawa and Sakai1983)の方法で二酸化硫黄を得た後、元素分析計 Thermo Finnigan 社 FLASH EA1112 と同位体質量分析装置 Thermo Finnigan 社 DELTAplus で測定した。同時に硫黄の国際標準資料(キャニオンディアプロ隕石に代わる国際原子力機構作成の VCDT)も測定し、その差を千分率(%)で示した。測定精度は $\pm 0.2\%$ である。念のため既知の鉱山資料数点を測定し、南が公表した測定値(南他2008, 南他2004)の平均値に近い数値であることを確認している。資料の選定と朱の分離は筆者が行い、前処理および測定は(株)地球科学研究所に委託した。

測定の結果、1号木棺墓(資料1-3)は -7.7% 、4号裏棺墓(資料4-4)は -10.3% 、5号裏棺墓(資料5-5)は -13.5% で、いずれも高いマイナスの値を示した。なお、4号・5号裏棺墓の測定資料については、埋葬施設に塗布された朱が、遺骸に散布された朱かは判断できなかった。

(2) 資料保管先での調査 一裏棺、銅戈に付着する赤色顔料一

4・5号裏棺墓の裏棺ならびに4号裏棺墓出土銅戈に付着する赤色顔料については保管先を訪問し、肉眼観察の後、携帯型実体顕微鏡による観察を行い、さらにポータブル蛍光X線分析装置による元素分析を行った。元素分析は、各裏内面を天井、左右の壁、棺底の4部位と考え、各部位2ヶ所(裏の口縁付近と胴部付近)および各裏の底部1ヶ所の合計9箇所ずつ測定した。銅戈については、赤い部分とそれ以外の部分を各1ヶ所測定した。

調査の結果、朱の色調を持つ赤色物を認め、その赤色の部位からは水銀と鉄を検出した。(1)での調査結果も踏まえ、赤色顔料の種類は全て朱と判断した。

4号裏棺墓では、上下裏ともに内面全面が明瞭に赤く、全て朱が塗布されていると考えられる(図1-4.5)。下裏よりも上裏の方がより赤く、上裏により多くの朱が使用されているようである。外裏内面には棺底にあたる部分の口縁部内面に沿って幅約35cm高さ約15cmの範囲で朱が付着している。その他、外裏内面には飛沫状に朱が点在している。

4号裏棺墓の外裏内出土銅戈の穿周辺の両面には朱が面的に認められたため、塗布されていたものと考えられる。穿の中側にある平面には、穿を通るように穿と同じ幅でベルト状に朱が付着していない範囲が認められる。おそらく当初の銅戈は木製の柄が取り付けられており、穿に有機物製の紐(草や繊維)を通して柄に固定され、その固定部分を中心に接着剤(漆や膠など)に混ぜられた朱が塗布されていたものと考えられる。この有機物製の紐は埋蔵環境で腐朽消滅し、その上に塗布されていた朱は落下し、穿にはベルト状に朱が付着していない範囲が生じたのであろう。木柄にも朱が塗布されていた可能性もあり、そうであれば、外裏内面の棺底に認められる朱は、木柄に塗布されていたものが腐朽して落下したのものかもしれない。

5号裏棺墓では、朱は頭骨下の上裏内面の口縁付近に幅約35cm高さ約30cmの半円形に付着(塗布?)し

ていた(1-11)。

(3) 資料保管先での調査 — 3・4・5号裏棺墓出土人骨に付着する赤色顔料—

人骨の保管先に訪問し、肉眼と携帯型実体顕微鏡による観察を行った。朱の色調を持つ赤色物を認め、(1)での調査結果を踏まえ、赤色顔料の種類は全て朱と判断した。

3号裏棺墓の人骨の残りは良くないものの、朱は頭骨にだけ付着している。4号裏棺墓の人骨では、朱は頭骨や骨盤上面に付着しているが、特に頭骨への付着が顕著である。頭骨を中心に遺骸上半身に散布されたような状況と考えられる。5号裏棺墓の人骨では、朱は左鎖骨付近に付着している。頭骨は残りは良くないが、朱は付着していないようである。広い意味で遺骸上半身に散布されていると考えられる。

3. 調査結果のまとめと考察

(1) 各遺構における赤色顔料の種類と使用状況

【1号木棺墓】朱が使用されていた。概略東西方向をとる棺の床面西端に朱が分布していたようであり、ここに頭部が想定される。

【2号裏棺墓】朱が認められたが、極微量のため発掘時の混入の可能性がある。

【3号裏棺墓】朱が使用されていた。朱は遺骸頭部に散布されていたものと考えられる。

【4号裏棺墓】朱が使用されていた。朱は上下裏内面全面に塗布されており、遺骸頭骨を中心に散布もされていたと考えられる。外裏内面にも微量塗布されており、銅戈(柄?)には朱漆等として塗布されていたと考えられる。各位置で使用された朱と2(1)で提供された資料との対応関係は明瞭ではないが、上下裏内の資料については、玉に付着した資料(資料1-11)や貝輪に付着した資料(資料1-12～26)は遺骸に散布されていた朱の可能性が高い。

【5号裏棺墓】朱が使用されていた。頭骨に朱が付着していないことから、頭骨の下にだけ朱を塗布していたと考えられる。また胸部を中心に朱が散布されていたと考えられる。

ここでも各位置で使用された朱と2(1)で提供された資料との対応関係は明瞭ではないが、勾玉穿孔内の資料(資料5-6)や貝輪に付着した資料(資料5-7～20)は遺骸に散布された朱である可能性が高い。

【6号裏棺墓】が認められたが、極微量であるため発掘時の混入の可能性がある。

(2) 朱の粒度について

北部九州の弥生時代～古墳時代の墳墓出土朱を調査した本田によれば、その粒子径は時期によって以下のような変化が認められるという(本田1988)。朱Ⅰは粒径範囲0.5～20 μm (最多頻度径4～8 μm)で弥生時代前期末～中期前半、朱Ⅱは粒径範囲0.5～10 μm (最多頻度径2～3 μm)で弥生時代中期後半～後期初頭、朱Ⅲは粒径範囲0.5～25 μm (最多頻度径3～9 μm)で弥生時代後期後半～古墳時代初頭である。朱Ⅰと朱Ⅲは比較的近い数字であるが、朱Ⅱはかなり細かい。

本遺跡でも弥生時代中期前半～中頃の1号木棺墓の朱は約0.5～25 μm であり、朱Ⅰと朱Ⅲに近く、時期も加味すれば朱Ⅰといえよう。中期後半～後期初頭の3号・4号・5号裏棺墓では約0.5～10 μm であり、時期的にも朱Ⅱに合致する。ただし、4号裏棺墓の資料のうち外裏内出土鉄剣に付着する資料(資料4-10)については約0.5～15 μm とやや大きいものも含んでいる。外裏内には朱漆等として銅戈を装飾していた朱と裏内に散布されていた朱が認められるが、この鉄剣に付着した朱がどちらに属するものであったのか、また全く別のものではなかったのか、十分検討を行うことができなかった。

(3) 墳墓における朱の使い分けについて

北部九州の弥生時代後期の墳墓では主に箱式石棺墓で「埋葬施設にベンガラ、遺骸頭部に朱」というように

一つの埋葬施設で赤色顔料が使分けられることが一般的である。この赤色顔料の使い分けは、弥生時代中期後半の北部九州で出現、後期後半に盛行し、古墳時代の開始と共に日本各地に広まった（本田 1988, 1995）。

一方、弥生時代後期初頭以前の喪棺墓で使用された赤色顔料は、朱だけと報告されている（本田前掲）。朱は、分析調査によってこれ以上細分することが難しいため、使用部位や使い分けの検討が十分行われてこなかったようである。今回は喪棺や人骨など直接遺物に付着する朱を観察し、科学調査を行うことによって、この点を検討することができた。

その結果、4号喪棺墓では埋葬施設に朱、遺骸上半身に朱というように、朱が使分けられていたことが明らかになった。5号喪棺墓でも埋葬施設と遺骸で朱を使い分けていたと考えられる。

報告書の記載やカラー写真を参考にすれば、那珂川町安徳台遺跡5号喪棺墓（茂編 2006）でも喪棺内面全面に朱が塗布されており、頭部周辺には別の朱が堆積しているようである。これら朱と想定される赤色物は未分析である。また春日市門田遺跡24号喪棺墓（井上編 1978）でも喪棺内面全面に朱が塗布されており、推定頭部周辺には他の部分よりも朱が濃いようである。門田例は本田による分析から朱と報告されているが、残念ながら採取位置については明記されていない（本田 1978）。これらの事例から、喪棺内での朱の使い分けは一定の広がりを持っていることが予想される。なお、門田例では棺外に朱塗柄（未分析）を持つ鉄杵が副葬されており、吹上遺跡4号喪棺墓での斛叉（柄？）での朱の塗布とも共通しているようであり大変興味深い。

これらの喪棺墓は、弥生時代中期後半の上位階層の墳墓と考えられており、箱式石棺墓で朱とベンガラが使分けられる時期とほぼ同一時期と考えられる。この時期の北部九州では、墓制や階層によって赤色顔料の使い分け方も異なっていたと考えられる。

（4）朱の産地推定について

日本の辰砂鉱山は主に北海道と西日本に分布し、特に後者は中央構造線沿いに集中している。そのうちの著名な鉱山の硫黄同位体比（ δ 34S）は、三重県丹生鉱山が $-8.88 \pm 2.69\%$ 、奈良県大和水銀鉱山が $-3.13 \pm 3.47\%$ 、奈良県神生鉱山が $-2.96 \pm 3.14\%$ 、徳島県水井鉱山が $-3.63 \pm 4.47\%$ であり、多くがマイナスの値を示す（南他 2008）。一方、中国の著名な辰砂鉱山が集中する貴州省や湖南省の各鉱山では凡そ $+12 \sim +27\%$ であり、大きくプラスの値を示す（南他 2004）。ただし、両国とも例外的な値を持つ鉱山資料も知られている。

日本各地の墳墓出土土の分析から、巨視的に見れば弥生時代の朱は大きくプラスの値を示し、古墳時代の朱はマイナスを示すものが多いことから、朱が古墳時代の開始と前後する時期に中国産から国産に転換するとされている。その背景には、中国産朱の輸入に頼っていた弥生時代から、古墳時代の幕開けとともに大和政権により国産朱が開発され、威信材として各地に配布されていた可能性が考えられている（Minami et al. 2005 など）。

本遺跡での測定結果は、弥生時代中期前半の1号木棺墓は -7.7% 、中期後半の4号喪棺墓は -10.3% 、5号喪棺墓は -13.5% であり、いずれもマイナスの値を示しており、国産朱が使用されていたと考えられる。しかも高いマイナスの値であり丹生鉱山産の辰砂が原料になっていた可能性が高い。

これまで報告された出土土の硫黄同位体比（南他 2003、河野他 2013）のうち弥生時代中期の測定結果は少ないが（測定結果はグラフで提示されているため、筆者が数字に換算している）、中期前半では佐賀県吉野ヶ里遺跡（喪棺墓か）が -6% 前後、中期後半の筑前町峯遺跡（10号喪棺墓か）が -8% 前後、福岡市吉武樋渡遺跡（79号喪棺墓か）が -8% 前後、那珂川町安徳台遺跡（喪棺墓か）が $+13\%$ 前後、福岡市比恵遺跡（57次調査か）が $+2\%$ 前後である。

中期前半の例は吉野ヶ里遺跡の1例のみであるが、同期の吹上遺跡1号木棺と同様にやや高いマイナスの値を示す。中期後半のうち峯遺跡や吉武樋渡遺跡の2例では、同期の吹上遺跡4・5号喪棺墓と同様に高いマイナスの値を示しているが、安徳台遺跡や比恵遺跡ではプラスの値を示している。ただし、比恵遺跡はプラスの値でも

低く、安徳台遺跡と同じまとまりとして捉えられるかどうかは今後の検討課題であろう。安徳台遺跡や比叢遺跡は、魏志倭人伝に記された奴国の領域と考えられている。これらプラスの値を持つ朱が全て中国産であれば、弥生時代中期後半の奴国では、他のクニに先んじて中国産朱を輸入していた可能性も考えられよう。

河野等によれば、弥生時代後期以前のマイナス値を示す朱は、国産朱と数値的に見分けが付かない中国東北部からもたらされたものである可能性も考えている（河野他 2012）。これは、弥生社会において大陸系文物の需要が高まっていくことや、中国産朱と推定される高いプラスの値を持つ朱を使用する弥生時代後期への連続性を考えて、中期の朱も中国産であろうという予測があるからのようである。

しかし、北部九州の弥生時代の墳墓では、新潟県糸魚川産翡翠を使った勾玉が副葬されることも多く、国内産原料を用いた副葬品の生産も軽視することはできないであろう。今後さらに産地指定を進めるだけでなく、広く他の考古学的事象も加味しながら、その結果を検討する必要性が求められよう。

（謝辞）

調査を実施するにあたり、以下の機関ならびに個人の方々に世話になりました。記して感謝申し上げます。

大分県立歴史博物館、九州大学比較社会文化研究院、日田市教育庁、田中良之、土居和幸、友岡信彦、舟橋京子、本田光子、渡邊隆行（機関・個人の五十音順、敬称略）

参考文献

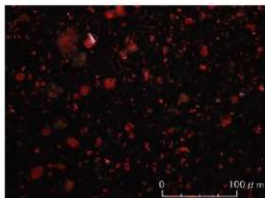
- 井上弘弘（編）1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集、福岡県教育委員会
- 河野摩耶・南武志・今津節生 2012「前方後円墳発掘期における朱の交易 イオウ同位体比分析による産地推定をとおして」『古代学研究』第196号 pp. 33-36.
- 河野摩耶・南武志・今津節生 2013「北部九州における朱の産地—イオウ同位体比からみた前方後円墳発掘期の地域相」『日本文化財科学会第30回大会 研究発表要旨集』pp. 54-55、日本文化財科学会
- 茂 和敏（編）2006『安徳台遺跡群』那珂川町教育委員会
- 本田光子「赤色顔料の分析について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集、福岡県教育委員会、pp. 166-170
- 本田光子 1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」『九州考古学』第62号、九州考古学会、pp. 39-49
- 本田光子 1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号（合併号）、日本文化財科学会、pp. 63-79
- 南武志 2003「辰砂鉱石中の硫化水銀に含まれるイオウ同位体比分析」平成15年度共同利用研究成果報告書、岡山大学地球物質科学研究センター。
(http://www.nisasa.okayama-u.ac.jp/kyodoriyoh/kyodoreport/15/kazan_minami.pdf)
- 南武志・今井亮・今津節生 2003「イオウ同位体比より見た遺跡出土朱の産地推定」『日本文化財科学会第20回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp. 50-51
- 南 武志・今井亮・豊 遙秋・富田克敏・比佐陽一郎・岡山真知子・楊 主明・今津節生 2004「中国貴州省と湖南省辰砂鉱石のイオウ同位体比測定」『考古学と自然科学』46、67-74
- Minami, T., Imai, A., Bunno, M., Kawakami, K., Imazu, S. (2005) Using sulfur isotopes to determine the sources of vermilion in ancient burial mounds in Japan. *Gearchaeology* 20: 79-84.
- 南 武志・豊 遙秋・今津節生 2008「日本における辰砂鉱山鉱石のイオウ同位体比分析」『近畿大学理工学総合研究所研究報告』20、pp. 41-48
- Yanagisawa, F. and Sakai, H. (1983) Thermal Decomposition of Barium Sulfate Pentoxide-Silica Glass Mixtures for Preparation of Sulfur Dioxide in Sulfur Isotope Ratio Measurements. *Analytical Chemistry* 55, 985-987.

表1 吹上遺跡出土赤色顔料の分析結果一覧

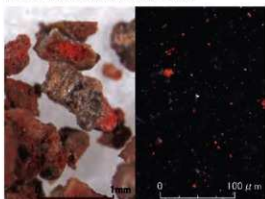
遺構名称	遺構	時期 (弥生時代)	資料 番号	資料名称	調査方法			各分析結果		赤色顔料 の種類	備考		
					顕微鏡 実 体	生 物	X R F	X R D	生物 顕微鏡			XRF	
吹上 遺跡	1号本相墓	中期前半～中頃	1-1	朱①	○	○	○		朱	Fe2g	朱		
			1-2	朱②	○	○	○		朱	Fe2g	朱		
			1-3	朱③	○	○	○	○	朱	Fe2g	磁砂	朱	磁器同位対比分析
			1-4	棺内土①	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	クサレあり。
			1-5	棺内土②	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	クサレあり。
			1-6	朱④	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			1-7	朱⑤	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			1-8	赤土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			1-9	黒銅器土①	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			1-10	黒銅器土②	○	○	○		なし	Fe	なし	なし	クサレあり。
			1-11	黒銅器土③	○	○	○		なし	Fe2g	朱?	なし	クサレあり。
			1-12	黒銅器土④	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	クサレあり。
			1-13	黒銅器土⑤	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			1-14	黒銅器土⑥	○	○	○		なし	Fe	なし	なし	クサレあり。
	2号本相墓	中期後半	2-1	黒銅器土	○	○	○		なし	Fe	なし	赤色酸化鉄粒子あり。	
	2-2		下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	発掘時の混入か。		
	3号本相墓	中期末～後期初	3-1	上土	○	○	○		朱	Fe2g	磁砂	赤色酸化鉄粒子あり。	
	4号本相墓	中期後半	4-1	下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱		
			4-2	遺骨埋納土	○	○	○		朱	Fe2g	朱		
			4-3	下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱		
			4-4	上土	○	○	○	○	朱	Fe2g	磁砂	朱	磁器同位対組成分析
			4-5	朱分析用	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-6	(注記なし)	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-7	上土・下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-8	下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-9	黒銅器土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-10	鉄釘着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-11	玉に付着朱	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-12	右1日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-13	右2日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-14	右3日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-15	右4日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-16	右5日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-17	右6日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-18	右7日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
			4-19	右8日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	
4-20			右9日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-21			右10日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-22			右11日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-23			右12日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-24			右13日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-25			右14日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-26			右15日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-27			下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-28			上土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-29			外土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
4-30			土間口縁～突部の土	○	○	○		なし	Fe	なし	なし		
5号本相墓	中期後半	5-1	棺内土	○	○	○		朱	Fe2g	朱			
		5-2	下土(上土内土も若干)	○	○	○		朱	Fe2g	朱			
		5-3	下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱			
		5-4	上土	○	○	○		朱	Fe2g	朱			
		5-5	頭下(上土)	○	○	○	○	朱	Fe2g	磁砂	朱	磁器同位対比分析	
		5-6	右玉穿孔内	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱	赤色酸化鉄粒子あり。	
		5-7	左1日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-8	左2日輪着土	○	○	○		なし	Fe2g	朱?	なし		
		5-9	左4日輪着土	○	○	○		なし	Fe2g	朱?	なし		
		5-10	左5日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-11	左6・7日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-12	左8日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-13	左9日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-14	左10日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-15	左11日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-16	左12日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-17	右2日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-18	右3日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-19	右4日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
		5-20	右5日輪着土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	朱		
6号本相墓	中期後半	6-1	下土	○	○	○		朱	Fe2g	朱	発掘時の混入か。		



1. 1号木棺墓の赤色顔料(資料1-3,側射光,5倍)
赤色顔料の種類は朱。朱は床面西端に分布しており、この部分に遺骸頭部が推定される。



2. 同朱の粒子(資料1-3,側射光,200倍)
朱の粒子径は、約25µm以下。



3. 3号壺棺墓の赤色顔料(資料3-1,左:側射光,25倍,右:側照光,200倍)
赤色顔料の種類は朱。朱の粒子径は約10µm以下。



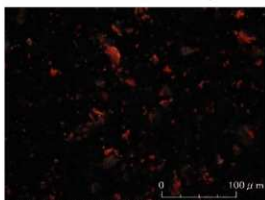
4. 4号壺棺墓の上蓋内面の赤色顔料(Oが床側)
赤色顔料の種類は朱。内面全面に塗布されており、その使用量は下甕よりも多いようである。



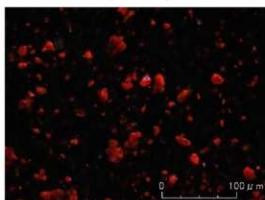
5. 同下蓋内面の赤色顔料(Oが床側)
赤色顔料の種類は朱。内面全面に塗布されており、その使用量は上甕よりも少ないようである。



6. 同蓋内面の朱(資料4-8,側射光,5倍)
壺棺床面では、棺内面に塗布された朱と遺骸に撒かれた朱の分離は困難であった。

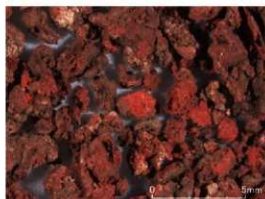


7. 同蓋内面の朱粒子(資料4-8,側射光,200倍)
朱の粒子径は約10µm以下。

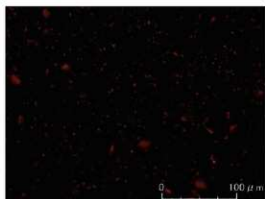


8. 同外甕出土鉄刻付着朱(資料4-10,側射光,200倍)
朱の粒子径は約15µm以下。

図 1-1 吹上遺跡出土の赤色顔料



9. 同玉付着の朱(資料4-11,側射光5倍)
遺骸に撒かれたものか。



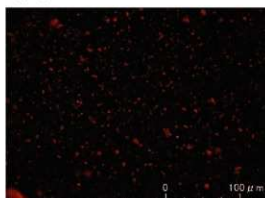
10. 同玉付着の朱粒子(資料4-11,側射光200倍)
朱の粒子径は、約10 μm以下。



11. 5号壺棺墓の上蓋内面の赤色顔料(Oが床側)
赤色顔料の種類は朱。頭骨の下付近(O部分)だけが赤い。



12. 同勾玉穿孔内の朱(資料5-6,側射光20倍)
朱の凝集塊に混じて地山に含まれる赤色酸化鉄粒(赤茶色の小塊)が一定量認められる。



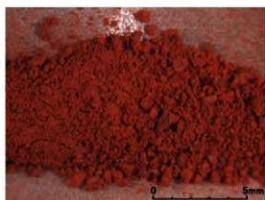
13. 同勾玉穿孔内朱の粒子(資料5-6,側射光200倍)
朱の粒子径は約10 μm以下。



14. 硫黄同位体比分析資料(資料1-3,側射光5倍)
1号木棺墓の朱。ほぼ朱だけを分離できた。



15. 硫黄同位体比分析資料(資料4-4,側射光5倍)
4号壺棺墓の朱。朱以外の鉱物も混じている。



16. 硫黄同位体比分析資料(資料5-5,側射光5倍)
5号壺棺墓の朱。ほぼ朱だけを分離できた。

図 1-2 吹上遺跡出土の赤色顔料

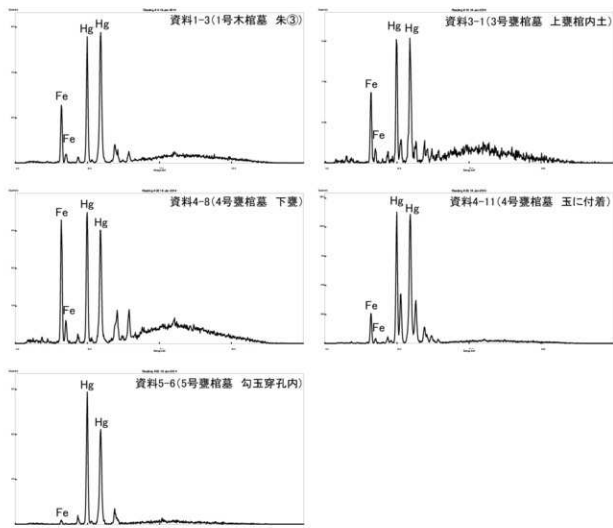


図2 吹上遺跡出土赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

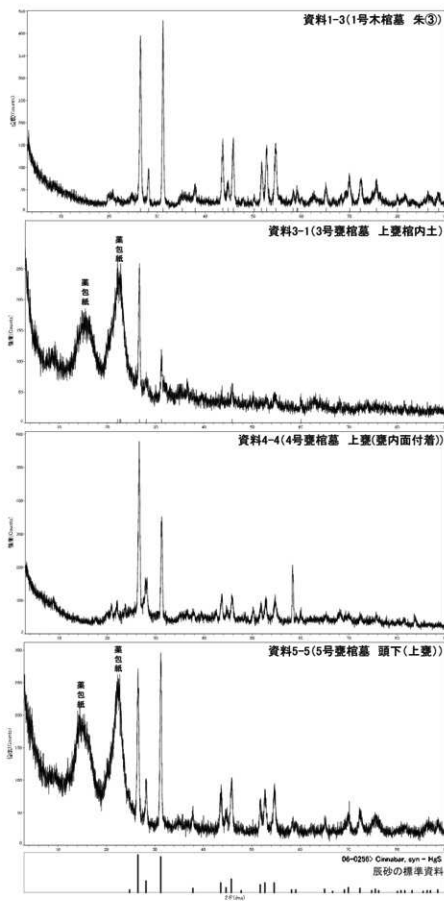


図3 吹上遺跡出土赤色顔料のX線回析図

第8節 吹上遺跡5号壘棺墓出土イモガイ貝輪付着赤色顔料の分析

川本耕三¹

1: 財団法人元興寺文化財研究所保存科学研究室

2012年度に行った大分県吹上遺跡出土イモガイ貝輪修理事業に伴って実施した赤色顔料の分析について報告する。

1. 分析対象

大分県吹上遺跡出土イモガイ貝輪1点(預20120340 No.2-10)(図1)(報告書第30図-10残存小破片)

2. 分析内容

イモガイ貝輪表面に付着した赤色顔料について蛍光X線分析装置による定性成分分析を行った。

3. 使用機器と測定条件

◆エネルギー分散型蛍光X線分析装置(XRF)【SIIナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気中でφ1.8mmのコリメータを用い、45kVの管電圧で300秒開行った。なお、X線管球はモリブデン(Mo)である。

4. 結果

イモガイ貝輪の赤色顔料が付着した部分(図1の分析箇所A)と、ほとんど付着していない部分(図1の分析箇所B)の蛍光X線分析スペクトルを図2に示した。

分析箇所Aからは水銀(Hg)を強く検出し、分析箇所Bからはカルシウム(Ca)を強く検出したことから、赤色顔料は水銀朱(HgS)であると考えられた。



図1 No.2-10 イモガイ貝輪とその分析箇所

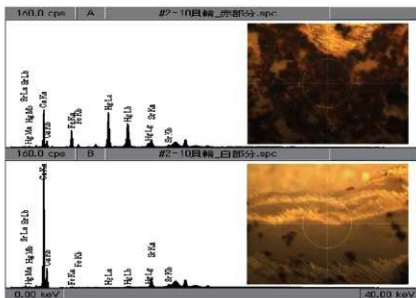


図2 No.2-10 イモガイ貝輪の蛍光X線分析スペクトル

第9節 自然科学分析調査の総括

今回の報告にあたり、各先先生方には原稿執筆を快く承諾いただき玉稿を賜った。改めて感謝しつつ、自然科学分析の成果について簡単に以下に纏める。

【出土人骨の分析】11の遺構から出土した人骨のそれぞれの形質的特徴や性別や年齢が明らかとなった。簡単にまとめると、4次調査では、1号喪棺墓が成人以降、1号石棺墓で成年女性、2号石棺墓で成年男性、6次3号喪棺墓は改葬された成人、4号喪棺墓は熟年男性、5号喪棺墓は成人後半から熟年前半の女性、9次1号喪棺墓は熟年女性、2号喪棺墓は成人の女性か、3号喪棺墓は成年男性、12号喪棺墓（小児棺）では幼児（3歳前後）、5号石棺喪棺併用墓は不明との結果を得た。また、6次調査4・5号喪棺墓出土人骨ではある程度の肉体労働を伴う生業活動に従事していた可能性が推測されている。

【副葬品着装状況】6次調査4・5号喪棺墓出土人骨の副葬品着装状況からは判明した内容について簡単にまとめる。ガラス管玉は、4号喪棺墓出土状況から、首飾り等の綴られたもの以外の、布に縫いつけたり編み込んだものであった可能性が指摘され、ガラス管玉の多様な用途を考える上で重要な知見を得ている。5号喪棺墓の緒締勾玉は実際に緒締玉として使用されていた可能性が指摘された。

貝輪の着装状況においては、5号喪棺墓イモガイ貝輪が女性の左右の手に着装されていたことや、一部手首にはまっていた特徴が抽出され、4号喪棺墓ゴホウラ貝輪においても、人骨の特徴や年齢、貝輪の特徴などから、両埋葬の貝輪が埋葬時に着装されたものであることが指摘された。また、男女ペアの埋葬において、この死後着装という貝輪の使用方法は同じであり、筋力の発達状況からこれら厚葬墓被葬者の「貴族化」は起こっていないなかったと指摘された。

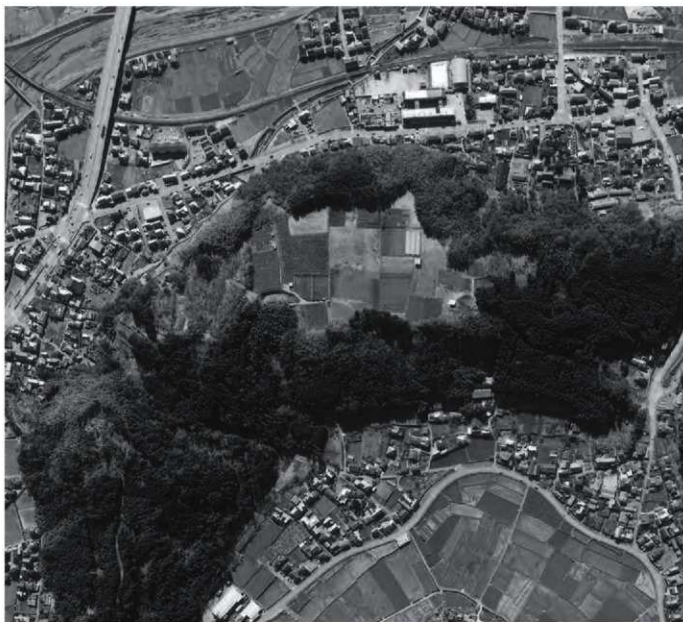
【青銅製品の分析】墳墓より出土した銅剣1点、把頭飾1点、銅戈2点の鉛同位体比分析を行い、それが朝鮮半島産の素材を用いていることが判明した。4号喪棺墓の細形銅戈が朝鮮半島産材料を使用する点は、これまでの他事例と比較しても齟齬はないが、2号喪棺墓の中細形銅戈が朝鮮半島産材料を用いる点は、他事例では中国華北産材料が主体を占めるように変化することから、日本で青銅利用が始まった比較的早い時期の典型的な資料であると指摘された。また、1号木棺墓の細形銅剣の朝鮮半島産材料を用いている点も他事例の特徴と齟齬はなく、把頭飾は銅剣とは別に作られていたと指摘された。

【出土ガラス管玉の分析】出土管玉の破砕資料2点の分析から、ガラス素材は鉛バリウムガラスであることが明らかとなった。しかし、北部九州の厚葬墓から出土したガラス管玉の事例とは異なり、漢系添加による着色は観察されず、銅イオンなどによる着色が想定された。北部九州で流通したガラス管玉は製作技法や法量は類似するものの、着色剤にバリエーションがあることが判明した。またガラス管玉に含有される鉱物によって生産地や加工地を比定できる可能性などの展望が示された。

【出土勾玉の分析】4・5号喪棺墓から出土した勾玉の蛍光X線分析の結果、緑色石材はヒスイであることが判明し、緑色部分の多い材料を使う弥生時代の有力者の墓からの出土事例と共通していた。玉の特徴は4号喪棺墓は歪定形勾玉、5号喪棺墓が緒締形勾玉である。近年の研究は、ヒスイ製勾玉は唐津地域で北陸で加工した素材を入手し、様々な形の勾玉が創出され、九州各地へ拡散したと推察されているが、緒締形勾玉の出土事例は唐津市から福岡市西部に限定されており、日田地域で出土したことは玉類の流通と拡散を考える上で重要であると指摘された。

【赤色顔料の分析】赤色顔料の分析によって、3・4・5号喪棺及び1号木棺から出土した赤色顔料は全て朱で、国産の丹生鉱山産の可能性が高いと考えられた。さらに、顔料の塗布場所が限定されていることなどから、この時期から見られる赤色顔料の部位による使い分けが始まっていた可能性が高いと指摘された。

第 15 章 調査の総括



吹上原地空中写真



第1図 吹上原台地地形測量図 (1/5500)

第1節 各調査区の概要

1. 各調査の概要

これまでに刊行した『吹上I～V』の第3～13章の調査記録において、11次に及ぶ吹上遺跡の発掘調査の記録を報告してきた。本報告をもって調査報告は完了となるため、改めて各調査区の概要を整理する。なお遺構の数については、既報告で誤りがある箇所が見られるため、本報告をもって正式な報告とする。なお、総調査面積は、2387.9㎡となる。 ※各報告書の章立てについては例言を参照。

○1次調査（昭和54年度）

調査期間：昭和54年8月20日～10月17日

調査面積：517㎡

調査目的：農業基盤整備事業に先立つ試掘調査

調査概要：大きく4地点に分かれた各地点でグリットを中心とした調査を実施。弥生前期後半～弥生終末期の集落、石棺墓などの墳墓群が発見された。なかでも台地中央部において後期前半の集落が確認されていることが注目される。

検出遺構：竪穴建物18軒、溝4条、貯蔵穴4基、土坑14基、石棺墓5基、小児用甕棺墓3基

○2次調査（昭和55年度）

調査期間：昭和55年11月17日～昭和56年1月29日

調査面積：538㎡

調査目的：農業基盤整備事業に先立つ試掘調査

調査概要：大きく5地点に分かれた各地点でグリットを中心とした調査を実施。弥生前期後半から終末期の集落、甕棺墓などの墳墓群が発見された。なかでも、中期後半の成人用甕棺墓2基に鉄刀片や勾玉が副葬されていることが注目される。

検出遺構：竪穴建物5軒、竪穴状遺構9基、貯蔵穴9基、土坑13基、甕棺墓3基、小児用甕棺墓1基、土壇墓2基、ビット多数

○3次調査（昭和60年度）

調査期間：昭和60年11月18日～昭和61年1月25日

調査面積：112㎡

調査目的：農道拡幅整備工事に伴う発掘調査

調査概要：台地東側の農道沿いのトレンチ調査を実施。弥生時代前期後半～中期初頭頃の貯蔵穴群の存在と後期初頭の竪穴建物の存在が注目される。

検出遺構：竪穴建物1軒、貯蔵穴4基、土坑4基、ビット

○4次調査（昭和61年度）

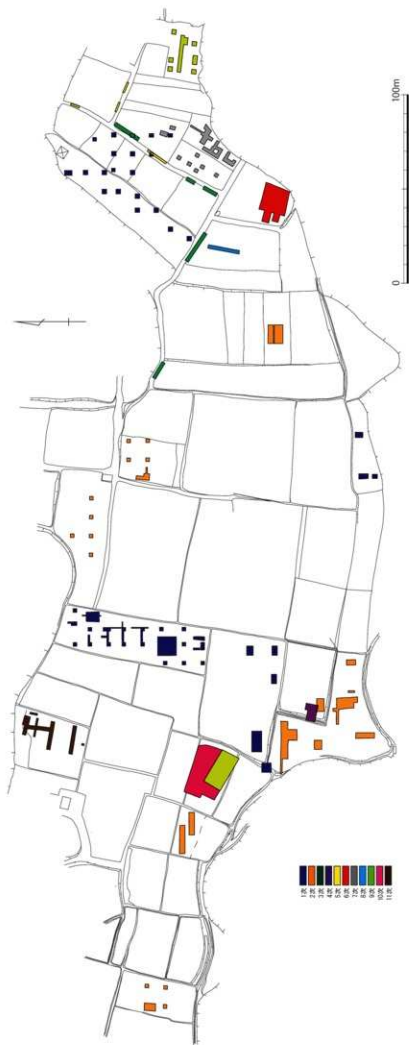
調査期間：昭和62年1月16日～昭和62年2月13日

調査面積：51.7㎡

調査目的：個人の農地開墾に伴う発掘調査

調査概要：台地中央部の農地に2地点のトレンチを調査。1・2次調査で確認された墓群周辺で箱式石棺墓、後期後半の甕棺墓が確認される点が注目される。

検出遺構：土坑8基、甕棺墓2基、箱式石棺墓2基、ビット



第2図 調査区配置図 (1/2000)



○5次調査（平成2年度）

調査期間：平成3年2月4日～2月5日

調査面積：25㎡

調査目的：農道拡幅工事に伴う発掘調査

調査概要：台地東側の農道沿いにトレンチ調査を実施。3次調査と同様に確認された弥生時代前期後半～中期初頭頃の貯蔵穴群の存在が注目される。

検出遺構：貯蔵穴4基、ピット

○6次調査（平成7年度）

調査期間：平成7年5月8日～6月11日、平成7年6月12日～平成8年1月23日

調査面積：227㎡

調査目的：鉄塔建設に伴う発掘調査、重要遺跡確認調査

調査概要：鉄塔工事予定範囲内の全面発掘調査を実施。弥生時代中期後半の裏棺墓を中心とした墳墓群のうち、4基の墳墓から青銅製武器類、鉄剣、南海産貝輪、装身具などの副葬品が出土し、3基の裏棺墓では人骨が確認された。副葬品の着装状況が分かる極めて稀な事例であることから、開発を中止し遺跡の保存を前提とした確認調査を実施。現地は県指定史跡として指定された。そのほか弥生時代前期後半の貯蔵穴群、古代末期の経塚などの存在も確認される。

検出遺構：裏棺墓7基、木棺墓3基、貯蔵穴1基、溝2条、土坑10基、経塚1基

○7次調査（平成8年度）

調査期間：平成9年3月4日～3月28日

調査面積：145㎡

調査目的：重要遺跡確認調査

調査概要：6次調査の墳墓群の広がりを確認するための確認調査を実施。弥生時代前期後半～中期初頭頃の貯蔵穴、中期後半の土坑類を検出。裏棺墓などは検出されていない。

検出遺構：竪穴建物1軒、貯蔵穴4基、土坑4基、ピット

○8次調査（平成9年度）

調査期間：平成9年3月4日～3月28日

調査面積：28.7㎡

調査目的：重要遺跡確認調査

調査概要：6次調査の墳墓群の広がりを確認するための確認調査2年目。弥生時代前期後半から中期初頭頃の遺構群を確認したが、裏棺墓などは検出されていない。6次調査区周辺の墳墓群の広がりを確認するには至らなかったため、墳墓域の広がりがある程度限定された。

検出遺構：竪穴建物2軒、土坑4基、ピット

○9次調査（平成10年度）

調査期間：平成10年7月22日～8月31日

調査面積：291㎡

調査目的：重要遺跡確認調査

調査概要：吹上遺跡全体の保存を目的とした内容把握のための確認調査を別府大学の協力を得て実施。台地東端と中央部の2地点（A・B）に分かれて調査を実施。A地点では弥生時代前期後半～中期初頭の貯蔵穴群が確認され、B地点では弥生時代中期初頭～前半の竪穴建物3軒、弥生時代前期後半～中期初

頭の貯蔵穴などの集落の広がりが確認されている。中期後半から後期初頭頃の裏棺墓や小児用裏棺墓、木棺墓などが検出されており、1・2・4次調査に続き、この一帯の墳墓群の様相が明らかになった点が注目される。

検出遺構：A地点)貯蔵穴5基、ピット

B地点)竪穴建物3軒、貯蔵穴8基、土坑12基、溝2条、成人用裏棺墓4基、小児用裏棺墓4基、木棺墓2基、石棺裏棺併用墓1基、石蓋土壇墓1基、不明遺構6基、ピット

○10次調査(平成11年度)

調査期間：平成11年7月26日～8月31日

調査面積：330㎡

調査目的：重要遺跡確認調査

調査概要：吹上遺跡全体の保存を目的とした内容把握のための確認調査の2年目。別府大学の協力を得て実施。9次調査B地点で確認された集落遺構や墳墓群の広がりを確認する目的で実施した。墳墓群や貯蔵穴群といった9次調査で確認された遺構群のほかに、V字形を呈する後期後半～終末期の大溝と後期後半代の竪穴建物で確認された点が注目される。

検出遺構：竪穴建物5軒、貯蔵穴10基、土坑21基、溝1条、掘立柱建物2棟、小児用裏棺墓2基、木棺墓3基、土壇墓5基、ピット

○11次調査(平成12年度)

調査期間：平成12年7月24日～8月11日

調査面積：122.5㎡

調査目的：重要遺跡確認調査

調査概要：吹上遺跡全体の保存を目的とした内容把握のための確認調査の3年目。別府大学の協力を得て実施。10次調査で確認された大溝の延長と性格を確認する目的で実施。断面V字形を呈する後期後半から終末の溝が確認され、10次調査区から延びる一連の溝と判断された。台地中央部を南北に分断する条溝と考えられる。また、この溝からT字状に巡る溝と並行する細い溝の存在も認められた。弥生終末期には、台地縁辺を環濠が巡り、内部を条溝で区画する集落構造が明らかになった点が注目される。

検出遺構：竪穴建物1軒、貯蔵穴2基、土坑5基、溝2条、ピット

2. 補足遺物の記録と修正事項

過去の調査報告時から新規で紹介する必要のある遺物について報告する。

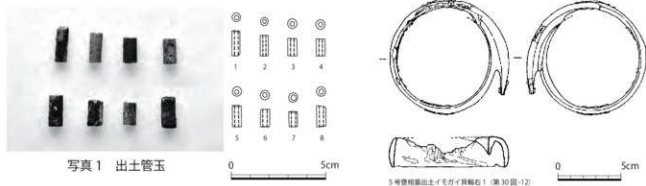
第4図1～8は新報告のガラス管玉である。いずれもほぼ完形の個体が1がやや長いが始どが1cm前後の長さを測る。

ガラス管玉は6次調査の報告書「吹上IV」において、既に525点出土と報告していた。しかし、その後の整理において、赤色顔料のサンプル用の土壇内から2点、人骨に付着していた土壇内から6点のガラス管玉の出土が見られた。今回これらの新発見の遺物を報告するもので、これによりガラス管玉の正式な出土数は533点と変更するものとする。

第4図9は6次調査5号裏棺出土のイモガイ製貝輪である。新発見の個体ではなく、「吹上IV」第30図12(右1)として報告している図の縮尺が製図の過程で誤っており、5/18という縮尺となっていたことから改めて1/3の図として報告する。

写真2～5は「吹上IV」において掲載もれとなっていた写真で、写真2は4号裏棺出土ゴホウラ貝輪(右手

4)、写真3は5号喪棺出土イモガイ貝輪(左3)、写真4は5号喪棺出土イモガイ貝輪(左11)、写真5は5号喪棺出土イモガイ貝輪(右4)である。



第4図 6次調査4号喪棺墓出土ガラス管玉・5号喪棺出土イモガイ貝輪(1/2、1/3)

第1表 出土管玉観察表

図版	番号	調査区	遺構名	種別	材質	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考
4	1	6次	一括	管玉	ガラス	1.30	0.45	0.25	0.36	右肋骨内
4	2	6次	3土	管玉	ガラス	1.10	0.45	0.20	0.40	右肋骨内
4	3	6次	4土	管玉	ガラス	0.95	0.50	0.20	0.46	右肋骨内
4	4	6次	5土	管玉	ガラス	0.90	0.50	0.20	0.32	右肋骨内
4	5	6次	6土	管玉	ガラス	1.15	0.50	0.20	0.52	頭蓋骨内
4	6	6次	7土	管玉	ガラス	0.95	0.50	0.20	0.27	肋骨内
4	7	6次	8土	管玉	ガラス	0.80	0.50	0.25	0.19	肋骨横赤色土
4	8	6次	9土	管玉	ガラス	1.10	0.50	0.25	0.44	赤色顔料付



写真2 4号喪棺墓出土ゴホウラ貝輪(右手4)



写真3 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(左手3)



写真4 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(左手11)



写真5 5号喪棺墓出土イモガイ貝輪(右手4)

第2節 吹上遺跡の出土遺物と遺構の特色について

1、出土土器と石器の特色について

①日田地域の弥生土器の変遷と吹上遺跡出土土器の特色

吹上遺跡では前期後半から後期後半頃までの土器が万遍なく出土している。その多くは、北部九州の各時期の標識土器である板付Ⅱ式、城ノ越式、須玖式、高三瀨式、下大隈式の特徴を有し、ほぼ並行するといっても差し支えない。しかし、日田盆地は豊前・豊後と筑前・筑後の東西地域に挟まれ、また南北には肥後（阿蘇）と筑豊地域へと抜ける街道が延びるという地理的特徴があり、単純に北部九州の土器に類似するといっても、各地域の影響が随所に見られることは既に知られている。そこで本細節では、日田盆地を代表する弥生集落遺跡である吹上遺跡出土土器を中心とした弥生土器の時期変遷について概観しつつ、日田盆地の弥生土器の特徴について述べるものとする。

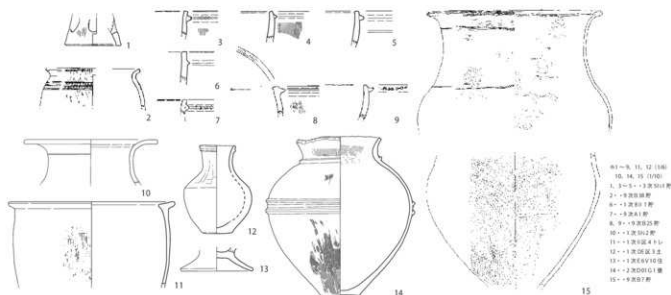
まず、作業の前提として日田盆地の弥生土器編年体系が現時点で整理されていないことが問題となる。地域の特徴を捉えた編年の整理は今後の弥生集落研究を進めるうえで重要な課題であり、早急な整理が必要であるが、日田盆地では大規模調査の未刊行報告が多く、現時点で断片的な事例が多い。そこで、本小節では、他地域の編年^{*1}を援用しつつ、日田盆地の弥生土器編年整備の参考となる遺構を列挙して説明するものとする。なお、今回は、あくまで吹上遺跡の時期変遷と特徴を抽出するための作業であるため、比較的一括性の高い遺構を中心に羅列するものであり、型式設定や系譜の整理、様式の設定など本来行うべき作業については今後の編年体系整備における課題としたい。

以下、各時期毎に特徴を述べるものとするが、その時期区分は各編年との対応から、前期後半5期区分（板付Ⅱa古、Ⅱa古、Ⅱb古、Ⅱb新、Ⅱc）、中期7期区分（城ノ越古、新、須玖Ⅰ古、Ⅰ中、Ⅰ新、Ⅱ古、Ⅱ新）、後期5期区分（高三瀨古、高三瀨中、高三瀨新、下大隈古、下大隈新）に分けて説明するものとする。

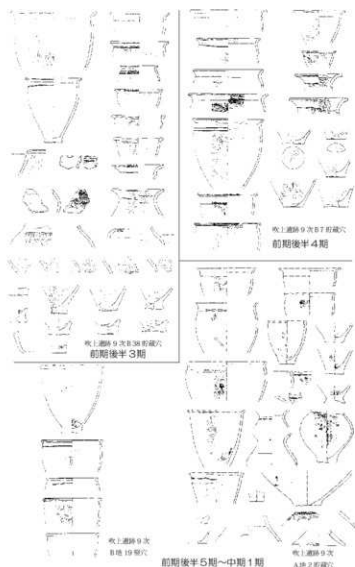
吹上遺跡出土土器で最も古い時期の特徴を有するのは、前期後半で9次調査7号貯蔵穴、38号貯蔵穴などが挙げられる（第6図）。38号貯蔵穴出土遺物では、胴部が張り出さない砲弾型の如意系口縁甕が大平を占め、口縁部に刻目、頸部下には沈線文が施され、突帯文系の屈曲甕が全く見られないことから、前期後半3期相当と考えられる。ただし、一部亀ノ甲タイプの口縁部と厚みのある底部も混じることから、5期頃が下限と考えられる。7号貯蔵穴出土土器も同様の器形であるが、やや胴部が張り出す甕や口縁部が垂れ下がって屈曲する甕の存在などから、前期後半3～4期段階相当と捉えられる。日田盆地内では夜白式の甕の破片などが採集されるが、遺構に伴って出土する事例はなく、続く板付Ⅰ式に継続する遺物は出土していない。このため、弥生時代の遺構が確認されるのは前期後半からであり、本遺跡や小迫辻原遺跡A区52号土坑等のように前期後半3期頃が上限と考えられるが、遺構数は少なく、吹上遺跡も含めて本格的に遺構が増加するのは前期後半5期以降である。

この時期の土器群の特徴は北部九州以西地域の様相を備えており、なかでも第5図15の7号貯蔵穴出土の大型甕は内外ともに丁寧なミガキを施し、外反する口縁部内面に粘土帯を貼付け、頸部がややクビレて肩部外面に沈線文が巡る特徴を備えている。これは、板付Ⅱb式の甕の特徴で、柳田氏（柳田2003）の前期後半（Ⅱ-3a期）の様相を呈しており福岡地域からの影響と考えられよう。しかし、これらのセットの中には第5図2の38号貯蔵穴出土の甕のように頸部沈線の間に刺突列点文を施すという特異な文様も見られる。周防などで見られる刺突列点文の影響であると想定すれば、豊前地域の影響を受けていたものか。

この東九州的な特徴は、続く前期末から中期初頭にも顕著に確認される。この時期は吹上遺跡だけにとどまらず、日田盆地内で遺構数が増加する時期である。9次A地点2号貯蔵穴やB地点19号竪穴（第6図）、3次5トレンチ1号貯蔵穴出土遺物などは、三角口縁は小さく、胴部の開きも緩やかで、底部は窄まりやや厚底気味



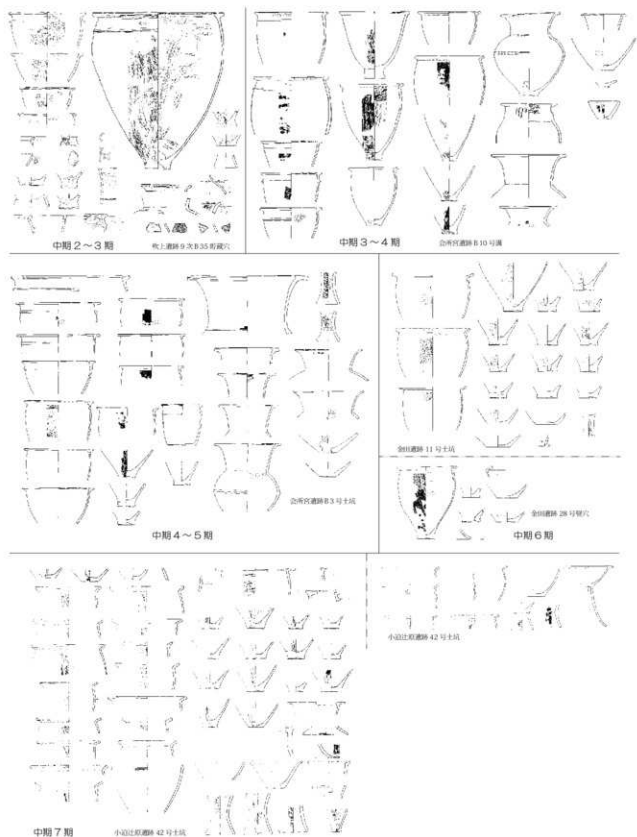
第5図 各地域の影響が見られる吹上遺跡出土土器 (1/6・10)



第6図 弥生前期後半の日田盆地の土器 (1/15)

を呈していることから、前期後半5期~中期1期頃と捉えられる。続く中期初頭から前半の事例として、9次B地点35号貯蔵穴出土遺物(第7図)があり、三角口縁がL字気味に張り出し、頸部に三角突帯が貼り付けられ、底部は厚く上底を呈する裏が多数を占め、口縁部が逆L字になる裏が出土することなどから、中期2期に相当しよう。なお、この遺構では逆L字気味の口縁部を持つ裏が上層から出土しており、廃棄の下層が中期3期に相当すると考えられる。このように、この時期の遺物の特徴は亀ノ甲タイプが大半を占める北部九州以西地域の特徴を示しているのであるが、中には第5図3~9のように素口縁下部に突帯を巡らせる東九州特有の下城式的様相を呈する土器群も一定程度確認される。また、壺の口縁部内面に突帯をめぐらせるもの(第5図10)や長方形の透孔を配した鉢の脚部(第5図1)などの特徴は豊前地域の特徴を顕著に示している。これらの遺物の出土数は全体の数%程度と少ないものの一定の比率をもって存在することは前時期からの影響関係が継続していたことを物語っているといえよう。

続く中期前半から中頃の纏まった土器が出土する遺構は吹上遺跡では少ない。1次E6IVグリッド土坑出土遺物や1次II区5トレンチ1・3号裏棺などは、如意系口縁をL字状に小さく折り曲



第7図 弥生時代中期の日田地域の土器 (1/15)

げ、頸部下部に突帯が巡り、胴部は張らない裏や張り出した胴部にM字状凸帯を巡らせる壺などが見られ、中期4~5期の特徴を有しているが、出土量が少ないため、他地域の特徴は吹上遺跡の事例では明確ではない。そこで、この時期の土器が纏まって出土している日田盆地の他遺跡の事例で整理すると、会所宮遺跡B区10号溝（中期

3～4期)、3号溝(中期4～5期)出土遺物(第7図)が相当する。内部にやや突き出す鑄状の逆L型口縁裏が8割(22点中18点)、如意系のくの字口縁裏が2割(22点中4点)の比率で、壺は素口縁が約2割弱(12点中2点)、鑄形口縁が8割弱(12点中10点)の比率となっている。北部九州以西と以東地域の特徴が裏と壺で逆転しているが、この器形のバリエーションの違いから、東西両地域の影響が混在している状況を見て取ることが出来よう。また、1次調査Ⅱ区4トレンチから出土している土器(第5図11)は平坦口縁を上面内側に傾斜し、中窪みとなっており、筑後地域にも散見される黒髪式的特徴を有していることも注意が必要である。

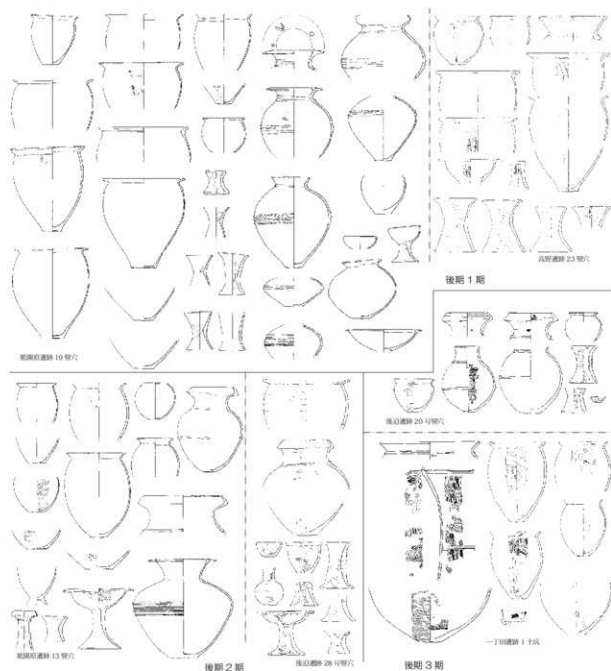
中期後半においては、2次調査D01区4・5トレンチの住居跡埋土などからそれぞれくの字口縁の裏や丹塗土器が出土しているが纏まった土器が出土する完掘事例が吹上遺跡では少ない。中期6期の土器が纏まって出土している日田盆地の他遺跡の事例では、金田遺跡11号土坑、28号竪穴(第7図)が該当する。一括廃棄された遺物の多くが、胴部が緩やかに張り出し、くの字口縁をややつまみあげる裏など、須玖Ⅱ式古段階の特徴を有している。中期末の時期の中期7期では小迫辻原遺跡B区42号土坑や土器溜まり(第7図)出土遺物が該当し、6期よりも胴部が張り出し、頸部がやや窄まる器形で、跳ね上げ状を呈する裏が顕著となる。これらは北部九州以東系の特徴であり、3～5期に見られた以西系地域の鑄先状の逆L字口縁裏は僅かに数点見られる程度と極端に少ない。

このように日田盆地では、須玖Ⅱ式段階では須玖Ⅰ式期よりも増して、多くの土器が北部九州以東系の特徴を有している。また、吹上遺跡でも第5図12の直口壺や14の頸の短い素口縁壺などが比較的多く含まれるのに対し、鑄先状口縁の裏は10次調査144号裏棺などのように丹塗りの精製裏にほぼ限定される。このことは日常容器の大半が北部九州以東系の影響を強く受け、以西系の影響が限定的となっていたことを示している。この影響関係については、武末氏の論考(武末1987)が既に知られるが、隣接する浮羽地域の須玖Ⅱ式土器の特徴を概観した小澤氏の論考(小澤2005)によれば、筑後川下流域側へと向かうほど土器の裏の鑄先状口縁の比率が高まり、日田へと向かうほどその割合が低くなり、須玖Ⅱ式新段階になるとさらに、以東系地域の影響が浸透するとまとめており、本論の動向ともほぼ一致する傾向と言える。

とりわけこの時期の吹上遺跡では生活遺構が少なく感じるが、裏棺墓を要する墓域のほかに、1次調査Ⅰ区E6Vグリット9号住、D・E6Ⅰ01グリットなどで須玖Ⅱ式古段階の鑄先状口縁の丹塗り高環や跳ね上げ口縁裏が散見されることから、未調査部分に生活域が広がるものと想定しておきたい。

次に後期に入ると、初頭では吹上遺跡3次トレンチ1号竪穴から、より胴部の張り出す平底のくの字口縁裏などが出土している。この後期1期の市内の事例としては、祇園原遺跡19号竪穴(第8図)があり、胴部が卵形に張り出すタイプの裏や袋状口縁や頸部の短い素口縁の壺、鑄先状口縁の平坦部に円形浮文を貼付け頸部に多条突帯を施す裏などがセットで見られ、高野遺跡23号竪穴(第8図)には直線的に延びる口縁端部を摘み三角状にする広口壺などが伴っている。これは従来中期末から後期初頭とされる遺物群であるが、くの字口縁の確立、突帯の多条化などの現象から、後期初頭として位置付けている。

続く後期前半には吹上遺跡1次E5Ⅱ00グリットや祇園原遺跡13号竪穴(第8図)の出土遺物が該当し、卵形に長胴化が進む裏と、素口縁壺が緩やかに外形する特徴が見られ、後期2期に相当する。後迫遺跡28号竪穴(第8図)は、複合口縁の腹口縁がやや明瞭となり、退化気味の長頸壺や高環などの存在から、2期でもやや後続するものであるうか。これらのセットには裏の跳ね上げ口縁と共に壺の素口縁のものも多く、また、長頸壺などの存在も北部九州以東地域の影響が強いものと考えられる。この影響関係は須玖式期から継続した状況と推測されよう。またこの時期には、台付裏が数%の割合で見られるようになる。第5図13のような低脚で幅広のものが殆どで、後期後半に至るまで散見される。台付裏は肥後系の影響とも考えられるが、肥後地域域脚部が高くなく、筑後川下流域や豊前地域で一定程度見られるものに類似することから、肥後地域の直接的な影響は想定

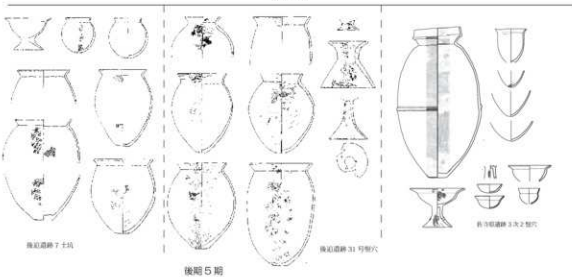
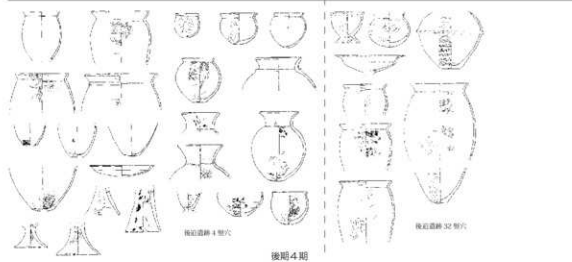
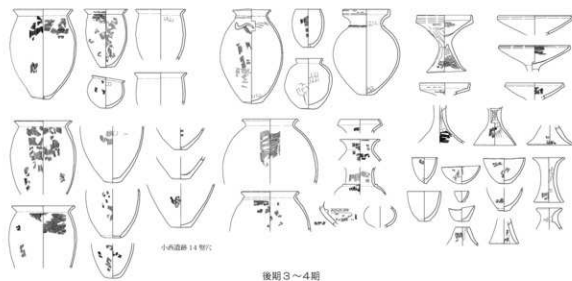


第 8 図 弥生時代後期前半の日田地域の土器 (1/15)

しえない。

後期中頃の時期は吹上遺跡では、1次調査 I 区各グリッドで出土する遺物がこの時期に一部該当するが、明瞭な遺構は確認されていない。この時期の土器が纏まって出土している日田盆地の他遺跡の事例として後迫遺跡 13 号堅穴や一丁田遺跡 1 次 1 号土坑（第 8 図）などがある。一括性が高く、より長胴化した卵形の裏や腹口縁が明瞭で直線的な口縁をなす複合口縁壺など後期 3 期に該当する。後期 3～4 期の時期に該当する小西遺跡 14 号堅穴（第 9 図）出土事例では、高坏がまとまって出土しており、口縁端部が内湾する高坏と口縁部が垂直に立ち上がる高坏など多種類が見られ、それぞれ豊前地域と瀬戸内系の影響下にあったものと考えられる。

後期後半の時期は吹上遺跡では 1 次 I 区 E 6 V 10 堅穴や 1 次 D 6 III 01 G 3 溝、10 次 100 号溝などから出土した遺物が該当するものか。この後期 4 期に該当するものに後迫遺跡 4、32 号堅穴（第 9 図）などが該当する。長胴化が進展し、口縁部が上方に立ち上がり、底部がよりレンズ状になる裏が多くみられる。また、高坏は大き



第9図 弥生時代後期後半の日田地域の土器 (1/15)

く外湾するタイプのものが見られ、底部は徐々に丸底気味を呈するものが見られる時期で、タタキ調整を残すものが顕著になり始める時期でもある。

後期終末に該当する時期で、吹上遺跡では明瞭な遺構は確認できない。10次 100号溝の埋没時期や4次2ト

レンチ2号甕棺などが該当する可能性があるが判然としない。吹上遺跡における集落造営がほぼ完了した時期と考えて差支えなからう。この後期5期に該当する遺構には後迫遺跡7号土坑、31号竪穴、佐寺原遺跡3次2号竪穴(第9図)出土遺物などがあげられる。甕の口縁部は上方に立ち上がり、砲弾状に長胴化し、底部はやや突き気味の丸底化を呈するか、あるいはほぼ丸底化しているものも見られる。複合口縁部は直線的に上に延び、高環は外反する。この終末期に続く時期としては小迫辻原遺跡1期にあたる小迫辻原遺跡C区7号竪穴などがあり、弥生終末から初頭とされる時期になる。吹上遺跡ではこの時期の遺構は全くなく、小迫辻原遺跡を中心とした後迫遺跡、本村遺跡などの周辺遺跡で散見されるようになり、その役目を終えたものと理解される。

以上見てきたように、吹上遺跡の出土土器は、弥生時代全時期の遺物が確認される遺跡であることがその特徴と言える。第4節で述べるが、出現期から終末期まで集落が継続していた遺跡は数少ない。また、吹上遺跡の出土遺物も含めて日田地域の弥生土器は武末氏(武末1987)の指摘どおり、当初は北部九州以西地域の、中期後半以降は以東地域の影響を多分に受け、さらに中期から後期にかけて肥後地域の影響を直接的ではないにしろ受けていた可能性が高いことが明らかとなった。これは、日田盆地が北部九州を東西に結ぶ立地であることから、パイプ役としての地域性を如実に示している結果と言えよう。

②出土土器の特徴

吹上遺跡では、考古学研究者や地元郷土史家による頻繁な現地踏査が行われ、これまでに数えきれないほどの膨大な数の遺物が採集されている。なかでも立岩産石応丁とされるの出土量は数百点に及ぶとも伝えられ、吹上遺跡の拠点集落ぶりを印象づけてきた。しかし、これら表採遺物の所在は、現在となっては不明なものが殆どで、その内容を知りうることは出来ない。そこで、本編節では出土遺物を対象に、石器類を始めとする道具類について言及するものとする。

本遺跡で出土した石器製品類は本遺跡の調査が重要遺跡の確認調査を主体として実施しているため、遺構に所属するものが少なく、仮に出土していても時期比定が可能な遺物と共伴する事例は極端に少ない。そのため、時期毎或は遺構毎の性格を論じるのは非常に困難といえる。そこで、本小節では、吹上遺跡全体における石器類の出土状況を概観し、その特徴について触れるものとする。ただし、あくまで全体像の把握による傾向の抽出に留めるものとする。

第2表は各機種毎の数量を集計した表で、主な機種毎に区分してカウントしている。中でも磨石・叩石類、スクレイパー・石錐・2次加工剥片類は剥片石器類として便宜上纏めている。また、磨製石斧及び石応丁については、所謂今山産と言われるものとそれ以外、所謂立岩産(輝緑凝灰岩)と言われるものとそれ以外に区分して

いる。さて、石器組成を見ると時期は別として全体に石応丁及び砥石類、磨石類、石錐が全体の15%程度と非常に高い割合を示していることが分かる。特に石錐は各調査区で万遍なく出土しており、弥生時代全般を通じて利用され続けていた道具と考えられる。このうち1割程度しか磨製石錐は造られないことから、弥生時代全般を通じて主役は打製石錐であったと

第2表 出土土器組成

機種	調査回数											合計	頻度	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9A	9B	10			11
打製石斧		1	1	2							2		7	3.3%
磨製石斧							1						0	0.0%
磨製石錐	太形始片(玄武岩)	2						1	3				6	2.9%
	その他	3	2					1	2	3			11	5.3%
	柱状片刃	1	1				1		1	1			5	2.4%
石応丁													0	0.0%
石槌	輝緑凝灰岩	5	2				1			1	3	2	14	6.7%
	片岩	3								1			4	1.9%
	その他		2	1					1	3	4	1	12	5.7%
砥石	砥石	10	3	3	1				2	6	4	1	30	14.4%
	磨石	2	1	2			1		9	9	2	6	32	15.3%
	石剣	2	2								3	1	8	3.8%
	円盤	1											1	0.5%
石錐	打製石錐	11		1	2		1	4	5	4	5	3	33	15.8%
	磨製石錐			2						1	2	5	2.4%	
	剥片石器	2	1			2	1	4	6	2	8		26	12.4%
投弾								2	10			12	5.7%	
紡錘車	2									1		3	1.4%	
合計												209		

考えられる。また、石庖丁はやはり出土数も多く、全体の半分程度が立岩産と考えられる輝緑凝灰岩が占めている。数百点には全く及ばないが、筑豊方面との交流を示すものであろうか。さらに注目されるのは磨石・敲石類の多さである。吹上遺跡では貯蔵穴が多く確認されており、植物性食物の採取が多かったことを貯蔵穴と共に物語っているものと思われる。磨製石斧に関しては全体の1割程度が見られ、そのうち玄武岩製の太形蛤刃が3%程度出土している。今山産と言われるもので、立岩産とされる石庖丁と共にその交流を示すものであろうか。

さて、この出土遺物中に多いのが砥石の存在である。その所属時期と対象が何であるかが問題とはなるが、15%と高い出現率を誇っている。日田盆地では後期に入ると鉄器類が出現し、後期終末頃には定着するが、一方で道具類の鉄器化が完了するまでの間、磨製石器類も一定程度の割合で利用されていたことが指摘されている(比嘉 2010)。吹上遺跡では表採遺物も含めて鉄器の出土は副葬遺物以外には見られず、未調査地及び未完掘が多いとは言え、祇園原遺跡や後迫遺跡などの多くの鉄器が出土する遺跡に比べてやや特異な様相を示している。現時点では、調査事例が少ないため、因果関係に言及することは避けるが、日田盆地内での鉄器利用状況と異なることについては、後期代の吹上集落の意義を検討するうえで注意が必要であろう。

また、3次調査1号貯蔵穴出土の大型石剣に代表されるように、石剣の出土量は4%程度見られる。石剣が集落での祭祀行為に利用されていた証拠であろうが、石戈の出土が見られないことも注目されるものである。

2. 墳墓と副葬品の特色について

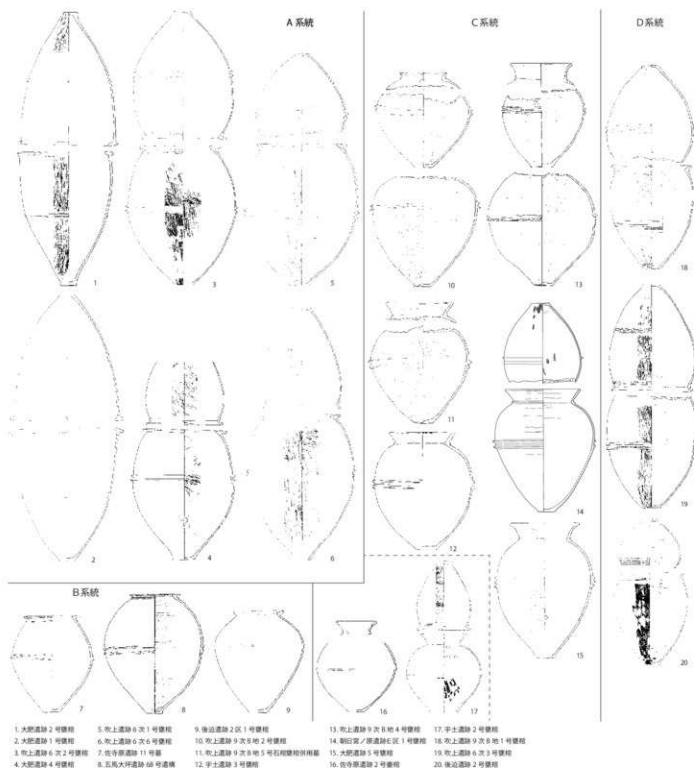
①日田地域の喪棺の変遷と吹上遺跡

日田は成人用喪棺墓の出土する筑後川流域の東隈と言われ、なかでも吹上遺跡では、昭和28年には賀川氏により成人用喪棺墓の存在などが報告(賀川 1954, 1961)されるなど、その代表的遺跡として古くから世に知られている。11次に及ぶ発掘調査では、2次調査3基、4次調査1基、6次調査6基、9次調査4基の総数14基の成人用喪棺墓が確認されており、日田盆地における成人用喪棺墓の総数34基³⁾の中の約4割を数え、中期～後期1期段階においては、23基中13基と約6割を超える際立った存在感を示している。さらに、6次調査においては、豊富な副葬品類を伴った喪棺墓群が確認され、2次調査も併せるとこの時期の副葬品を有する喪棺墓としては唯一の遺跡となっていることも注目される。

このように、吹上遺跡は日田地域の喪棺文化を語る上で外すことのできない貴重な遺跡であるが、吹上遺跡の特色を語るためには、日田地域における喪棺文化そのものを整理する必要がある。しかし、これまでの全体的な調査数の少なから整理される機会が少なく、喪棺については後期後半の高橋氏による編年(高橋 1989)がある程度である。

北部九州の喪棺墓の編年は、森氏の編年区分(森 1966)を基礎としながら諸氏⁴⁾によって整理され、なかでも橋口氏(橋口 1979 ほか)の編年は基礎的区分として今なお利用され続けている。しかし、既に前小節で論じたように、日常土器などは日田地域を挟んだ東西両地域の影響が強く、喪棺についても同様で、単純に北部九州の標準的編年に対応させるのは難しい。そこで、本小節では小地域における喪棺の変遷と特色について整理を試み、吹上遺跡については日田地域の喪棺受容に関する影響関係と墳墓群の変遷等についての基礎資料としたい。さて、これらの時期区分については、日常容器の区分と同じく中期7期、後期5期に区分し、概ね中期1～3が前半、4～5が中頃、6～7が後半から末、後期1～2が前半、3が中頃、4が後半、5が末に対応する。厳密には日常容器との並行関係が取れないものが多いが、ここでは各期に概ね並行するものと捉えておく。

日田地域において喪棺墓が出現するのは概ね中期からで、最も古い事例としては吹上遺跡6次調査7号喪棺(第11図10)がある。上半部を打ち欠く中形棺で、口縁部を欠くため詳細は不明であるが、市内には類例はなく、朝倉市大庭・久保遺跡11号喪棺上装などに類似している。概ね中期1～2式にかけてのものと思われる。この



第 10 図 日田地域の甕棺① (1/25)

中期初頭から前半の時期についての大形棺の存在は、市内では今のところ確認出来ず、小から中形棺は大肥遺跡や上野第 2 遺跡、佐寺原遺跡などで数多く確認される。今回は吹上遺跡出土甕棺の位置づけを主眼に置いたため、中期前半までの小児～中形棺については今後の課題として除外するものとする。

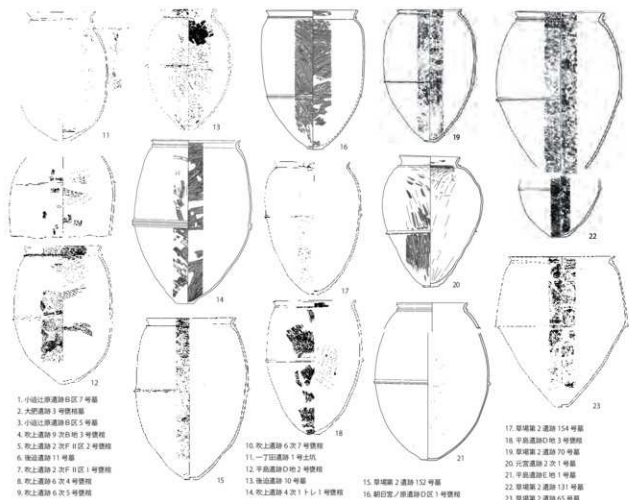
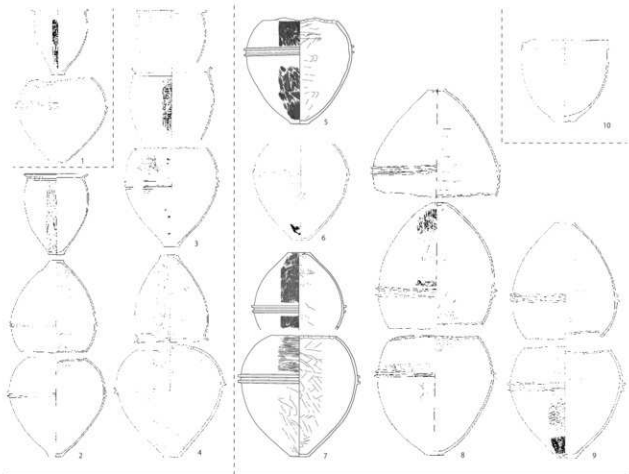
日田で出土した中期 3 期から後期 4 期以降の成人棺（大型～中形棺）約 34 基を集成整理したものが第 10・11 図である。ただし、34 基の甕棺以外に明らかに成人棺として製作されたものを土坑に廃棄したものや石棺併用墓、土器を分割して土坑墓に利用した事例など参考となる事例もここでは検討に含めている。第 10 図は口縁

部が残存し、全体像が明らかとなっている一群で、その形状から大きく4つの系統に分け、仮にそれぞれをA～Dに区分する。

A系統とする第10図1～6は、T字状口縁あるいは鋤先状口縁が形成される一群で、長胴化している1～2と丸みのある3～6に分けられる。1は口縁部が内側に発達し外側への張り出しも顕著で、やや外側に開く胴部上半とスマートな底部の作りが特徴である。既に口縁部平坦面が外傾する特徴を持つ。2は1よりも口縁部外面への張り出しが顕著なT字口縁で外傾が著しく、胴部上半の外側への開きも著しい砲弾状の器形をなしている。口縁部下に突帯が巡らないものの、口縁部の外側への張り出しと外傾化、胴部の長胴化、胴部下の三角形突帯などの特徴から、1・2がそれぞれ橋口KⅡc・Ⅲa、柳田Ⅲ-4式a・bに該当し、中期4・5期に位置づけられよう。ただし、1は口縁部の外傾化が進行している点から、或は中期5期への漸移的形態の可能性もある。この中期中頃段階の2形態については、中期6期以降の頸部の窄まる一群とは一線を画している。砲弾状のプロポジションは栗山遺跡21号裏棺上裏や権現塚北遺跡K17やK45に類似しており、甘木朝倉や南筑後地域の影響下にあるものと考えたい。3～6はA系統のなかでも頸部が窄まり、胴部が丸みを帯びて張り出す一群である。3下・4は鋤先化の進行した口縁部が平坦に外に張り出し、胴部が卵形に外に張り出す一群で、胴部中央に突帯が2条巡るが、突帯の形状が次第に台形のものが出現するようになる。3上・5・6は3下・4に比べて鋤先状口縁が内傾し、やや長胴気味となる一群である。3下・4は橋口KⅢb、柳田KⅢ5期、3上・5・6は橋口KⅢa、柳田Ⅲ6期に該当し、中期6・7期に位置づける。これら3～6の裏棺はやや丸みを帯び、3下については吹上遺跡6次調査の小結で溝口孝司氏が既に指摘しているが、道場山遺跡13号裏棺に類似し、その他の裏棺についても朝倉市栗山遺跡やうきは市鷹取五反田遺跡の裏棺墓に類似するなど、二日市・小部地狭帯から朝倉にかけての影響が伺える。A系統は筑後川中流域以西の地域の影響を受けた鋤先状口縁の土器群と考えられる。

B系統とする第10図7～9は頸部が極端に窄まり、胴部が張り出す卵形の器形の一群で、鋤先状口縁が平坦に外に張り出す7・8と口縁部が短く上方向に立ち上がる9がある。橋口氏（橋口1979、1985）によって丸みを帯びる一群として紹介されるもので、栗山遺跡30・31号裏棺などがその類例である。口縁部の変化から7→9へと変化するものと思われ、中期6・7、後期1期に対応するものと考えられるが、8は口縁部の内傾化が小さく中期6から7への漸移的な形態か。また9は肩部の張りが著しく、橋口氏のKⅢaとやや時期は異なるが、権現塚北遺跡K13号下裏などと類似することから、南筑後などの影響を受けたものであろうか。

C系統とする第10図10～15は素口縁広口壺が大型化し、器高に対して口縁部が短くなり、より直線的となる一群で、胴部は卵形のものやや長胴化して胴部化して肩部が張り出すものが見られ、胴部中位に断面台形の突帯が巡り、多条突帯のものも見られる。この小型のものが16や17で、鋤先状の口縁端部の仕上げを素口縁としたもので、頸部が短くなったもので、大型の一群の祖形となるものと思われる。このC系統は、10上・11・12の胴部中央付近が外に張り出す算盤形が丸みを帯びた器形①と10下・14・15のように胴部から肩部が張り出し長胴化した器形②の2種類に分けられる。13上については両タイプが混じったような器形を呈している。これらは宇佐市駅館川流域の遺跡で発見される墳墓に使用される土器に類似し、樋尻道遺跡12・27・53・63号墓、野口遺跡236・243墓などに大きさは小さいものの形態的な類似性が見受けられる。この豊前地域の土器では須玖式広口壺の素口縁が16・17のように長いものから短いものへと中期後半にかけて変化するようであるが、日田地域の裏棺は類は既に口縁部が短くなった形態を呈している。また、豊前地域のは胴部形態が①の器形に類似して算盤形や丸みを帯びるものが多く、②に類似する器形はあまり見られないことから、②の器形は日田地域において9のような南筑後の土器の影響を受けて成立した器形であろうか。このC系統①・②のなかで口縁部形態が短く直線的で、底部にかけてスマートに締まるもの（10上・12・14）が中期7期、11・15のように口縁端部のつまみ上げが明瞭となり、多条突帯が見られ、胴部がやや張る下膨れ気味のものを



1. 小塚比原遺跡B区7号墓
2. 大塚遺跡3号墳柩墓
3. 小塚比原遺跡B区5号墓
4. 牧上遺跡2次F区3号墳柩
5. 牧上遺跡2次F区2号墳柩
6. 俣谷遺跡11号墓
7. 牧上遺跡2次F区1号墳柩
8. 牧上遺跡6次4号墳柩
9. 牧上遺跡6次5号墳柩

10. 牧上遺跡6次7号墳柩
11. 一丁田遺跡1号土坑
12. 平高遺跡の地2号墳柩
13. 俣谷遺跡10号墓
14. 牧上遺跡4次Fレ1号墳柩
15. 草塚第2遺跡152号墓
16. 朝日堂ノ原遺跡の地1号墳柩

17. 草塚第2遺跡154号墓
18. 平高遺跡の地3号墳柩
19. 草塚第2遺跡70号墓
20. 兵宮遺跡2次1号墓
21. 平高遺跡の地1号墓
22. 草塚第2遺跡131号墓
23. 草塚第2遺跡65号墓

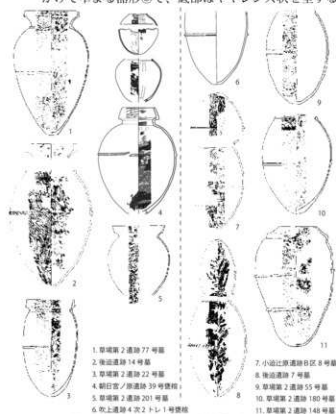
第11図 日田地域の甕棺② (1/25)

日常生活時の特徴変遷も考慮して後期1期に区分する。C系統は豊前地域の影響で成立した土器群と考えられる。

D系統とする第10図18～20は日常容器の裏を器高60～80センチほどに大型化したものである。20下は中型棺であるが、口縁部がくの字に立ち上がる跳ね上げ口縁で、胴部上半が最大径で底部にかけて窄まる器形から中期7期に該当し、口縁部がくの字になり、頸部や胴部に2～3条の多条突帯を巡らせ、胴部がやや張る下膨れ気味のもの(18下・19上)を日常生活時の変遷などを考慮して後期1期に区分した。

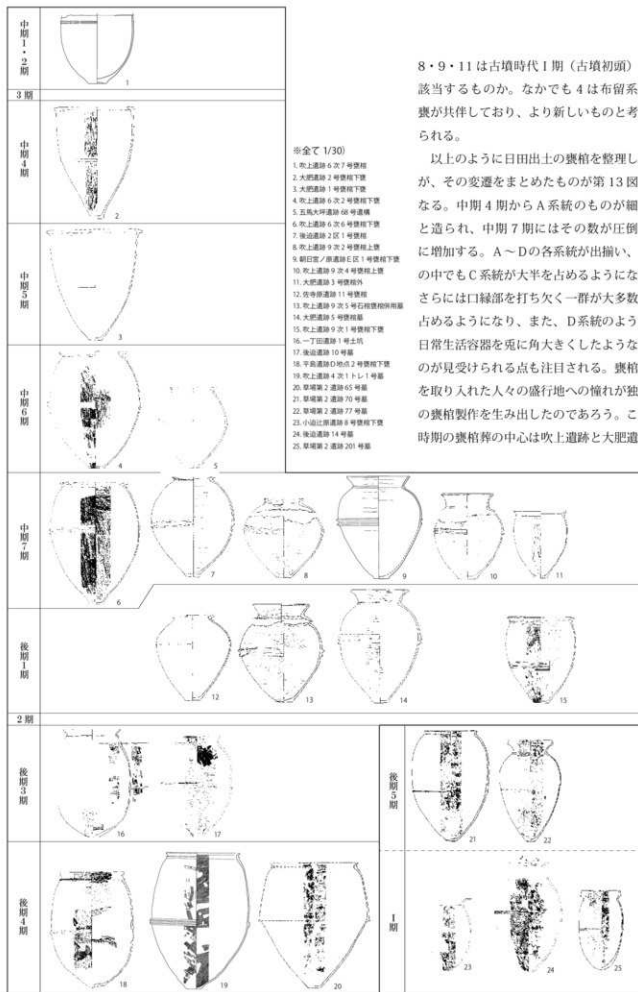
第11図1～9は口縁部を打ち欠いて墳墓に使用した一群である。日田地域の裏棺墓群の7/34点がこの種の裏棺で、口縁部を打ち欠くことで成人棺としての口径の大きさ等を調整している。胴部を張出す卵形の器形の系統と思われる、口縁部を打ち欠くものの、1下はB系統、2下、3下、4下は肩部が張出すC②系統のものと考えられ、共伴土器から中期7期に該当する。5～9に関しては明確な時期比定は困難であるが、底部のシャープな作りから、さしあたり中期7期に該当するものと考えられる。

第11図11～23は後期3期以降の裏棺である。日田地域では後期1期で一旦造営終了した裏棺墓が後期中頃に復活する。そのため、前時期からの系譜を追うのは困難で、また糸島地域を対象とした橋口のKV期以降の編年とは一線を画す器形であるが、そのプロポーションの類似などから後期3～5期に該当するものとする。11・12は胴部長胴化と下膨れの器形①を呈する。口縁部の形状などは橋口氏KIVc期の三津式などに類似するものの、胴部下半分や底部のレンズ化などの様相が異なっており、これに後出するものと考えられる。11は底部を平底状に意識し、口縁部も明瞭な作りであるため、11→12への変化方向を見てとることが出来る。13～19は長胴化した器形で頸部が較まる一群②である。13はその相形と考えられるもので、口縁部はくの字口縁をなして長く胴部には断面逆台形の突帯、底部は平底を呈している。14・15は長胴化して胴部が張り出し、口縁は短くなるもので、新しい傾向が窺える。16は頸部が広がっているが、口縁部が長く、底部も平底気味であるため、13より新しく14・15よりも古いものであろうか。17～19は砲弾状になる一群で、底部はレンズ状平底を呈するものの、尖底気味をなすもので、より新しいものであろうか。20・22・23は肩部等が張り出し底部にかけて窄まる器形③で、底部はややレンズ状を呈する一群で、口縁部がやや長めの20・22→23へと変遷を想定する。21は口縁部が短く、胴部が丸味を帯びるもの④である。この時期の裏棺については、口縁部の矮小化と底部形態のレンズから尖底への変化が指摘(高橋1989)されているが、①～④においても、くの字口縁の縮小と胴部の張り出しと底部の尖底化が見てとれ、①②の11・13(イ)→②16(ロ)→①・②・③の12・14・15・20・23(ハ)→②③の17・18・19・23(ニ)と変遷が想定でき、日常生活容器の口縁部・底部の形態変化との比較により、イ・ロが後期3期、ハが後期4期、ニが後期5期に該当する。



第12図 日田地域の裏棺③(1/25)

第12図1～11は後期5期から古墳時代の裏棺で器高が小さいものがほとんどである。1～5は壺で、6～9は裏、10・11は特殊な器形を呈する。形態変化の基準と考える底部形態は、1・6は尖底気味の小さな平底底部をなし、2は尖底、3・7・8・9・11は丸底を呈することから、1・6・10が後期5期、2・3・7・



※全て 1/30

1. 吹上遺跡 6次 7号埋葬
2. 大肥遺跡 2号埋葬下層
3. 大肥遺跡 1号埋葬下層
4. 吹上遺跡 6次 2号埋葬下層
5. 五馬大塚遺跡 66号遺構
6. 吹上遺跡 6次 4号埋葬下層
7. 海辺遺跡 2区 1号埋葬
8. 吹上遺跡 9次 2号埋葬上層
9. 朝日宮ノ原遺跡 E区 1号埋葬下層
10. 吹上遺跡 9次 4号埋葬上層
11. 大肥遺跡 3号埋葬外
12. 佐寺部遺跡 11号埋葬
13. 吹上遺跡 9次 5号石棺埋葬場所裏
14. 大肥遺跡 5号埋葬基
15. 吹上遺跡 9次 1号埋葬下層
16. 一丁田遺跡 1号土坑
17. 海辺遺跡 10号墓
18. 宇高遺跡 O地点 2号埋葬下層
19. 吹上遺跡 4次 1トレ1号墓
20. 草塚第2遺跡 65号墓
21. 草塚第2遺跡 70号墓
22. 草塚第2遺跡 77号墓
23. 小山田原遺跡 6号埋葬下層
24. 海辺遺跡 14号墓
25. 草塚第2遺跡 201号墓

8・9・11は古墳時代1期(古墳初頭)に該当するものか。なかでも4は布留系の裏が共存しており、より新しいものと考えられる。

以上のように日田出土の裏棺を整理したが、その変遷をまとめたものが第13図となる。中期4期からA系統のものが細々と造られ、中期7期にはその数が圧倒的に増加する。A～Dの各系統が出揃い、その中でもC系統が大半を占めるようになる。さらには口縁部を打ち欠く一群が大多数を占めるようになり、また、D系統のような日常生活容器を宛に角大きくしたようなものが見受けられる点も注目される。裏棺葬を取り入れた人々の盛行地への憧れが独特の裏棺製作を生み出したのであろう。この時期の裏棺葬の中心は吹上遺跡と大肥遺跡

第13図 日田地域の裏棺変遷 (1/30)

の2遺跡にほぼ限定されており、流域の拠点となる遺跡に集中する様相が見てとれるが、後期1期にはその造営が一旦終了する。この状況は福岡や筑後地域での様相とほぼ時期を同じくしている点も注目されよう。さて、このような喪棺葬は後期中頃から後半にかけて再び増加する。この時期の喪棺は後期1期までと系譜が異なっており、この時期に新たな影響下で成立したものと思われる。また、この時期の喪棺は、石棺墓や土壇墓で形成される墳墓の初現の墓として作られるものが多く、この点も二日市地狭帯周辺や筑後川中流域での動向と類似するものがある。吹上遺跡4次調査1号喪棺も、同様に後期4期になって作られる石棺墓群の初現の遺構として捉えられよう。後期4・5期の喪棺は連続的に営まれるものは少なく、市内では草場第2遺跡ぐらいのものである。福岡地域で既に衰退した喪棺墓が残る地域は限られており、糸島地域や久留米市良積遺跡などの筑後地域など喪棺文化圏の周辺地域に限られており、日田盆地も同様の変遷をたどっている。この喪棺葬は少なくとも古墳時代の前期前半時期の前後まで継続していたようである。

このように見ていくと、吹上遺跡の喪棺墓は喪棺葬の最も盛行する中期7期に副葬品をもって築造されるなど、喪棺文化の最先端であったことは明らかで、その影響関係も日常容器と同様に東西両地域の影響が強かったものと思われる。後期後半に喪棺葬が復活する時期とその終焉にあたる時期の喪棺が4次1トレ1号喪棺と4次2トレ1号喪棺で確認されており、4期から5期に墓地は終焉を迎えており、集落の動向と連動したものと考えられよう。

②墳墓の特徴

墳墓は全調査区において、成人用喪棺墓15基、木棺墓7基、石棺墓7基、喪棺石棺併用墓1基、石蓋土壇墓1基、土壇墓7基の総数38基の成人墓と小児用喪棺11基、木棺墓1基などの12基の小児墓が確認される。集落周辺でも見受けられる小児用喪棺は別として、大きく台地東端と中央南端の2箇所に分かれた墓域が確認される。

南端側は列状に指向される墓域のなかで、2次、9次調査で中期代の喪棺墓域、1次、4次調査で後期代の石棺墓域がそれぞれが集塊状をなして形成される。調査面積が限られるため全体は不明であるものの、連続した墓域を形成するのではなく、相互に独立した墓群が列状をなしているものと考えられる。特に9次調査地点では木棺墓と石棺併用墓6基程が喪棺墓とともに一定範囲に固まって作られており、特定墓域の様相をなしている。

東端側は6・7・8次調査の結果から、周辺に墓域が広がらない一片20mほどの墓域であることが予測され、溝の存在は確認されないものの、区画墓的な特定集団墓の可能性が高い。副葬品を有する1号木棺墓と2・4・5号喪棺墓が互いの位置を意識しながら墓域を形成する点などからも厚葬墓としてこの墓域が形成されていたことを物語っている。また、小児用墓は成人墓に付随するものが多いが、2・6次調査の副葬遺物を有する墳墓域では小児用墓が少なく、他の墓域と異なって成人墓を意識した特別な墓域の可能性もあることもこの点を補強するものと考えたい。

さて、墓域の変遷と構造については次節で述べることとし、ここでは墳墓それぞれの特徴についてまとめる。

喪棺墓の特徴

後期後半の1基を除く14基の中期後半から後期初頭の成人喪棺は、削平が著しく2次調査1・2号喪棺墓のように墓域規模を確認できないものもあるが、6次調査2・4・5号喪棺のように概ね墓域規模が3m前後を測るものと2m以下の規模を測るそれ以外のものに分けることができる。墓域規模の大きな喪棺からは副葬遺物が出土していることを考えると、墓域規模の相違が厚葬の差につながっていたことが予測される。また、副葬遺物が最も卓越する4号喪棺墓の3つの喪棺の器高はその他のものと変わらないが、胴部最大径などの内部空間規模が他喪棺よりも大きいことも特徴として挙げられるが、5号喪棺はやや規模が小さく、喪棺規模の大小などの内部空間だけでは区別することは難しい。

そのほか特徴的なのは『棺外施設をもつ喪棺墓』が見られることであろう。これは、6次調査4号喪棺の外喪や6号喪棺の板石による囲いなど喪棺を覆うように空間を作出する日田独自の埋葬手法で、拙稿（渡邊2007）において既に論じているところである。この副室的な空間を作り出す行為は、4号喪棺墓などのように、棺外に副葬品を納める行為と関連し、独自に発展したものと考えておきたいが、ほかに副葬遺物が出土する類例がないため断言は難しく、今後の事例の増加を待って検討を加える必要があるだろう。

また、喪棺14基中、口縁部を打ち欠くものが上下棺両方で6基、片側のみでも11基と非常に多い。埋葬の目的に沿わない大型棺でも口縁部を打ち欠くことで口径の大ききの調整を図っており、この口縁部を打ち欠く喪棺が多いことこそが、日常的に喪棺専用大型喪を製作していなかった日田盆地の特徴を示しているものと思われる、喪棺文化圏の緑辺地の様相を示している。

木棺墓の特徴

木棺墓は両小口に石を据えるタイプで6次調査1号、9次B地点20号、10次107号木棺墓などに見られ、柳田氏（柳田2003）の組合箱形Ⅱ式に該当するものか。両小口に板石を利用するものは日田地域では大肥遺跡や大肥中村遺跡などで多数確認され、筑後川中流域でもうきは市岩野遺跡、朝倉市柿原遺跡、大庭・久保遺跡などで多数見受けられ、この筑後川流域の特徴を示している。6次調査などの事例から木棺墓は中期5～6期までが主流で、その後喪棺墓へと変わるものと考えておきたい。

石棺墓と土壙墓の特徴

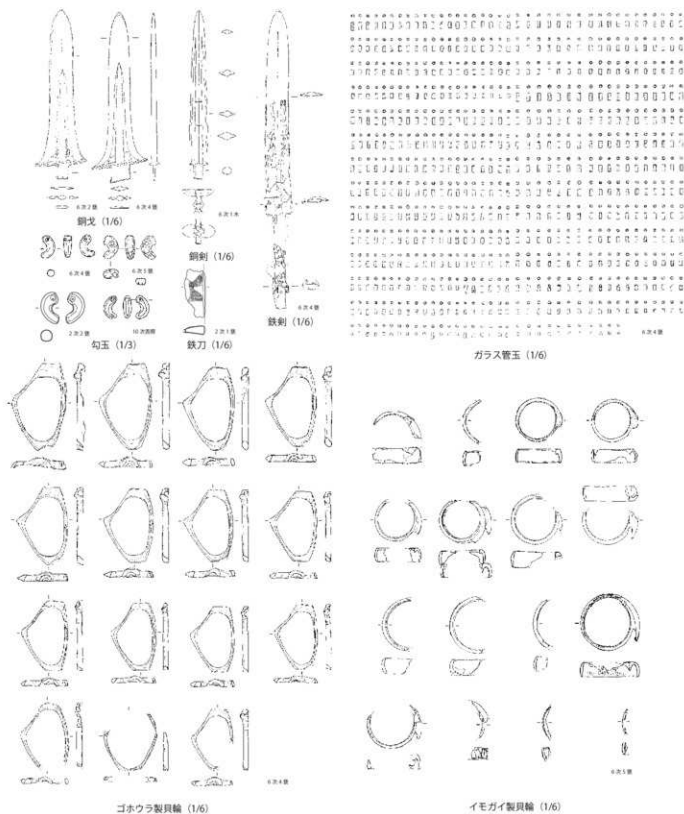
石棺墓のなかで石棺喪棺併用墓の存在は特に注目される。ほぼ同じような事例は朝倉市栗山遺跡31号墓、うきは市轟取五反田遺跡6号墓などに見られ、筑後川中流域の特徴を示すものと考えられる。この喪棺を本来の姿ではなく、土壙墓などの蓋や石棺状に仕立てる事例は市内では、小迫辻原遺跡B区5・7号墓や草場第2遺跡117号墓などに見られ、筑後地域で朝倉市栗山遺跡2号土壙墓や小郡市横隈孤塚遺跡4・7・84・86号土壙墓、豊前地域では宇佐市野口遺跡237・246・252号土壙墓など多数の事例が挙げられる。喪棺を埋葬施設の一部として利用する事例は喪棺文化圏の緑辺地の様相を示しており、日田の地域性とも言えよう。

また、この併用墓は喪棺の特徴から後期1期と考えられることから、後期初頭から前半にかけて喪棺墓の造営が一旦終了し、石棺墓ないし土壙墓へと移行したものと考えられる。後期4期に再び登場する喪棺は1基のみで、朝日宮/原遺跡D区のように、1基の喪棺の登場を契機として、石棺や土壙墓群で構成される墓域が再び形成された可能性も考えられる。とすれば、1・4次調査区の石棺墓群や9次の石蓋土壙墓などが後期4期に該当する可能性はあるものの、墓地空間の連続性は見られないため、後期後半に限定することは出来ない。よって、後期前半の墓制は石棺を中心として継続していたのか、あるいは墓域の形成が一旦終了していたかは、現時点では断定することは出来ない。

③副葬遺物の特徴

墳墓より出土した副葬遺物は2次調査1号喪棺墓より鉄刀片1点、2号喪棺墓より硬玉製勾玉1点、6次調査1号木棺墓より銅剣1点、2号喪棺墓より銅戈1点、4号喪棺墓より鉄剣1点、銅戈1点、硬玉製勾玉1点、ガラス管玉533点、ゴホウラ貝輪15点、5号喪棺墓より硬玉製勾玉1点、イモガイ貝輪17点が出土している。（第14図参照）

このうち、棺外から出土しているのは2号喪棺出土銅戈1点と4号喪棺外喪内出土の鉄剣と銅戈である。副葬遺物が棺内と棺外に分けられる点については、副葬遺物の序列と密接に絡む問題で、青銅器類の序列については武末氏（武末1990）の論などがあり、武器においては銅矛を頂点とする序列構造が指摘されている。しかし、日田における棺内外副葬の違いは、棺内において、青銅武器類などの序列に関係する遺物の出土が見られないことなどから、明確ではない。そのため、喪棺外部に空間を構築する日田地域独自の埋葬構造である『棺外施設を



第14図 出土副葬品類

もつ裏棺墓』の違いは、副葬遺物の序列による埋葬位置の選定などの意識によって成立したものと考えられるものの、ここではその可能性を指摘するに留めておく。

以下副葬遺物の特徴について述べる。

6次調査で出土した青銅武器類は、身幅や背の鐃の有無、内の大小などの特徴をもとに岩永氏の細分に従えば、

2号裏棺墓出土銅戈が中細型a類、4号裏棺墓出土銅戈は細型Ⅱ類b式に該当しよう。2号裏棺出土銅戈が佐賀県北尾遺跡や安永田遺跡、4号裏棺墓出土銅戈が須玖岡本遺跡出土事例などに類似が見られよう。同様に1号木棺墓出土の銅剣は細型Ⅱb式に該当しようか。なお、これら青銅武器類の形式分類、ひいては工人などの、引いては製作地などについての研究については枚挙にいとまがないが、筆者にはこの点を述べる力量と余裕がないため、ここでは既存の分類に沿った説明にとどめるものとする。

6次調査4号裏棺墓より出土した鉄剣は、鍛造品で茎に比較して刃部が短い。刃四双孔で固定する把の断面は豊島氏（豊島2004）の指摘する杏仁形の二枚合わせ式有稜型に該当するものか。立岩遺跡39号裏棺墓出土の鉄剣などに類似し、池淵氏（池淵2003）の短剣Ⅳ式に該当するものである。いずれにしても弥生中期代にしか認められず、特定工房で把を装着した状態で製品が流通し、極めて高い階層の人物が有する武器と評される鉄剣である。

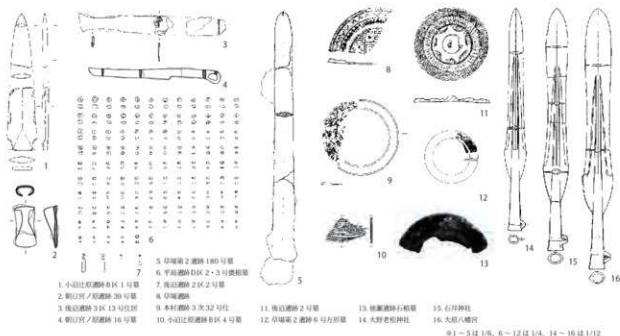
2次調査1号裏棺より出土した鉄刀は破片で、刀子や素環刀などであったものと思われるが全体像は不明である。ただし、身幅が3cmと大きめであることから、刀であろうか。砥石が伴っており、小破片といえども金属器そのものが副葬品として優位にあったものと考えられる。

貝輪については、ゴホウラ貝輪は、ゴホウラの殻から螺腹に近い部位を縦方向に切り取った腹面貝輪で、いわゆる立岩型と呼ばれるタイプである。人骨に装着された状態で出土した数少ない事例の一つで、成人男性右手の肘から手首にかけて装着されている。内孔が次第に小さくなり、側面は面取りされる丁寧な加工が見られ、明らかに連続的着装を意識したつくりで、特定の体格の人物を意識したオーダーメイド品である。イモガイ貝輪は、イモガイの上部付近を横方向に輪切りにしたいわゆるイモガイ横型貝輪で、厚さは2～3mmにほぼ固まる。4号のゴホウラほどバツキは大きくないが、連続的着装を意識したオーダーメイド品と言えよう。左手に12点、右手に5点が装着されており、右手の貝輪は左手ほど大きさがそろった状態ではないことから、左手への装着が優先されたもので、右手はその残品であろうか。これら貝輪は、風化による破損を除くと使用時の破損と思われる箇所は殆ど見られない。また、イモガイ左手首の3点が手首に押し込まれた状態であったことから、死後着装の可能性はある。貝輪が常時着装品ではない可能性が高いと指摘されている。（第14章参照）

玉類については6次調査4号裏棺墓よりガラス管玉が総数533点が出土しており、いずれも鉛ガラスで、朝鮮半島からの輸入品である可能性が高い。出土時の状況から幾つかの並びなどが見られるが、裏棺内部に水が溜まるなどしており当初の着装状況を完全に反映していない可能性も高く、また人骨の背後にも赤色顔料が付着したガラス管玉が出土している。立岩遺跡28号裏棺出土の首飾りや頭飾りではなく、胸周周辺などに管玉を縫い付けた玉衣などであったと想定される。（田中第14章）勾玉は6次調査4号裏棺墓より弥生的な硬玉製垂定型勾玉、6次調査5号裏棺墓より縄文的な緒飾形勾玉、2次調査2号裏棺墓より硬玉製垂定型勾玉⁹⁶が出土している。そのほか11次調査の表探遺物ではあるが、硬玉製垂定型勾玉が出土している。これら4点の勾玉には定形勾玉は含まれず、材質もガラスを素材としたものは見られない。また、縄文系の緒飾形勾玉が出土しており、縄文系と垂定型勾玉が混在しており、裏棺墓制周縁部地域では、木下が指摘する縄文系勾玉の概念を込みみながら、丁字頭勾玉を頂点とした体系の成立は緩やかなものだったと考えておきたい。

赤色顔料については、6次調査4号裏棺墓では棺内全体、6次調査5号裏棺墓では頭位から胸位、イモガイ貝輪周辺にかけて、6次調査1号木棺墓では頭位から胸位にかけて、2次調査1号裏棺墓でも頭位から胸位にかけて、3号裏棺墓は頭部付近から出土している。副葬品を有する墳墓に赤色顔料が使用される頻度が高く、また日田市内で出土した中期代の裏棺では大肥遺跡1・2号裏棺墓など墓域の中核となる墳墓で使用される。この時期には有力人物の埋葬行為の際、頭位や副葬品付近に赤色顔料を塗布する行為が出現したものと考えられるが、なかでも6次調査4号墓は棺内前面に塗布していることなどからも墳墓の優位性が隔絶していたことが理解できよう。

さて、以上の副葬遺物の特徴を述べてきた。副葬遺物を有する墓域は台地中央南端の2次調査裏棺墓群と6



第15図 市内出土金属器類及び副葬品

次調査墳墓群である。時期的には6次調査墳墓群が古く、そのピークを迎える中期7期頃に2次調査墳墓群が出現する。詳細は次節に述べるが、いずれにしても副葬遺物を有する特定集団墓が6次調査区以外に2次調査区域にも出現する点は注目される。両者の有する副葬遺物の質量には圧倒的な差があり、この違いは墳墓の階層差として理解しても良いものであろう。

なかでも、6次調査区の墳墓群については、特定墓域内に豊富な副葬品を有する墳墓が連続して造営される墓域であり、福岡市樋渡墳丘墓や立岩遺跡などの類例が挙げられ、その埋葬原理の類似性が窺える。また、副葬品を豊富に持つ墳墓の中でも、4号喪棺墓は金属武器類、貝輪、玉類、赤色顔料などが突出しているにも関わらず、墓地構造上での突出は見られない。溝口氏（溝口1999ほか）が「生成しつつある不安定な上位層」とし、田中氏（田中2000）が「有力クラン（氏族）内の有力層の墓」と指摘する厚葬墓の状況にあてはまる。この点は次節で触れるが、階層的に卓越した、所謂、特定主体墓が出現する前の社会段階を示しているものと考えられる。

さらに特徴的なのは豊富に出土した副葬品のなかには青銅鏡が含まれない点である。中國氏（中國1991ほか）は、弥生中期後半の副葬品配布システムにおいて、船載鏡を多量に有する須玖岡本遺跡や三雲南小路遺跡を最高ランク、船載鏡の数が劣る立岩遺跡や東小田峯遺跡を1ランク下、鏡の出土しないものの豊富な副葬品を有する墳墓をさらに1ランク下と階層化し、吹上遺跡はこのランクに位置づけている。同様に高倉氏（高倉1995）や小田氏（小田2000）の論じるような福岡・糸島平野を中心とした埋埋納や墓地の卓越性を指摘する論考でも、吹上遺跡は喪棺墓群周縁部における選択された在地エリート層の墓地であると捉えられている。この論に従えば、船載鏡を含めた青銅製品の出土が殆ど見られない筑後川上流域及び豊後地域においては、鏡の出土は見られずとも、相当に卓越した所謂王墓級の墳墓と捉えておくべきであろう。

日田地域では墳墓に副葬される遺物の出土事例（第15図参照）は殆どなく、前期後半から中期初頭頃には小迫辻原遺跡B区1号墓で石剣、後期後半から古墳時代前半には平島遺跡2・3号喪棺墓のガラス小玉、後迫遺跡1次2号石棺墓出土の小型仿製鏡、後迫遺跡2次2区3号石棺墓出土の碧玉管玉、草場第2遺跡180号喪棺墓出土の鉄剣、弥生終末から古墳前期前半には平島遺跡E地点や朝日宮ノ原遺跡や草場第2遺跡などで石蓋土坑墓などから素環刀子や鉄斧などが出土し、草場第2遺跡6号方形墓から仿製鏡、徳瀬遺跡石棺墓からは船載鏡などの出土が知られるのみである。また、日田地域での中期から後期代の祭器の出土事例は殆どなく、本村遺跡3次32号住居の小型仿製鏡片や小迫辻原遺跡B区4号住居の船載鏡片が知られるのみで、鏡では採集資料で草

場遺跡出土の船載鏡片が知られ、いずれも後期後半から古墳時代前期前半にかけての事例である。中期から後期前半にかけては、後迫遺跡2次3区13号住居出土の鉄刀(刀子か)がその可能性があるが、部分的な調査であるため、時期は判然としなない。そのほか、伝世資料として市内の神社に伝わる銅矛が3点あり、大野老松神社例は中細形銅矛、石井神社銅矛、大原八幡宮銅矛は中広形銅矛である。『百練抄』には「嘉録元年(1225)5月に津江山の住人が金銅矛2枚を振り出して大宰府安楽寺に言上した」と記され、大野老松神社例と石井神社例はこのうちの一枚であるとの伝承が伝えられる。ただし、大野老松神社例では箱書に筑後地方からの奉納とも記されており、詳細は不明である。また大原八幡宮例は日田市上手町夕田村(現市内夕田)付近からの出土と江戸期の日田郷土史『豊西記』に記載されている。これらは埋納銅矛の出土例を示す事例と考えられ、市内で中期末から後期前半代の埋納銅矛が出土していたものと考えられよう。

さて、以上見てきたように、日田地域では類例は少ないながらも銅矛及び鏡片などの祭器が後期以降集落内の祭りに使用され、埋納ないし集落内で遺棄されていたと考えられる。このように、北部九州の各地での状況と序列(武末1990)に合致する行為が日田地域でも細々と行われていたものと考えられるが、墳墓への威信財の副葬事例は非常に少ない。中期代ではほぼ吹上遺跡に集中し、その量も突出するが、後期代に継続する墳墓の出現は見られず、この内容も極端に減少している。その極端な状況は、①後期に入ると在地エリート層が北部九州内ネットワークが途絶えて威信財の獲得が不可能となったのか、②単に後期代の厚葬墳墓群が発見されていないのどちらかと考えられるが、前述の祭器や墓制の状況は北部九州の動向と合致することを考えると、②と考えるべき。ただ、いずれにしても吹上遺跡6次調査出土例の卓越性は北部九州の狭棺墓文化圏において、所謂クニに相当するような単位が日田地域に中期後半には成立していたことを物語っており、その単位は後期から古墳時代に至るまで継続していたのであろう。

3. 古代末の遺構と遺物

古代の遺物は吹上遺跡6次1号経塚出土遺物がある。詳細な検討は吹上IV小結(渡邊2006)において既に述べており、ここでは特徴をまとめることにする。経塚は小塚を持ち、礫石を不整形に配した小石室内に直接埋納し、間に炭を充填する構造である。村木氏(村木1998)の直納・有室式に該当するもので概ね12世紀第2四半期に取まるものであろう。共存する壺型合子が山本氏(山本1988)のXⅡ期に該当することから考えても、年代は12世紀前半代の中でもやや新しい時期と考えて差し支えない。経筒は筒身に突帯や錐留などが見られないシンプルな形状で、蓋に至っては疑似口縁を棒状突起で作出するというかなり特殊な構造である。これは、四天王寺型や植上式、九州東部の求菩提型などといった九州型経筒とは異なっており、類例が見られない。経筒は勸進僧の動向と密接に関係する(栗田1998)ことから考えると、北部九州の各盛産地とは異なった勸進僧とその鑄物師などが日田地域に入っていた可能性を考慮する必要がある。

吹上遺跡では崖面に平安時代中期の作とされる木造観音坐像が安置される吹上神社があり、この神社が山岳信仰の社寺として経塚と関連していた可能性は非常に高い。また、6次調査区周辺では、経塚に使われたと思われる円礫が散乱する箇所などが見られ、6次調査1号狭棺墓は掘乱坑内部に周辺で邪魔になった多数の円礫が捨てられている。このことは、6次調査地周辺一帯に経塚が多数造営されていた可能性が高く、吹上神社一帯を中心として経塚造営行為が行われていたものと推察される。

日田地域ではこのほか、実物の所在は不明であるが、『太宰管内志』に日田市小野の戸山神社より康治(1142～43)年号の彫られた経筒が出土したとの記述(伊東1841)が知られている。このようなことから、平安時代末期の末法思想と絡む古代経塚造営行為が、吹上遺跡単発のものではなく、市域の山岳寺院と絡みながら広がっていたものと考えておきたい。

第3節 吹上遺跡の出土遺構の変遷について

1. 吹上遺跡の遺構変遷について（第16・17図）

吹上遺跡の過去11次に及ぶ発掘調査範囲は、遺跡全体面積の数%に過ぎないものの、台地全面に及んでいることもあって、大まかにではあるが遺構の変遷を確認することが可能となっている。この小節では、吹上遺跡の遺構変遷について纏める。

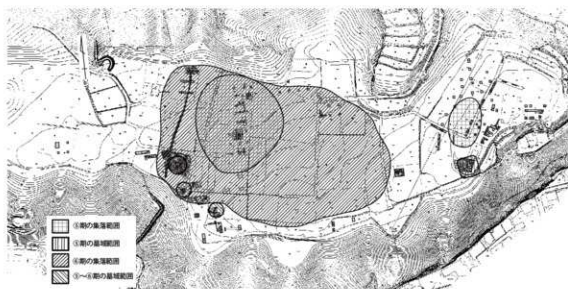
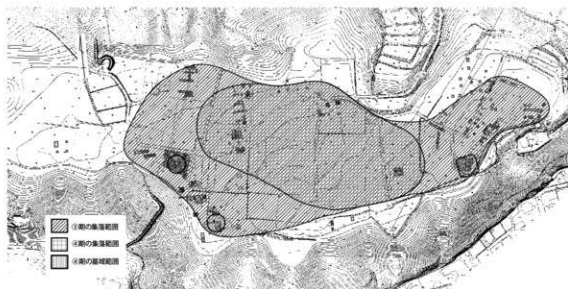
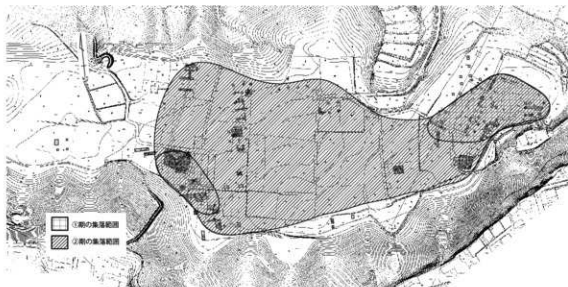
但し、遺構変遷については、完全掘削していない遺構が多く、時期同定が困難な遺構も多々見られる。時期比定には前章で論じた弥生時代時期区分を用いるが、出土遺物によって存続期間を考慮する必要がある場合が多いため、弥生時代①期（前期後半）；前期後半3期～5期、②期（中期初頭）；中期1・2期、③期（中期前半から中頃）；中期3～5期、④期（中期後半）；中期6～7期、⑤期（後期前半）；後期1～2期、⑥期（後期中頃から後半）；後期3～5期、⑦期（古代末）；12世紀前半と大まかに時期を分けて説明するものとする。それぞれの遺構の時期については、基本的に各報告書での時期比定と出土土器の特徴にしたがって整理することから、一つ一つの遺構について細かく触れず、図上で表現することに留める。なお、紙面の都合上、高縮尺率で作図するため、詳細は第1節ないし各報告書を参照頂きたい。

①期は吹上遺跡の利用開始時期で前期後半3期に貯蔵穴の出現が見られ、9次調査区A・B地点など台地東西両側に偏って出現したものと考えられる。その後②期にかけて徐々に台地中央部でも貯蔵穴が見られるようになり、次第に集落域が広がって行ったことを示している。この貯蔵穴の③期迄の総数は47基にも及び、実際にはこの数十倍以上所在した可能性が高い。市内ではこの時期の遺構の大半が貯蔵穴であり、北部九州の弥生遺跡と同様に、穀類を含めた食料貯蔵が本格化したことを物語っている。但し、①～②期の竪穴建物^{※7}は少なく、僅かに9次調査区B地点・10次調査区に確認される程度で、墳墓も6次調査区で小児用喪棺が1基見られるくらいと、集落としてはそれ程大きなものではなかったと思われる。本来、貯蔵穴を管理していた集落が未調査地に広がっていたのか、或いは貯蔵穴専用の区域だったのかは、今回の調査結果からは断定することは出来なかった。

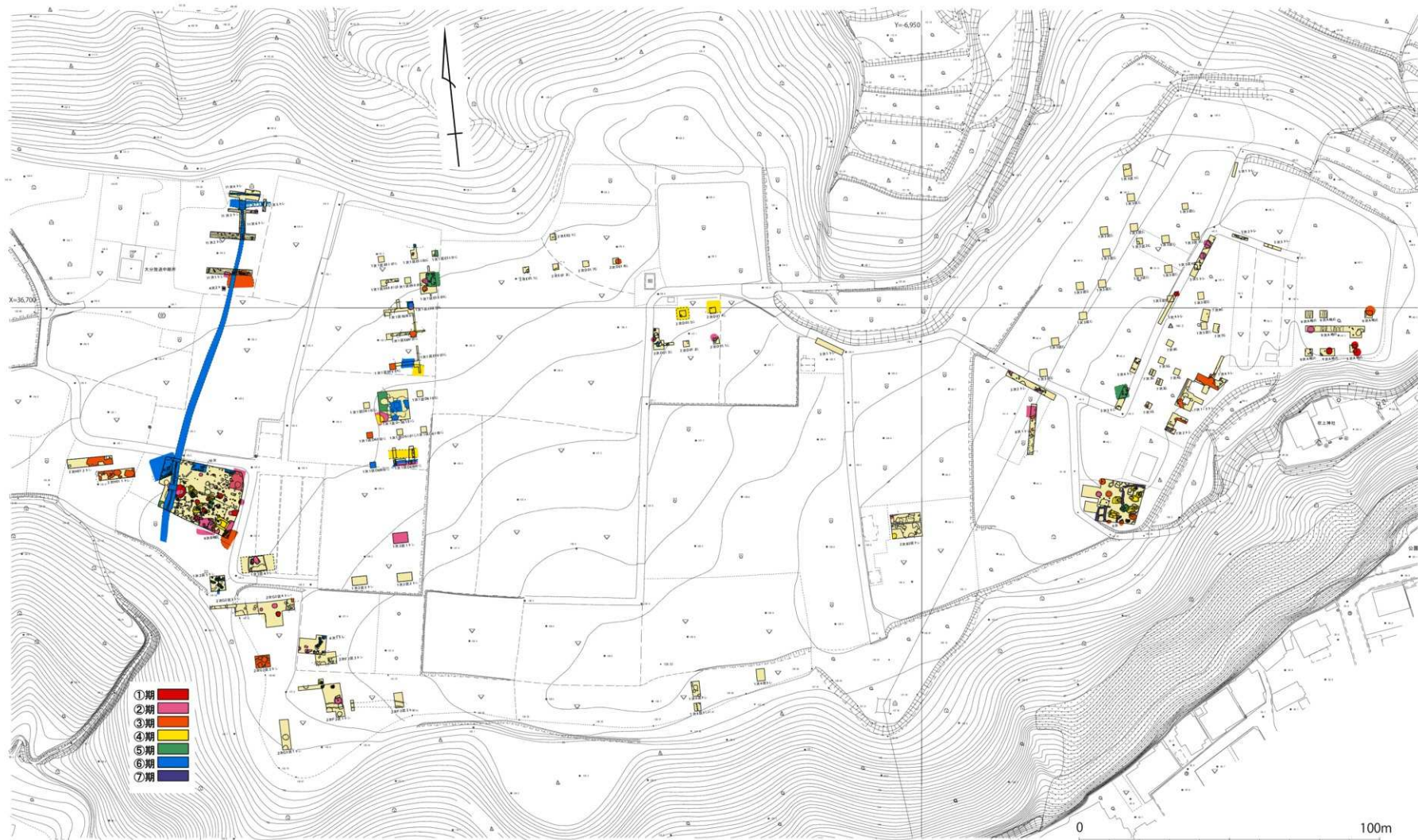
③期には、貯蔵穴は既に廃棄土坑となっていたものと考えられ、ほぼ①②期と同一箇所に遺物の出土がみられる。この時期は遺構の数が若干減少する可能性が高いが、竪穴建物に関しては、2次H区、7・10・11次といった前時代に見られなかった範囲に広がり、本格的に台地全体に集落域が広がったことを物語っている。さて、この頃には2次2区5トレンチ周辺で小児用喪棺墓が見られ、6次・9次B区周辺に本格的な墓域が作られるようになったものと考えられる。なお、木棺墓の所属時期は判然としませんが、切り合いや位置関係などから喪棺以前の成人墓と判断している。このように集落域が広がり複数墓域を有するようになるなど、吹上遺跡は続く④期にかけて最盛期を迎えるものと考えられる。なお、墓域の変遷については次小節で詳細に触れる。

④期の集落域は、台地中央部付近の8次調査区から西側に多く見られ、台地中央部付近が中心となったものと予測される。6次調査区にはこの時期に最盛期を迎える特定集団墓があり、この周辺に遺構が見られなくなることから、特別な領域として認識されていたものと理解されよう。また、2次・9次調査区を中心とした墳墓群も継続して営まれるため、これら墳墓を意識して台地中央部及び北側が集落域となり、吹上遺跡の台地の空間構成が明瞭に区分されていたと考えられる。なお、この時期には貯蔵穴群がなくなるが、10次調査区などに掘立柱建物が複数見られ、各調査区でも柱穴の可能性のあるビットが多数見受けられることから、集落に沿って掘立柱建物群が所在したものと考えておきたい。

⑤期になると、6次調査区一帯の特定集団墓の造営が終了し、それまで見られなかった墳墓の近隣（やや離れた）箇所に竪穴建物^{※7}が作られる。このことは、④期までに形成された明確な空間配置が緩んで行ったものと考えられるが、依然として集落の中心は台地中央部北側一帯となる。この時期の墓域は1・4・9次調査区を中心と



第 16 図 時期別領域変遷図 (1/4000)



した南端一帯に集塊状態に作られ、見た目列状墓を形成している。副葬遺物などの構成からみて、より上位の階層と判断される特定集団墓の造営が終了し、より下位の階層を中心とした墓域が継続されるものと考えられよう。このことは、吹上遺跡の集落の構造のみならず、日田地域の弥生集落の構成を考える上でも重要である。

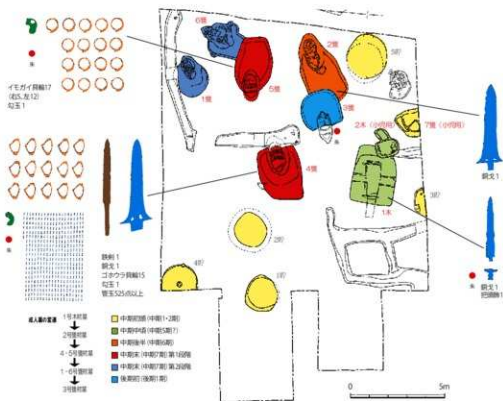
⑥期になると、集落は⑤期と同様に台地中央部北側を中心とした一帯に継続されるが、なかでも注目されるのが、台地中央部を南北に分断すると予測される条溝の出現である。断面V字状を呈し、深さが1.5m前後と予測されるこの溝は後期4期の竪穴建物を切り込むことから、後期4～5期にかけて掘削されたものと考えられ、埋没時期は出土遺物の構成から、終末期の後期5期と考えておきたい。さらに、この溝以外にも1次調査1区において、溝状の遺構の掘り込み（溝かどうかは断定できない）などが見られ、台地内部を分割する行為がこの時期に開始された可能性が高い。条溝はさらに、台地北端においては、台地際に沿って巡る2条の溝とT字状に接合することが確認されており、台地を巡る環濠の存在も想定される。これまで、吹上遺跡の所在する吹上台地はその標高差が50m弱あり、自然要害としての機能が想定されるため、環濠の存在は考慮されてこなかった。しかし、台地南側の比高差に比べて、北側は谷に向かって緩やかな斜面を形成しているため、地形に応じて環濠などを巡らしていた可能性が考えられる。さらに、続く古墳時代初頭においては、張り出しを持つ小型円形環濠から方形環濠へと変遷し、条溝で空間分節した台地に、特別な施設と考えられる方形環濠を有する建物を築造する小迫辻原遺跡が、北側の谷を挟んだ台地上に所在しており、時間的な関連性を想起させるには充分であろう。後期後半の⑥期には、古墳時代の小迫辻原遺跡と同様の機能を有する特別な集落が、既に吹上遺跡に所在していた可能性が考えられるが、未調査部分が多く詳細は今後の調査の進展に期待したい。また、この時期には有力な副葬遺物を伴う墳墓も確認されず、集落に付随する特定集団墓が確認されない点も注目される。単に未発見なのか或いは日田盆地における中心的機能は他遺跡に移っていたのか、今後の興味は尽きないところである。

その後、古墳期には6世紀後半を中心とした横穴墓域が台地南側の崖面に造営されることになるが、台地上に集落はほとんど見られない。次に台地上に人々の痕跡が見られるのは古代末12世紀前半の経塚の造営に限られる。この経塚造営は吹上観音を中心とした聖域としての整備であったものと考えられ、近世に至るまでの開台地上が利用された痕跡はなく、この一帯を聖域とする意識が長い間伝承されていたものと思われる。

2. 墓地の変遷について

吹上遺跡には二つの墓域があり、吹上遺跡の価値づけを考える上で、特に重要と考えられることから、中期後半以降の墓地変遷を中心とした特徴について説明する。なお、喪棺墓の変遷については、第2節で論じた喪棺の変遷での形態的特徴を基に時期比定を行う。ただし、口縁部を欠く喪棺も多く、胴部から底部にかけてのプローションなどの型式学的特徴だけでなく、切り合い関係などの二次的な要素も加味して大凡の位置づけを行う。

吹上遺跡出土成人用喪棺墓の時期は、中期6期が6次調査2号喪棺墓、中期7期には2次調査1・2号、6次調査1・4・5・6号、9次B地点2・4号喪棺墓、後期1期には6次3号、9次1・3号喪棺墓、後期4期に4次1号喪棺墓が該当する。これら喪棺墓はプローションの類似度や近接埋葬の状況などから、時期は大きく隔てないものと考えられる。なお、2次3号喪棺墓については喪棺が未掘であるため、隣接する1・2号喪棺墓と同時期の中期7期から後期1期と捉えておきたい。小児用喪棺墓は10次144号、9次B地点12号喪棺墓が中期6期、9次B地点14・24・41号、10次116号喪棺墓が中期7期に該当する。木棺墓については、時期を比定できる遺物の出土は見られないが、6次調査1号木棺墓の裏込土器の検討や、副葬銅剣の特徴、墓制が木棺から喪棺へと変化すると考えると、中期5～6期に該当するものと捉えたい。石棺墓については、9次B地点5号喪棺石棺併用墓が後期1期と考えられることから、石棺墓への移行は後期1期以降と考えられる。そ



第18図 6次調査区遺構変遷図(1/200)



第19図 南西端墳墓群変遷図(1/500)

ここで、石棺墓の時期を次期の後期2期から、喪棺墓が再び墓制に採用される後期4期以降と考えておきたい。

まずは6次調査区について説明するが、既に調査報告書で時期変遷等の詳細は述べられていることから、改めて整理するものとする。中期中頃～後半の5～6期頃に墓地造営は開始され、中期初頭から前半の遺構の見られない空白地を選定したように、7基の成人墓（うち3号木棺墓については全容が不明なため除外する。）のうち、細型銅剣1点を右手の位置に副葬する1号木棺墓が作られる。この木棺墓の時期については、出土遺物などの状況から中期5～6期にかけてと想定され、この木棺墓築造より大きく時期を隔てない中期後半の6期には、1号木棺墓と軸をややズラすものの、頭位方向を揃えて一定の距離をとった場所に2号喪棺墓が作られる。この喪棺墓には棺外に中細型銅剣1点が副葬され、棺上部には標石が設置される。その後、中期末の7期の古い段階で1号木棺墓・2号喪棺墓と一定の距離を保ち、軸を揃えて相互に頭位を向かい合わせた4・5号喪棺墓が作られる。この2者は性別も男女に分かれ、墓域の構成を意識するように作られており、副葬遺物も4号が鉄剣1点、細型銅剣1点、ゴホウラ貝輪15点、ガラス管玉533点、硬玉勾玉1点と5号がイモガイ貝輪17点、硬玉勾玉1点といった、この墓域中層も優れた遺物の出土が見られることも注目される。これら4基の成人墓は一定の距離間という明らかに相互に意識した位置関係を保っていることから、墳墓上部の上腕頭の存在を想起させるとともに、これら4基の埋葬墓域が計画的に築造されていた可能性を示唆している。喪棺墓の堀方規模などが他墳墓と異なることや副葬遺物がこの4基に集中していることもこの可能性を高めている。しかも殆ど小児棺などが付随しないこともこの墓域の特殊性を物語る。例えば、市内の大肥中村遺跡、五馬大坪遺跡などの木棺墓を主体とする列状の墳墓群には小児用喪棺墓などが付随しており、木棺墓や喪棺墓を主体とする大肥遺跡などでも多くの小児用喪棺墓が付随している。

このことから、6次調査区の墓域は、これら4基の墳墓の築造を目的とする埋葬原理で形成されたと想定され、この意味から特定集団墓と位置付けられる。続いて、喪棺の型式学的には区分が難しいものの、前述の埋葬原理を維持せずに築造されることから中期末の7期の新しい段階に位置付けられる1・6号喪棺墓が5号喪棺墓に近接して作られる。それまでの墓地造営の規制が大幅に壊れ、さらに5号の上腕頭を意識したような位置関係を保つこれらの墳墓は5号喪棺の系列埋葬であろうか。いずれにしても、4・5号喪棺墓の造営をもってこの特定集団墓域の形成が完了したことを物語る。墓域の造営は相当に計画的に行われ、そのことを示すように後期1期には、改葬墓の3号喪棺墓が2号喪棺墓を切って作られ、墓域の築造が完了し、その後周辺には後期以降の遺構は全く見られなくなる。

このような6次調査区の墓域は北部九州の墳墓群のうち三雲南小路遺跡や須玖岡本遺跡のように所謂王墓との評価が与えられる中心的埋葬に欠くものの、多数の豪華な副葬遺物を有する墳墓群が一定の区画内で相互に距離を保って埋葬される立岩遺跡などに非常に類似した様相を呈しており、溝口氏（溝口1999ほか）が区画墓Ⅱと評価する墳墓に該当するものと考えて相違ないだろう。

このような6次調査区周辺の墓地造営に対して、1・2・4・9・10次調査区周辺の台地南端の墓域は様相が異なっている。この一帯は中期6期以降墓域として造営されるようになるものの、墓域が連続するのではなく、時期毎に複数箇所に分かれる特徴を持っている。以下、時期毎に変遷を説明する。木棺墓が6次調査区の事例から中期5～6期に該当するものと想定すると、9次B区20・44号、10次調査区107・108・110号木棺墓が一定程度主軸を揃えて築造される。周囲には小児用喪棺墓が配置され、相互に一定の距離を保ち10m範囲内に分散して営まれる。列状墓として造営される市内大肥中村遺跡や五馬大坪遺跡などの同時期の墳墓とは明らかに異なった様相を示している。続いて中期7期には空白地を埋めるように9次B区2・4号喪棺墓が営まれるが、この時期にはさらに、南西に65m程離れた箇所に2次調査区F2区1～3号墓が営まれ、2箇所に分かれて墓域が営まれることになる。後期1期には、9次B地点1・3号喪棺墓、5号喪棺石棺併用墓、15号石蓋土

墳墓が営まれ、一旦墓地造営は終了する。この墳墓域のうち、2次1・2号喪棺墓からは鉄刀・硬玉勾玉といった副葬遺物が出土しており、2次F2区1号喪棺墓、9次B地点2・3号喪棺墓には赤色顔料が塗布されていたことなどからも、その特殊性は高い。しかも北部九州で一般的な集塊状の列状墓ではないことなどから、それぞれの墳墓が一般成員の墳墓とは考え難く、墓域も一定範囲に固まることから、区画墓の要素があったものと考えられる。このことから、台地東端にある6次調査区のような特定集団墓とは別の階層の異なる特定集団墓と捉えておきたい。したがって、大きく2つ、南端墓域を2つに分けるならば、3つの墓域が同時併存していたことになり、これは複数墓域が付随する吹上集落の特殊性を高めている。区画墓は地域の拠点集落に付随している場合が多く、複数の埋葬系列が付随するとの指摘（溝口2008）などから、複数埋葬系列の存在は吹上遺跡が日田盆地内における拠点集落であることを物語り、氏の指摘に従うならば、墓を構成する成員は地域集団を構成する複数の集団から選択された人物たちと考えられ、複数墓域の構成主体の階層差が反映されていたのではなかろうか。筆者にはこの階層差と集団の関係をモデル化する力量と余力もないため、細かに論じることは差し控えるが、田中氏が、6次調査区4・5号喪棺墓のように男女差し向かいの埋葬ペアの存在を、夫婦ではなく血縁関係を重視した「キョウダイの原理」に基づく人々と捉え、首長制社会の萌芽と指摘（田中2000）するように、6次調査区墳墓群が司祭的権威を有して日田盆地の弥生社会を牽引する在地スーパーエリート層、それ以外の墳墓については複数集団内の選択されたエリート層の墓で、そのエリート層集団内部でさらに分節が行われていたものと考えておきたい。吹上遺跡の中期6期から後期1期の墳墓群は複雑に階層分化していく弥生社会の発展状況を反映していると考えられよう。

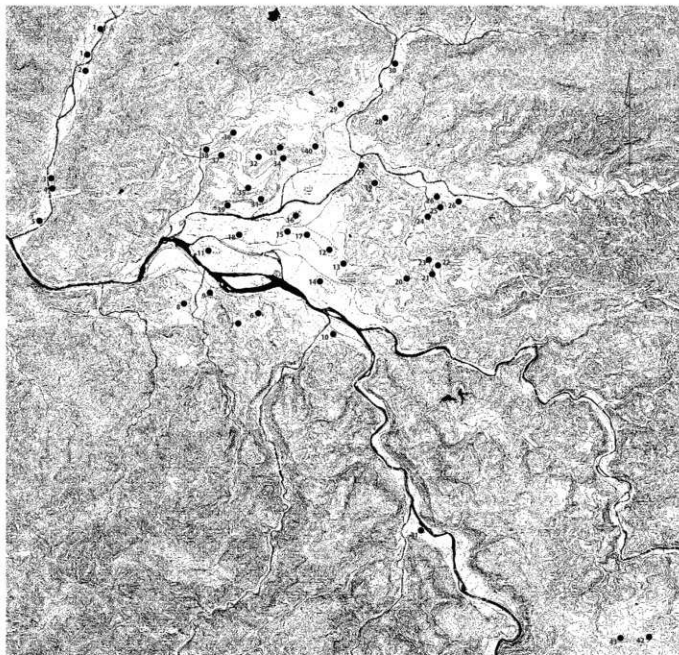
さて、南端の墳墓群は後期2～4期以降には位置をずらし、1次調査区5トレンチ、4次調査区と2箇所に石棺墓7基、喪棺墓1基が集中して営まれ、前時期同様な埋葬原理が継続していた可能性がある。しかし、この時期には東端の特定集団墓の埋葬は終了しており、副葬品でも卓越する墳墓は見られないなど、前時期の埋葬構造は維持できておらず、吹上遺跡の拠点集落としての機能が終焉していた可能性が考えられる。この時期には市内各所で規模の大きな集落が見られ、吹上遺跡以外の集落に在地エリート層の墳墓は付随していた可能性も考えられるが、この時期に副葬遺物の卓越する墳墓は殆ど見られないことから、状況は判然としない。いずれにしても吹上遺跡の役割が変質していたものと捉えておきたいが、その役割は後期4期の条溝や環壕の出現など一定期間において再び回復した可能性が考えられる。

第4節 北部九州の弥生遺跡における吹上遺跡の位置づけ

1. 日田地域の弥生集落の変遷について

日田地域においては、弥生時代後期末から古墳時代前半にかけての環濠集落や条溝によって区画され、政治的・祭祀的領域と想定される方形環溝居館などが連続的に変遷する小迫辻原遺跡、後期前半から後半の環濠集落とされる三和教田遺跡や長者原遺跡、喪柏墓の存在が古くから知られる朝日宮ノ原遺跡や後迫遺跡などの遺跡が吹上遺跡と共に古くから著名で、これら大規模な遺跡を中心にその紹介（土居 1999 ほか、小田 1960）がなされるものの、それら弥生集落の動態が詳しく語られることはなかった。しかし、近年の発掘調査によって、大小様々な規模の遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことにより、その様相が徐々に明らかになりつつある。そこで、本節では吹上遺跡が筑後川上流域の弥生社会においてどのように位置付けられるかを理解するため、日田盆地周辺域における弥生遺跡の変遷について整理することにする。

日田は、筑後川の浸食作用によって阿蘇起因の溶岩地形が削られることで、周囲に台地を擁する盆地地形が形



第20図 日田地域弥生遺跡分布図 (1/300,000)

成されており、中心部の沖積地と複雑に入り組んだ幾つかの支流によって形成される矮小な谷部が広がっている。それら台地や沖積地を中心に日田地域の至るところに弥生遺跡は分布している。第20図は遺跡の分布を示しており、番号は第3表に対応している。ただし、近年の圃場整備など開発が行われた箇所を中心に遺跡分布密度が濃くなっており、今後、未調査地で遺跡が発見される可能性は十分にある。

さて、これら遺跡の消長を示したのが第3表である。主に盆地周辺域及び大肥川流域、大山川から五馬台地周辺を7地区に区分けて表示し、時間軸の設定に関しては前述の第2章の時期区分を使用している。これらに使用している遺跡は、報告書が既に刊行されているもの或は年報等で報告がなされているものを採用しており、基本的な時期区分は報告の年代に従うが、一部土器型式に従って修正を図った。

第3表から、日田地域で弥生時代の遺跡の出現する時期は、前期後半3期の板付Ⅱb式以降に限定されており、板付Ⅰ式から板付Ⅱa式期の遺跡は確認されていない。そのため、この時期に突如弥生集落が出現したかのような印象が持たれるが、市内東部の大波羅遺跡などでは、突発文期の土器片が自然流路などから発見されており、未調査の沖積地などに夜白期から板付Ⅱa期にかけての遺跡などが広がっていた可能性も考えられる。ただし、いずれにしてもその範囲は狭く、市内の弥生遺跡が本格的に規模を広げるのは前期後半からである。

集落の大まかな動向としては、主に前期末から中期前半、中期後半から後期前半、後期中葉以降の3時期程で集落の増減が見られ、それぞれの地域での様相が異なる。そのため以下に、地域毎に遺跡の特徴をまとめ、総括するものとする。

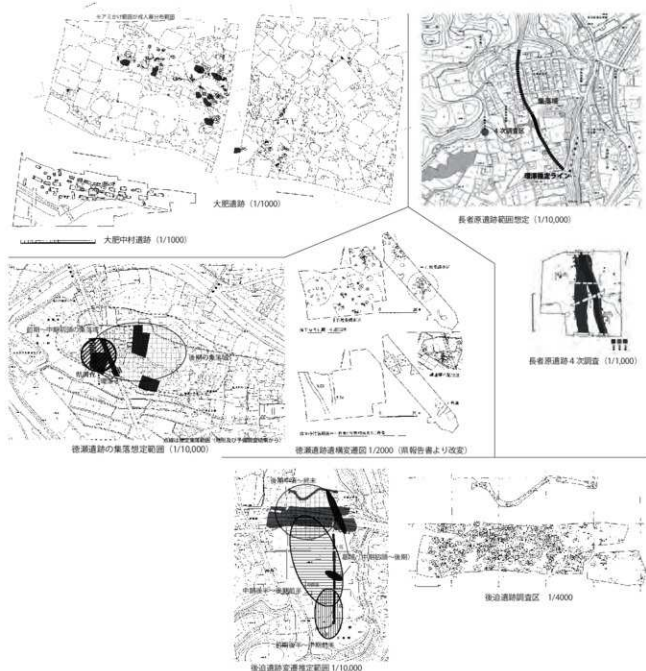
【大肥川流域】 日田盆地とは完全に独立した矮小な谷平野を形成し、筑後と日田を結ぶ中継地となる重要な地域である。中世に至るまでの遺跡が谷内部に確認される地域で、古墳期の横穴墓は数多くみられるが、古墳は今のところ確認されていない。弥生遺跡は5つ程が確認されるが、なかでも大肥遺跡が最も規模が大きく拠点集落と考えられる。大肥遺跡は中期1期前後の中期初頭頃^{※8}に出現し、古墳時代まで継続する総数100軒以上の規模の大きな集落で、周囲を河川流路で囲まれた環濠集落である。この流路は中期初頭頃から堰や貯水施設、水さし施設などを備えた人工的溝として利用されており、周辺の水田等へ水を供給する井路として利用されたものと考えられる。集落内には中期中頃から後期初頭頃の成人用喪棺墓、木棺墓を中心とした墳墓が一定範囲に纏まって営まれており、拠点集落に付随する特定集団墓であったものと考えられている。この大肥遺跡の対岸には木棺墓を中心とした中期初頭から後期代の列状墓の大肥中村遺跡があり、周辺弥生集落の一般構成員墓と考えられ、大肥遺跡や大肥中村遺跡を中心とした一帯が地域の拠点集落として弥生時代全般にわたり占有されてきたものと考えられる。この地域ではそのほか、中期末(7期)頃に祝原遺跡や後期前半(2期)に上村遺跡などの存続期間が短い遺跡が営まれる以外に、下流域拠点集落と考えられる高野遺跡が中期末から後期後半(中期7期～後期4期)に出現するなど、後期前後に集落の分散化が進むものと思われる。

【盆地南部】 三隈川(筑後川)の南岸の段丘地帯であるこの一帯では、存続期間の長い遺跡の所在は確認できず、上野遺跡などのように、集落と墳墓が対となって形成される中期初頭(1・2期)の遺跡と長者原遺跡のように後期前半(2期)以降に出現する遺跡のように、2つの時期に固まって集落が出現する。なかでも、長者原遺跡では集落を分断するように後期前半の環濠が確認されている点は注目される。

【盆地中央】 日田盆地中央部の沖積地内には、三隈川とその支流の河川が複数所在しており、複雑な地形を呈している。それらの河川に挟まれた沖積微高地周辺に遺跡の所在が確認される。日田地域では古い前期後半3期から徳瀬遺跡で見られるが、なかでも徳瀬遺跡では後期後半には環濠集落が出現するとされ、小地域の拠点集落の様相を呈している。そのほかの集落は基本的に存続期間が短く、中期初頭から中頃にかけて日田系里飛矢地区や会所宮遺跡、中期後半から後期前半にかけて入籠遺跡や瀧ヶ本遺跡、後期中頃から古墳時代初頭にかけて一丁田遺跡や日田系里千駄地区、郷四郎遺跡といった比較的小規模な遺跡が2～3期程度の短い存続期間で入れ替

わってゆく。これらの遺跡の地山や埋没土は河川氾濫の影響を受けた痕跡が認められ、自然災害の影響などにより長期間の存続が図れなかった可能性が考えられる。

【盆地東部】 日田盆地東部に広がる台地と狭小な谷部に広がる沖積地が入り組むこの一帯では、中期初頭頃に出現し古墳時代初頭頃まで継続する存続期間が長い佐寺原遺跡以外では、中期後半に多くの遺跡が出現する。谷奥部の求来里川流域では金田遺跡、尾漕遺跡、祇園原遺跡、小西遺跡、町ノ坪遺跡といった順番で、この流域の拠点集落が短い存続期間で出現しており、集落が順次移動していくものと考えられる。後期後半には平島遺跡で環濠集落が出現し、それに付随する墓域ではガラス小玉などを副葬する甕棺墓地が営まれる。谷奥部では元宮遺跡でも後期後半代の甕棺墓を有する墓域が営まれ、周辺に同時期の集落の存在が予測される。存続期間の長い拠点集落を中心としながら、中期後半代に盆地東部の谷奥部に弥生集落の進出が図られ、後期後半にはさらに小地域の拠点となるような集落が作られる傾向が見て取れ、沖積地の開発などが進行し、集落の分散と集約が図



第 21 図 日田盆地の主要弥生遺跡

られていく様相を示している。

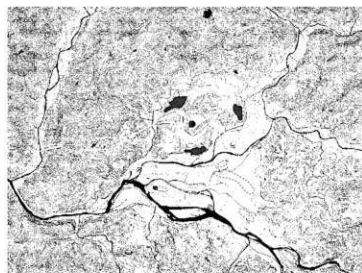
【盆地北東部】三隈川の支流の花月川の浸食作用によって細長く豊前方面へと抜ける谷部を形成している。小規模な葛原遺跡や三和教田遺跡などが短期間営まれるが、主に中期後半頃以降、沖積微高地や低段丘上に遺跡の進出が確認される。なかでも三和教田遺跡は後期後半の環濠集落で、この地域の拠点集落であったものと考えられる。

【盆地北部】山田原台地や宮ノ原台地、吹上原台地、小迫原台地といった大小様々な台地が複雑に入り組み、小さな谷部を形成している地形で、弥生遺跡が密集する一帯である。吹上遺跡や小迫辻原遺跡といった出現期の弥生遺跡が多数確認される地域でもある。規模の大きな遺跡として吹上遺跡があり、出現以降弥生時代末まで継続し、喪棺墓を含む墓域も伴い、さらに後期には環濠や条溝が出現するなど、この地域のみならず日田盆地内での中心的集落であろうと想定される。そのほか、長期間継続する集落としては後迫遺跡があり、吹上遺跡同様に集落に墓域が付随しているが、環濠や隔絶した墳墓が存在しないなど、吹上遺跡とはその内容が異なっており、小地域の拠点集落と考えられる。内容が判然としませんが、同様な構成の朝日宮ノ原遺跡も同じ評価が与えられるかもしれない。ただし、これらの遺跡には遺構の密集時期に濃淡があり、小迫辻原遺跡のように、集落に墳墓が付随するものの、前期後半から中期初頭、中期後半から後期初頭、古墳前期と継続時期が限定される遺跡の事例から、それぞれの遺跡間を拠点集落が移動していた可能性を想定しておきたい。これら断絶期間を有する遺跡同様に、台地裾部の沖積地や緩斜面には今泉遺跡や鍛冶屋廻り遺跡などの短期継続の小規模な遺跡が点在していたものと考えられる。この台地裾部の利用は後期後半に本格化しており、小迫辻原遺跡や吹上遺跡、朝日宮ノ原遺跡といった大きな遺跡のある台地裾部に本村、鍛冶屋、尾部田、花ノ木遺跡といった遺跡が兜挟しと出現する。このころ草場第2遺跡では、喪棺墓を中心とし、その周囲に系列状の土壌墓群が形成されており、これらの集落の墓域と考えられている。

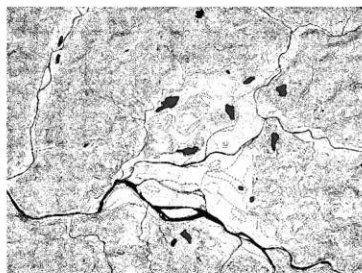
このように、弥生集落の密集するこの一帯では大小規模の遺跡が断絶期間を有していることから、移動を繰り返していた可能性があり、後期後半には集落域が本格的に拡大するものと考えられる。このような特徴の集落動態のなかでも、集落の濃淡が少なく、長期に亘って墳墓も営まれる吹上遺跡は、この地域の拠点あるいはシンボリックな集落であった可能性が考えられる。こうした吹上遺跡も弥生時代には終焉を迎え、その機能は環濠集落と方形環溝建物に変遷する小迫辻原遺跡へと移ることになるものと考えられる。

【大山・五馬地区】日田盆地に流れ込む大山川と玖珠川（筑後川）に挟まれた入り組んだ台地とその流域の沖積地一帯である。この地域での発掘調査事例は数少なく、その詳細は不明な点が多いが、中期後半以降集落が出現するようで、日田盆地から次第に開発の手が伸びたものと考えられる。五馬地区では、中期中頃から後半をピークとして後期まで継続する宇土遺跡で集落が営まれるが、小さな谷を挟んだ西側の台地上には、ほぼ同時期の木棺墓を主体とした列状墓域が形成される大坪遺跡が所在する。さらに宇土遺跡には特定範囲に固まる木棺墓を中心とした墳墓群が付随しており、このような状況は大肥川流域での大肥遺跡と大肥中村遺跡との関係に類似し、宇土遺跡は地域の拠点集落で、特定集団墓が付随し、離れた位置に列状墓の一般構成員墓の大坪遺跡が所在していたものと考えられよう。この五馬地区では古墳時代には場所を変えて大規模な集落が営まれ、墳墓群も多数形成されることから遺跡のような拠点集落が古墳期にはさらに発展していくものと考えておきたい。

大山川流域では、中川原遺跡において中期後半から古墳時代まで継続する規模の大きな集落が営まれ、集落の側を巡る大溝は環濠の可能性も想定される。集落の主要な時代は後期末から古墳時代前期までであるが、中期後半の遺物が大量に出土する箇所も周辺にはあり、広範囲に集落が広がっていたものと考えられる。また、大山を含む津江一帯では1225年に記された『百練抄』によれば、津江山の住人が金銅銚2枚を掘り出し大宰府安楽寺に言上したと記されており、地元にはその銅矛と伝えられる品が残されている。この一帯に中期末の集落と銅



前期後半から末



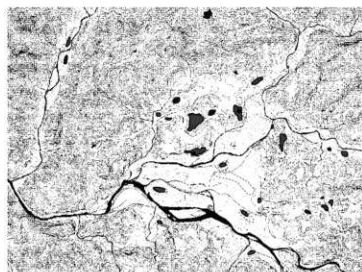
前期初頭から中頃



中期後半から末



後期初頭から前半



後期中頃から末



第 22 図 弥生集落変遷図 (1/400,000)

矛を用いた祭祀行為が必要な小地域の集落群が所在したことを物語っているであろう。

さて、このような各地域の集落変遷（第22図）と特徴について述べた。これらをまとめると全体的な傾向として以下のようにまとめられる。

- ①初現期から形成される遺跡は弥生時代全般を通じて継続するものが多い。
- ②前期末から中期初頭頃には集落が断絶する遺跡がある一方で、新たに継続期間の短い集落と長期に継続する集落の2種類の遺跡が出現する。
- ③中期後半には新たな集落が出現あるいは再継続するようになるが、継続期間は後期前半までと短い。
- ④中期後半には盆地東部や大山・五馬地区など新たな箇所に集落が進出し、その後場所を変えながら後期代まで継続的に営まれる。盆地内部の沖積地などに集落の進出が見られるが、河川氾濫の痕跡が多く、続く後期中頃まで沖積地の形成は不安定であったものと想定される。
- ⑤後期中頃前後から台地上や沖積地などのあらゆる箇所に集落が出現し、小地域単位のなかでも規模の大きな集落には環濠（単に集落を区画する溝にすぎない可能性が高い）が付随するものが見られるようになる。
- ⑥中期後半から後期前半の墓域は集落に付随するものが多く、列埋葬墓域と一定範囲墓域の2種類がある。拠点的な集落（大肥遺跡・宇土遺跡）には列埋葬墓（大肥中村遺跡・大坪遺跡）がやや離れて営まれるが、集落内には一定範囲に固まる墓域が付随する。一定範囲に固まる墓域には日田地域では数が少ない成人用甕棺墓が採用されることが多いことなどから、それぞれは一般成員墓と特定集団墓のような関係であったと想定される。
- ⑦盆地北部などで特徴的であったように、時期毎に集落が小地域内で移動を繰り返していた可能性が高いのに対し、吹上遺跡は長期間営まれる拠点集落である。また集落には一定範囲に固まる墓域が複数付随しており、副葬遺物の内容なども他墳墓などには見られない隔絶したものである。日田地域を代表する拠点集落でそこに特定集団墓が複数付随していたものと考えられる。

以上のような特徴から、3つの画期が考えられる。

1. 前期後半から台地上に集落が展開し始めるが、中期初頭前後に比較的短期の集落が衛生的に作られるとともに、長期間継続する集落などが出現し、集落の増加という画期が見られる。
2. 中期後半には盆地北部や大山・五馬地区など小単位の河川流域や矮小な谷部に大小様々な規模の集落が出現するようになり、開発の手はこの地域にまで及ぶようになったと考えられるが、地域の中心的集落はそのまま継続し、新規集落が短期的に新たな場所に進出を繰り返していくものと考えられる。
3. 後期中頃以降には集落数は更に増加し、盆地内の各地域の主要集落には環濠が付随するようになるなど、盆地及びその周辺の流域開発が拡大していく状況と、それに伴う小地域単位での中心的集落の固定化がより鮮明となっていく過程が見て取れる。

これらの大まかな動向は北部九州の集落動態と同様であると考えられるが、博多湾岸などを中心とした動向（橋口1987、小澤2000ほか）で論じられるような1）中期初頭前後の集落断絶と新規進出 2）中期末前後の小集落の断絶と特定集落への集住と捉えられるような増減は認められない。日田地域でも類似した時期に画期が認められるが、集落それぞれは完全な断絶ではなく、小地域に中心的集落がそれぞれ残り続け、その中心的集落を中心としながら小地域に再進出或いは移動を繰り返していたものと考えて起きたい。この違いについて述べるだけの力量を筆者は有しないが、北部九州の各地域でそれぞれ異なる条件に応じて集落の発展が図られたものと捉えておきたい。

そして、吹上遺跡はこれら弥生集落のなかでも特に隔絶した集落と墳墓であり、出土する墳墓とその副葬品がそのことを物語っている。なかでも一般成員墓は殆ど見られず、特定集団墓を複数有する状況はかなり特異で、

溝口孝司(溝口 2008)が指摘するような拠点集落内部には複数の墓域が付随することが多いといった様相とも合致する。さらに氏の指摘に従うならば、これらの複数墓域は地域(日田盆地)内の複数リネージ(分節集団)から選択された人物たちの墓で構成されたと考えられよう。そして複数所在する墓域は、豪華な副葬遺物を有する墳墓群、より少ない副葬遺物を有する墳墓群、副葬遺物を有さない墓域といった具合に墓域の構成がランク分けされていた可能性があり、それぞれの構成員の所属する集団か或いは当人の社会的立場に併せて所属する墓域が決定されていたものと考えておきたい。このように考えると、吹上遺跡が日田地域内における中心的集落であることは、集落動態や墳墓構造などの面からも明らかで、地域におけるシンボリックな遺跡であったものと考えられる。吹上遺跡の墳墓が台地南端側や南東側に形成されることは、日田盆地内部を良く望む(よく見える)という市内でも最良位置関係を成す象徴的意味合いが強かったものと思われる。

2. 北部九州の弥生遺跡における吹上遺跡の位置づけ

吹上遺跡の特徴を顕著に現している中期後半から後期初頭の豪華な副葬遺物を有する墳墓群は、平成7年の発見当時から日田盆地のオウ墓として大きく騒がれ、連日新聞紙上を賑わす貴重な発見となった。考古学界では、喪棺墓制の最東端にあたる豊後西部において、北部九州的な喪棺墓制と青銅器や鉄器の武器類や貝輪やガラス管玉といった豪華な副葬品類を有する墳墓群が発見されたことは大きな驚きと興味をもって報じられ、この遺跡が注目を集めることとなった。今回、これまでの吹上遺跡の調査報告を総括し、その特徴をまとめるにあたって、北部九州のなかでの吹上遺跡の位置づけについて、先学諸氏の研究を基にして、改めて整理しておきたい。

中国の歴史書である『漢書』地理志や『後漢書』後伝、『魏志』倭人伝などの記載からは、紀元1世紀頃には日本国内には漢王朝に朝貢する百余りの国々が存在し、紀元後1-2世紀には北部九州に奴国や伊都国(か)が後漢王朝に朝貢し、それぞれ王として承認され、2世紀末の倭国大乱によって女王卑弥呼を代表とする約30国からなる邪馬台国連合国が誕生するといった動向が知られる。こうした中国側の文献を中心とした研究を基に、副葬品がある墓が数多く発見される北部九州を中心として、平等で等質的な社会から経済的に有力な個人や集団が出現し富や権力の格差が拡大するという社会の階層分化に関する研究が数多く行われてきた。主なものでも高倉洋彰(高倉 1995)や小田富士雄(小田 2000)、柳田康雄、下條信行(下條 1991)などの研究が知られるが、こうした研究では、青銅器を中心とした墓の副葬遺物の質や量の差異や墳墓の構造といった各要素が時間の経過や地理区分などによってどのような変化するのかといった観点から纏められている。これら諸氏の研究を要約すると、以下にまとめられよう。

前期末から中期前半にかけて朝鮮青銅器の伝来品を中心として副葬される墳墓が一定の区画内に分散する吉武高木遺跡などのような墓地が平野単位で次第に形成される。中期中頃から末にかけて中国前漢時代の銅鏡を中心としたガラス製壺や鉄製武器類などの伝来品や国産青銅器類などを中心とした副葬遺物の構成となる。こうした副葬遺物を持つ墳墓が一定区画内の墳丘墓などに複数埋葬される吉武樋渡墳丘墓、立岩遺跡といった墳墓が各地に形成されるなかで、鏡の大量保有や特定個人の占有墓といった特徴を有する須玖岡本遺跡や三雲遺跡のような隔絶した墳墓が出現する。こうした副葬遺物と墳墓の変遷から、地形上まとまりのある単位を一つの領域として「国」と呼ばれる政治的単位が成立する。それぞれに青銅器を中心とした副葬遺物を持つ首長がおり、墓の規模や副葬物の種類や量などの格差などから首長間には序列があることから、中期後半には伊都国と奴国には「王」が出現し、その周辺国には副葬品の量が劣る首長がいたとされ、北部九州の政治的連合のなかに組み込まれていたと考えられている。

簡便な要約ではあろうが、概ね諸氏の見解とも一致するところであろう。なお、こうした中期後半の墳墓の構成は後期初頭から前半には中国鏡が後漢鏡となりながらも継続するが、後期中頃から終末では平原遺跡を除いて

集中的に副葬遺物を有する墳墓が殆ど姿を消してゆく。

さて、このような北部九州の厚葬墓の一群との比較を行うと、吹上遺跡の副葬遺物は前漢遺を有さないものの、4号喪棺墓に副葬された祭器や玉類などのセットは量的にも質的にも卓越し、隈・西小田23号喪棺墓などが類似している(表4)。墳墓の計画的な空間構成の在り方も区画墓の可能性が指摘でき、副葬遺物を有する複数墳墓で形成される点などは、極端墳丘墓などのような特定集団墓であったと位置付けることが出来よう。中國聡(中國1991)による副葬品質量や喪棺墓の構造などの組み合わせの検討では、漢王朝の世界観などを取り入れて北部九州中核と周辺地域の系列化が図られ、その政治的イデオロギーに基づく階層関係を再生産するシステムとして概ね5つのランクに分けられる副葬品システムが中期後半に確立したとされる。この検討に基づけば、吹上遺跡は奴・伊都といった最高ランクの中心地域から3ランク程格落ちした在地エリートとして、このシステムのなかに組み込まれていたことになる。こうした副葬遺物の構成の考え方も基づくならば、吹上遺跡は北部九州の地域圏を結ぶネットワークのなかに組み込まれており、その所在する日田盆地は、単位の名称は別として、一つの領域となっていたものと評価される。なお、こうした弥生中期後半以降の地域単位の分布図については、高倉洋彰(高倉1995)の図が良く知られるが、この領域設定のなかには、第23図に示すように筑後川上流域にあたる日田盆地も含まれると考えると差し支えないであろう。

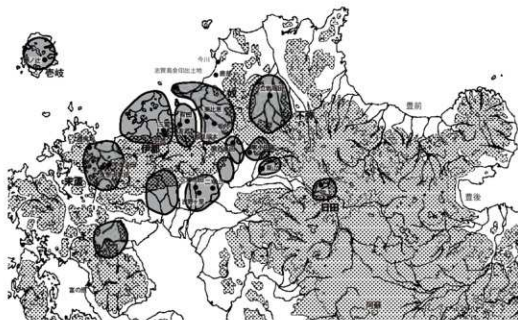
こうした北部九州の政治連合体や副葬品システムの詳細について、ここで論じるだけの力量と余裕が筆者にはないが、少なくとも

第4表 北部九州主要厚葬墓一覧

地域	遺跡	墳墓	数	武器・武具(鉄器)	玉類・その他
伊都	雲南小橋	1号墳	前漢鏡35	有柄副剣1・副矛1	金銀器内装束金具8・ガラス製玉3・ガラス製玉100以上
	雲南小橋	2号墳	前漢鏡22以上		ガラス製片ペンダント1・硬玉製玉1・ガラス製玉12
筑前	築田河本	上墓	前漢鏡30	多岐式副剣1・額甲副矛5	ガラス製片2・ガラス製玉1・ガラス製玉12
	門田山田	24号墳	中平鏡2	額甲・副支1	
高橋	古宮瀬田	10号墳	前漢鏡6	副矛1・額甲	鉄器1
	渡瀬	栗小田1号	10号墳	前漢鏡2	鉄器1・鉄支1
筑前野	隈・西小田	23号墳	前漢鏡1	額甲・鉄支1	ゴホウラ製印輪41
佐賀	二輪山	15号墳	前漢鏡1		
佐賀	六の塚	29号墳	前漢鏡1		
筑前	吹上	4号墳		鉄剣1・副支1	ゴホウラ製印輪15・ガラス製玉500・硬玉製玉1

©柳田2000に加筆修正

隔絶した副葬遺物群を有する北部九州中核部の地域と非常に類似した副葬遺物が出土することから、埋葬に関する情報や交易ルートを確認しうる能力が吹上集落の埋葬者にはあり、



©高倉1995(北部九州の国の推定地)を基に加筆修正

第23図 北部九州地域圏推定図

地域を代表する墳墓や集落構造などから、日田地域社会の紐帯を高める役割を担っていた可能性が高いと言える。また、須玖岡本遺跡や三雲遺跡などに代表される「奴国」や「伊都国」といった中枢の国々の「王」とされる人々と比較した場合、吹上の副葬品を有する人物達の墓なかでも質量が卓越する4号喪棺墓に埋葬された人物の立場については、特定の集団を一定範囲内に埋葬した墓群のなかで、卓越した副葬遺物を有する墳墓が見られる立岩堀田遺跡10号墓などとほぼ同様な立場とであったものと理解されよう。

地域を代表し、北部九州地域圏の中枢部との交易などを主導する在地エリート層的な立場と理解されることから、各地の代表的存在と同様な立場が吹上遺跡の墳墓群であったと考えておきたい。北部九州弥生社会が地域単位を統合する広範囲のまとまりを呈し、これら地域単位を統合する範囲に応じてその代表する人物層が、複雑に階層化していたという先学諸氏の論拠について異論はない。しかし、この地域的まとまりや単位が社会発展段階を端的に示す「国」や「王」といったものと単純に對比できるかどうかについては、片岡宏治（片岡1999）の指摘のように議論の余地がある。中期後半にピークに達する青銅祭器や舶来利器を副葬した厚葬墓群などの代表的墓群が、後期前半にはほぼ姿を消しており、古墳時代へとつながる後期の社会階層の変化は現時点では明確に説明がなされにくい。日田地域においても例外ではなく、後期中頃から後半代に再び出現する喪棺墓群の様相は吹上遺跡のそれとは異なった状況を示しており、中期後半に生成された社会が後期以降のように続いていくのか別のアプローチが必要になる。

そこで、こうした副葬品システムや中国史書の記述などを背景に社会階層分化の構造を指摘する研究とは別の、人類学的社会構造の視点から、墳墓の位置づけを論じた溝口氏（溝口1991ほか）や田中氏（田中2000）の研究アプローチについて触れておきたい。溝口孝司は墓域の類型化を行い、中期前半には列墓（例：永岡遺跡）といった一般墓地類型に対して、集団内部を構成するクラン（氏族集団と表現すべきか）から分節したサブクランないしリネージ（出自集団と表現すべきか）の内の能力などに応じて選別された代表的人物たちが、集団統合の象徴としての中心的被葬者を囲うように区画墓Ⅰ（例：吉野ヶ里遺跡）に埋葬され、中期後半には系列墓（例：井上北内原遺跡）などの一般墓に対して、集団の上位層の人物達が系譜的連続をもって埋葬される共同墓地として区画墓Ⅱ（例：立岩堀田など）があり、さらにそのなかから選別された人物が、外部世界からの移入シンボルや高度な技術による生産物と共に埋葬される厚葬墓（例：三雲遺跡）が出現するというモデルを提示する。そしてこれら選別された上位層の人物たちは不安定な存在であり、厚葬墓の被葬者も未だ血縁と協同原理を基盤とする親族システムの範疇にあり、首長が萌芽しつつあるような社会を整理する。そして、後期代には一旦断絶する墳墓群のなかで、成人墓とともに乳幼児が十分な間隔をとって規則的に配置される区画墓Ⅲ（例：三雲遺跡寺口地区）のような埋葬が見られることから、比較的安定したりネージ分節もしくは拡大家族（このなかから政治的首長を生み出しうる単位）が分出したとし、協同・平等原理から自立した拡大家族の出現こそが、親族システムと政治システムの実質的分化、すなわち階層関係が安定的に構築されたと論じている。これは、吹上遺跡の墳墓とその被葬者層を検討する上では有効なモデルを提示しており、単純な王ないし有力者一族などといった集団イメージを提示するよりも理解しやすく、まさしく氏の区画墓Ⅱにあたる墳墓こそが6次調査の集団墓となろう。

田中良之は親族構造の視点から、弥生時代の生産力の増大を背景に、より具体的に階層分化の進展を説明する。中期前半には区画墓が族長やリーダーなどの職能に応じて選択された人物たちの墓であるとする部族的秩序を保ち、中期後半には有力クラン内の有力層の墓として区画墓や厚葬墓が出現し、これら中心主体の被葬者はもはや部族の族長の域から首長に転化しつつある本格的長制社会への移行期で、あくまで部族的結合は残ると捉える。そして、後期に至り部族社会の秩序は変質しクラン間の階層的序列と同族化が進行し、一つのクランで地域集団が代表される所謂首長制社会へと移行したものと捉え、こうした地域政治集団と化したクランの代表者として墓に葬られるのは男女のペアを含むキョウダイの原理に基づく人々であったと考えている。また、その意味で吹上遺

跡6次調査4・5号墓から出土した男女の埋葬ペアについては、首長制社会へと移行する萌芽を示す注目事例として紹介している。まさに吹上遺跡6次調査の位置づけを端的に示した論となっている。

先学の議論との対比に終始する議論となってしまったが、いずれにしても吹上遺跡は北部九州の地域圏を結ぶネットワークのなかに組み込まれており、一つの領域として日田地域があったと考えられよう。このようなネットワークを維持するため、有力クラン内の部族的族長から脱皮しつつあるような代表的人物層が出現していたことを示すのが、吹上遺跡墳墓の被葬者であり、そのような有力層の集落こそが吹上遺跡集落であったものと考えられるのではなからうか。そして、後期後半の条溝の出現は、こうした有力者層を区画する小迫辻原遺跡の首長の社会の前身と捉えられるのではないだろうか。こうした意味で、吹上遺跡は北部九州社会の階層化や地域間ネットワークの形成など、弥生社会の研究を進める上で様々な情報を提供する重要な遺跡であると位置づけられよう。

- 註1 参照とした土器編年は、隣接する福岡・筑後地域、東部九州を対象とした編年として、前期では片岡 1984、山崎・井上 2004、中期では武末 1987、吉田 1991、田崎 1985、平 2004、後期では柳田 1986・1991、富松 1992、平尾 2001、全般的名义として武末 2003、富松 2002、東九州や琉球などを対象としたものとして宮内 2003、坂本 1999 などがある。
- 註2 各時期編年区分は、現時点で日田市内では前期後半からしか弥生遺跡が確認出来ないため、後半からの区分としている。前期後半は山崎・井上 (2004) にほぼ対応する。中期の1・2期は片岡 (1984) のI a・bに対応し、3～7期は田崎 (1985) の須玖I中～須玖I新、古に対応する。後期は柳田 (1992) の1～5期に対応するものとし、後期5期が弥生終末とするが、小迫辻原遺跡1期に該当する西新町式や柳田 (1992) のI式期は弥生終末～古墳として今回は取り扱わないものとする。なお、あくまで既述の編年と機械的に対応させたもので、時期区分そのものに有義の意味はない。
- 註3 後期5期以降の壘積は壘積などの首飾りが絞まった器形が多く、器高も80 cm以下のものが多いため、今回は後期4期までの壘積をカウントした。
- 註4 福岡地域における編年は折尾 1971、橋口 1979、富松 1998、柳田 2003b などがあり、各地の編年では小都市域で連水 1985、飯塚市域で高島 1977、佐賀県では山田 1979、甘木朝倉で橋口 1982、南筑後は橋口 1985 などがある。今回の検討ではこれらの編年体系も参照しつつ整理する。
- 註5 壘積の大きさの区分は、渡邊 (2006) に従い、器高さ70 cm前後で大形棺と中形棺を区分する。再検討の余地もあるが、ここではその値をそのまま利用する。
- 註6 2次調査2号壘積墓出土勾玉は概要報告時には子丁頭勾玉とされているが、所在不明のため確認できないため、ここでは定型勾玉とする。これら野藏穴の多くは、埋没後にゴミ穴などとして再利用されることが多いため、完照していない場合や良好な一括遺物が見られない場合、存続時期を比定するのは困難な作業である。そこで、ある程度の時期幅で時期比定している。
- 註8 大塚中戸遺跡の周囲では、石積墓が工事中に発見されたことと連絡が壊されたこととが現されており、その近隣には墳丘状の高まりも見られるなど、元来古墳が存在していた可能性が高く、現状では未発見に過ぎないと考えている。

【参考文献】

- 池邊俊一 2003 『刀剣・鉾・戈・ヤリ・素戔嗚刀』『考古資料大観』第7巻 小学館
- 岩永省三 1980 『弥生時代青銅器型式分類編年再考』九州考古学 55 九州考古学会
- 1994 『日本列島青銅器出現の考古学的意義』『古文化談叢』第33集
- 2003 『武器形青銅器の型式学』考古資料大観 6巻 小学館
- 小田富士雄 1960 『古代の日田 - 日田盆地の考古学 -』『九州文化誌研究紀要』15
- 1977 『4. 鉄器』『立岩遺跡』河出書房新社
- 1991 『弥生文化の系譜』『弥生文化』平凡社
- 2000 『弥生時代北部九州の首長墓とクニゴエ』『奴国王の出現と北部九州のクニゴエ』春日奴国の歴史資料館
- 小澤佳恵 2000 『弥生集落の動態と二期 - 福岡県春日丘陵を対象として -』『古文化談叢』44
- 2000 『集落動態からみた弥生時代前期半の社会 - 玄界塚沿岸地域を対象として -』『古文化談叢』45
- 2002 『弥生時代における地域集団の形成』『究証』II
- 2006 『北部九州の高地性集落 - 集落動態からの検討 -』『古代文化』第58巻2号
- 2009 『北部九州の弥生時代集落と社会』『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 2005 『V まとめ 玄界塚遺跡出土の須玖I式土器群について』『玄界塚遺跡III 下巻』浮城バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 福岡県教育委員会
- 折尾学 1971 『IV 金銀遺跡弥生式壘積の編年』『金銀遺跡 第2次調査概報』福岡県教育委員会
- 賀川光夫 1954 『簡式棺を外部施設とする壘積 - 大分県 (豊後国) 日田地方に於ける2つの例 -』『考古学雑誌』第40巻第3号
- 1961 『第4章 二遺跡 14日田盆地と阿道台地』『大分県の考古学』
- 片岡宗二 1984 『飯付II式土器の編年について - 特に三国丘陵の資料を中心に -』『三次遺跡々遺跡』福岡県文化財調査報告書66 福岡県教育委員会
- 1991 『墓制からみた北部九州弥生時代』『季刊考古学』92号
- 栗田勝弘 1998 『大分県の経路と観望部の動態』『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会
- 坂本益弘 1999 『筑後地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年』『陣ヶ台遺跡』琉球町文化財調査報告書第9集
- 下條信行 1991 『北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡』『古文化論叢』
- 高倉洋彰 1995 『金印国家群の時代』青木書店
- 高橋敏 1989 『まとめ』『草場第2遺跡』大分県教育委員会
- 高島忠平 1977 『IV 壘積の編年』『立岩遺跡』河出書房新社

- 武末純一 1982 『埴納銅子論』『古文化談叢』第9集
 1987 『須玖式土器』『弥生文化の研究』4 雄山閣出版
 1990 『墓の青銅器、マツリ青銅器』『古文化談叢』第22集
 2003 『九州地方の土器』『考古資料大観』第1巻 小学館
- 田中良之 2000 『意地から見た親族・家族』『古代史の論点』②小学館
- 田崎博之 1985 『須玖式土器の再検討』『史園』第122冊
- 常松幹雄 1992 『伊都国の土器、奴国の土器』『古代探源Ⅲ』
 1998 『樂官の楽遣と終焉』『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
 2002 『九州地方の弥生土器』『考古資料大観』第2巻
- 土居和幸 1999 『第2章 遺跡の立地と環境 第3節 日田盆地の遺跡と遺物』『小道辻原遺跡Ⅰ』大分県教育委員会
 土居和幸 2003 『遺跡の立地と環境』『吹上遺跡Ⅰ』日田市教育委員会
 豊島直博 2004 『弥生時代における鉄剣の流通と地の域性』『考古学雑誌』第88巻第2号
 中園 聡 1999 『九州樂棺社会のイデオロギー』『季刊考古学』67号 雄山閣
 1991 『墳墓にあらわれた意味』『古文化談叢』第25集 古文化研究会
- 樋口達也 1979 『4. 樂棺の編年的研究』『九州縦貫自動車道開闢埋蔵文化財調査報告』XXXI中巻 福岡県教育委員会
 1982 『3. 甘木・朝倉地方樂棺についての若干の所見』『粟山遺跡』甘木市教育委員会
 1985 『南筑後における樂棺の編年』高岡町教育委員会『権現塚北遺跡』高岡町教育委員会
 1979 『樂棺の編年的研究』『九州縦貫自動車道開闢埋蔵文化財調査報告』XXXI中巻 福岡県教育委員会
 1987 『集落立地の変遷と土地開発』『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会
- 遠水信也 1985 『IV地域』『権現塚南遺跡Ⅱ 下巻』小都市教育委員会 1985
- 比嘉久小 2010 『日田地域における弥生時代石器・鉄器組成とその変化』『真原遺跡6次・大行事遺跡2次』日田市埋蔵文化財調査報告書第94集 日田市教育委員会
- 七田忠昭 1979 『二塚山出土樂棺とその編年』『二塚山』佐賀県教育委員会
 平 美典 2004 『北部九州における中期～後期中部の土器と並行関係』『弥生中期土器の並行関係』第53回埋蔵文化財研究会発表要旨集
 平尾和久 2001 『浮羽郡内における弥生時代後期の土器について』吉田東明編『仁右衛門遺跡Ⅱ』下巻 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会
- 溝口孝司 1999 『北部九州の樂制』『季刊考古学』67号 雄山閣
 2001 『弥生時代の社会』『村落と社会の考古学』朝倉書店
 2008 『弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格』『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究会
- 宮内克己 2003 『大分の弥生土器』『二千年の鼓動』大分県立歴史博物館
- 村本二郎 1998 『九州の経路遺物』『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会
 森貞次郎 1966 『弥生時代における細形銅剣の流入について』『日本民族と南方文化』1966
 柳田康雄 1986 『三階式土器と西新町式土器』『弥生文化の研究』6 弥生土器Ⅱ 有山閣
 1991 『土師器の編年 2 九州』『古墳文化の研究』第6巻
 2000 『王墓とは』『奴国王の出現と北部九州のクニグニ』春日市奴国の歴史資料館
 2003a 『4. 弥生木棺墓』『伯玉社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集 春日市教育委員会
 2003b 『中国の樂棺編年』『伯玉社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集 春日市教育委員会
 2004 『小都市域における板付Ⅰ式併行期前後の様相』『板付Ⅰ式期の再検討』発表要旨集 埋蔵文化財研究会福岡大会
- 山崎順人・杉本浩史・井上愛子 2005 『筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開』『古文化談叢』第54集
 山本茂夫 1988 『北東筑賀真陶器の編年―大宰府出土例を中心として』『貿易陶磁研究』NO.8
 吉田東明 2001 『仁右衛門遺跡出土の弥生時代中期土器について』『仁右衛門遺跡Ⅱ』下巻 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会
- 渡邊隆行 2006 『第3節 小結』『吹上IV』日田市埋蔵文化財調査報告書第57集 日田市教育委員会
 渡邊隆行 2006 『小結』『大肥遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第66集 日田市教育委員会

【報告書】

- 日田市
 『朝日宮ノ原遺跡Ⅱ』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ 日田市教育委員会 1989
 『今泉遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第37集 日田市教育委員会 2002
 『八尾遺跡』平成16年度(2004)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2006
 『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集 日田市教育委員会 2002
 『後迫遺跡』九州縦貫自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 大分県教育委員会 2001
 『上野第1遺跡』平成8年度(1996)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1997
 『上野第2遺跡』平成15年度(2003)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2004
 『宇土遺跡発掘調査報告書』大分県天瀬町教育委員会 1986
 『五高大坪遺跡』天瀬町教育委員会 1989
 『尾善遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001
 『大肥校原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集 日田市教育委員会 2003
 『大肥遺跡Ⅲ-A-2区の調査概報』日田市埋蔵文化財調査報告書第67集 日田市教育委員会 2006
 『大肥兼重中村地区』平成10年度(1998)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1999
 『大肥中村遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会 2003
 『小道辻原遺跡Ⅰ A・B・C・D区編』九州縦貫自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ 日田市埋蔵文化財調査報告書第15集 大分県・日田市教育委員会 1999
 『小道辻原遺跡Ⅱ B区編』日田市埋蔵文化財調査報告書第15集 日田市教育委員会 2000
 『小道辻原遺跡写真図版編』九州縦貫自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ 大分県教育委員会 1998
 『小道辻原遺跡Ⅰ L区』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ 日田市教育委員会 1988
 『小道辻原遺跡Ⅱ S区』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ 日田市教育委員会 1989
 『小道辻原遺跡Ⅲ O区』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ 日田市教育委員会 1990
 『小道辻原遺跡Ⅳ』小道辻原遺跡範囲確認調査概要報告書 日田市教育委員会 1992
 『小道辻原遺跡Ⅴ H2・O区』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ 日田市教育委員会 1992
 『小道辻原遺跡Ⅵ H1・K3・P区』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ 日田市教育委員会 1992
 『小道辻原遺跡発掘調査概報 K1区』日田市教育委員会 1990
 『小道辻原遺跡Ⅵ Q・R2』日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ 日田市教育委員会 1993
 『小西遺跡・町ノ坪遺跡Ⅱ区』平成16年度(2004)日田市埋蔵文化財調査年報 日田市教育委員会 2006

- 「大波羅道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001
- 「大波羅道跡」大分県文化財調査報告書116集 大分県教育委員会 2001
- 「水栗道の遺跡Ⅱ-金田遺跡-」日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009
- 「金山遺跡1・3次調査-一級河川水栗川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告-」大分県埋蔵文化財センター報告書第31集 大分県教育委員会 2003
- 「萩原原道跡Ⅱ-弥生・古墳時代遺構編-」日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
- 「萩原原道跡Ⅱ-弥生・古墳時代遺物編-」日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
- 「萩原道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第79集 日田市教育委員会 2007
- 「萩原道跡」平成20年度(2008)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2009
- 「萩原第二遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1989
- 「佐守原道跡」平成20年度(2008)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2009
- 「佐守原道跡」尾津道跡・有田屋敷遺跡跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第9集 大分県教育委員会 1998
- 「惣田道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 日田市教育委員会 1994
- 「高野道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第65集 日田市教育委員会 2006
- 「谷ノ久保道跡」平成6年度(1994)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1996
- 「長者原道跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第78集 日田市教育委員会 2007
- 「長者原道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第73集 日田市教育委員会 2006
- 「長者原道跡」日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ 日田市教育委員会 1986
- 「塚原道跡」平成20年度(2008)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2009
- 「徳重道跡」平成5年度(1993)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1995
- 「徳重道跡」大分県文化財調査報告書第94集 大分県教育委員会 1996
- 「徳重道跡第3次」日田市埋蔵文化財調査報告書第22集 日田市教育委員会 2000
- 「中川原道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第72集 2006
- 「日田栗里平林地区」日田市埋蔵文化財調査報告書第85集 日田市教育委員会 2008
- 「平島道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第3集 日田市教育委員会 1990
- 「平島道跡B区」日田市埋蔵文化財調査報告書第4集 日田市教育委員会 1991
- 「平島道跡Ⅱ」日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ 日田市教育委員会 1989
- 「平島道跡D地点」日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001
- 「日田市高瀬道跡の調査4 寺内遺跡-一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 大分県教育委員会 2002
- 「日田市高瀬道跡の調査4 上野第2遺跡-一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 大分県教育委員会 2002
- 「吹上道跡Ⅱ」(2次調査概報)日田市教育委員会 1981
- 「吹上道跡」(1次調査概報)日田市教育委員会 1980
- 「吹上道跡Ⅰ-3〜6次調査の記録-」日田市埋蔵文化財調査報告第42集 日田市教育委員会 2003
- 「吹上道跡Ⅱ-9〜11次調査の記録-」日田市埋蔵文化財調査報告第52集 日田市教育委員会 2004
- 「吹上道跡Ⅲ-7・8次調査の記録-」日田市埋蔵文化財調査報告第57集 日田市教育委員会 2004
- 「吹上道跡Ⅳ-6次調査の記録-」日田市埋蔵文化財調査報告書第70集 日田市教育委員会 2007
- 「本村道跡2次」平成12年度(2000)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2001
- 「本村道跡3次」日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- 「町ノ坪道跡A〜C区」平成15年度(2003)日田市埋蔵文化財調査年報 日田市教育委員会 2005
- 「町ノ坪道跡D区」平成17年度(2005)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2007
- 「三和教田道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第14集 日田市教育委員会 1998
- 「三和教田道跡B地点」平成6年度(1994)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 1996
- 「三和教田道跡C地点-県道接続道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書-」大分県文化財調査報告書第98集 大分県教育委員会 1997
- 「元宮道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第25集 日田市教育委員会 2000
- 「元宮道跡」平成10年度(1998)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2000
- 「元宮道跡」平成11年度(1999)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2001
- 「元宮道跡」平成12年度(2000)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2002
- 「会所宮道跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996
- 「花ノ木道跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書14 大分県教育委員会 1999
- 「花ノ木道跡」平成23年度(2011)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2012

(他地域)

- 「粟山道跡」甘木市文化財調査報告書第12集 甘木市教育委員会 1982
- 「藤取五反田道跡Ⅰ」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第9集 福岡県教育委員会 1999
- 「大庭・久保道跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書36 福岡県教育委員会 1995
- 「権見塚北道跡」瀬高町文化財調査報告書第3集 1985
- 「歌館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 女貴道跡・桶尻道跡跡」宇佐市文化財調査報告書第2集 1986
- 「歌館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 野口道跡(1)」宇佐市文化財調査報告書第2集 1987
- 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-36-大庭・久保道跡」福岡県教育委員会 1995
- 「岩野道跡」浮羽町文化財調査報告書第5集 浮羽町教育委員会 1990
- 「栲原道跡Ⅲ」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書12 福岡県教育委員会 1987
- 「栲原久保道跡」小都市文化財調査報告書第27集 小都市教育委員会 1985
- 「道徳山道跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-25-本文編 福岡県教育委員会 1978
- 「立岩道跡」福岡県飯塚市立立岩道跡調査委員会編 河出書房新社 1977
- 「良嶺道跡」北野町文化財調査報告書第11集 1998

第5節 総括

これまでの15章に及ぶ調査報告によって、吹上遺跡の様々な価値が明らかとなった。以下ではその価値を纏めるものとする。

1. 自然科学分析について

6次調査4・5号墓から出土した熟年男女の貝輪の着装が死後であった可能性が高く、そして同時に、着装者の筋力の発達具合から、貴族的階層の社会立場を象徴するとされた貝輪への評価が整理され、「貴族化」はしていなかったということが明らかとなった。これまで長く議論されてきた弥生時代中期社会の発展段階を整理するうえで非常に重要な証拠を示しうるものと評価出来る。また、ガラス管玉は鉛バリウムガラスのガラス素材であるが、北部九州で出土する他のガラス管玉とは着色剤が異なっており、着装状況では首飾りなどは異なった布に縫いつけたり編み込んだ使用方法が想定された。北部九州の厚葬墓から出土するガラス管玉は、製作技法や法量などは類似するが着色剤など製作手法の細部に差異があり、また首飾りや頭飾りといった従来の理解以外の使用方法が想定されたことになる。これはガラス管玉の製作・入手から利用方法まで様々なバリエーションがあったことを物語る貴重な発見と言えよう。さらに勾玉はヒスイ素材で、緒締勾玉は、5号裏棺墓の被葬者の緒締玉として利用されていた。玄界灘沿岸の西部に多くみられるこの種の勾玉の分布範囲を越えて、日田地域へと伝わったことには、副葬遺物類の入手方法の点で注目される。また青銅製品の鉛同位体分析結果では、中細形銅戈が国内青銅生産のなかでも比較的早い段階の資料であること、赤色顔料の分析ではいずれの墳墓も丹生鉱山産の朱が利用されていたことが明らかとなった。

このように、吹上遺跡のなかでも特に6次調査の副葬遺物や人骨は、考古学の新知見を得るための様々な情報を提供しており、その価値は日田や大分のみならず、日本の弥生社会の発展を語るうえで非常に重要である。

2. これまでの調査と遺構・遺物について

吹上遺跡では24年間にわたり11次で2387.9㎡の調査を行った。これらの調査の結果、遺構の時期は弥生時代前期後半から後期末にまで万遍なく継続し、台地全体を占有する集落域が次第に墳墓域を複数倍いながら変遷する過程が明らかとなった。なかでも、後期後半には条溝や環濠を伴った集落域が形成され、後の小迫辻原遺跡へとつながる地域の拠点集落としての様相が強化されていく姿が垣間見えた。また、中期後半の墳墓域は、日田市内で確認される所謂列墓とは異なり、6次調査区の豪華な副葬品を有する厚葬墓、2次調査の少量の副葬品を有する裏棺墓、9次調査の副葬品を有しない墳墓と集塊状の都合3つの墓域が同時期に営まれていたことが明らかとなった。これは、当該期の日田地域の社会を代表する人々の集団内部の分節状況を示し、複雑に階層分化していく弥生社会の発展状況を反映していると考えられた。

このような吹上遺跡の集落から出土する土器は、弥生時代の当初から筑後川中流域や二日市地帯帯などの北部九州西部の隣接地域の影響を多分に受けていたものと考えられるが、前期末から中期後半にかけて北部九州以東の影響を大きく受ける。また、直接的ではないにしろ肥後地域の影響も見られ、石器においては筑豊方面との交流を示す石廬土素材などが見られ確認される。裏棺墓においても同様で、中期後半の裏棺は東西両地域の影響を受けるなかで独自に取り入れられたものであった。このように吹上遺跡で出土する遺物の殆どは、北部九州の中心部にあり東西や南北を結ぶ交通網の結節点としての日田地域の地理的特徴を如実に反映しているものと考えられた。

日田盆地の弥生集落の変遷を整理すると、地区毎で消長する集落変遷のなか、吹上遺跡は常に継続する拠点の

集落で、日田地域の中心的集落であることが明らかとなった。厚葬墓の存在や複数墓域の形成などからも日田の象徴的な中心集落であったことは間違いなからう。この日田弥生社会の中心であった吹上遺跡は、北部九州弥生社会を結ぶ広域ネットワークの中に組み込まれており、所謂クニとして説明されるような北部九州のひとつの領域単位となっていたものと考えられた。そして、このような領域単位を代表する集落及び墳墓が出土する吹上遺跡は、他の厚葬墓との比較から首長制社会へと移行する社会段階を示す好例と言え、我が国の国家形成期以前の社会状況を知るための貴重な遺跡であると位置づけられた。

このように、北部九州の弥生社会を検討するうえで、吹上遺跡の役割は大きいと評価出来るよう。

3. 吹上遺跡の保全にむけて

吹上遺跡が日田盆地の弥生社会だけでなく北部九州の弥生社会を検討するうえで非常に重要な遺跡であることが明らかとなった。学術的評価も非常に高く、大分県を代表する弥生集落であることには間違いがない。今回の調査報告の総括によってその価値はさらに高まったといえよう。

遺跡の保全活動には既に取り組みしており、平成8年には大分県史跡に6次調査区一帯431㎡が指定され、地域の重要な史跡として保護されている。また、平成22年には墳墓の副葬品である青銅製品や装身具類などは重要文化財に指定され、翌平成23年からそれら出土品の保存修理事業に取り組んでいる。また、平成22年には指定を記念した遺物の展示会を開催し、他自治体や団体への展示品貸出にも対応することで、普及啓発活動も実施している状況である。こうした普及啓発活動によって、吹上遺跡が地域の重要な遺跡であることは次第に浸透しており、大半が農地を占めるこの遺跡の大部分は、地権者の方々などの協力によって、大きく損なわれることなく現在も保全され、日田の弥生時代の中心地の遺跡として大切に守られている。今後も史跡範囲も含めて、遺跡の保護への協力と理解を求め、日田市の貴重な文化遺産である吹上遺跡を後世に残し伝えていく必要があるだろう。

4. あとがき

吹上遺跡の調査は、昭和54年から平成12年度までの24年間で発掘調査を行い、平成13年から25年までの13年間で報告書を作成するという足掛け37年間という長期間に及んでいる。なかでも、平成7年に実施した6次調査において、墳墓群からは青銅武器類や貝輪などの装身具など、豪華な副葬品が人骨を伴って出土したことから、遺跡は全国的にも一躍脚光を浴びることとなった。「弥生時代の王墓」や「王墓級」の文字が新聞紙上を飾り、連日のように報道された遺跡は、発見から20年ほどが経過した今、一部が大分県指定史跡として保全され、「王墓」と報道された墓群から出土した遺物は重要文化財に指定された。この間、様々な方々の協力によって、遺跡や遺物を保全する活動や価値付けする活動が行われてきた。それらの成果を本報告に反映することで改めて協力者の方々に感謝を申し上げたい。

37年もの時間の経過は、調査に一度も携わっていない筆者をこの遺跡に関わらせ、報告書を纏め上げることになったのだが、あまりにも大役すぎてその責務を充分果たせたかどうかは定かではない。しかし、今回の総括によって、価値付けられた吹上遺跡は、日田や豊後の歴史のみならず、日本の歴史を明らかにするために貴重な資料を提供していることが明らかとなった。今後もこの価値を損なうことなく後世に伝えていくことが我々文化財保護行政の責務で、地域の人々と共に遺跡を保護する活動を継続していきたい。

報告書抄録

ふりがな	ふきあげ
書名	吹上VI
副書名	自然科学分析調査の記録・調査の総括
巻次	
シリーズ名	市内遺跡発掘調査報告書・日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	13・第112集
編著者名	舟橋京子・岩橋由季・米元史織・田中良之・鈴木浩子・平尾良光・谷澤亜里・足立達朗・小山内康人・大坪志子・志賀智志・川本耕三・渡邊隆行
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2014年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吹上遺跡 <small>ふきあげ</small>	大分県日田市大字 <small>ふきあげ</small> 波里・吹上・友田	44204-6	204088	33° 18' 08"	130° 92' 64"	19890820 ～20000811	2387.9 ㎡	農業関係事業 鉄塔建設 重要遺跡確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹上遺跡	集落跡 墳墓群	弥生時代	住居跡、溝、貯蔵穴、土坑、ピット 石棺墓、甕棺墓	甕棺、鉄剣、銅剣、銅戈、ガラス管玉、勾玉、貝輪、ガラス小玉、弥生土器、石剣など	

要約	<p>吹上遺跡は日田盆地北部の通称吹上原台地上に位置する市内を代表する弥生集落遺跡で、これまで11次の調査が行われている。なかでも、6次調査は、青銅製武器類や南海産貝輪などの豪華な副葬遺物を有する甕棺墓・木棺墓などの墳墓群が検出されており、日田地域を治めた有力者層の特定集団墓と目される。</p> <p>自然科学分析調査は、4・6・9次調査で出土した人骨の分析調査所見、6次調査の人骨と装身具の着脱状態の検討、6次調査出土の青銅器の鉛同位体比分析、6次調査出土のガラス管玉の分析、勾玉の分析、6次調査出土の赤色顔料の分析を行った。また、調査総括では過去調査における出土土器・石器、墳墓・甕棺・副葬遺物、古代末の経塚と経筒の特色を整理し、出土遺構の変遷を検討した。また、それらの成果から、日田弥生社会における吹上遺跡の位置づけと北部九州における吹上遺跡の意義について整理した。</p> <p>これら多方面からの検討の結果、吹上遺跡が日田盆地の中心となる拠点集落で、北部九州弥生文化を検討する上で重要な遺跡であることが特徴付けられた。</p>
----	---



1・2次調査中に発行した発掘調査速報新聞（全7回）

吹上VI

-自然科学分析調査の記録・調査の総括-

市内遺跡群発掘調査報告13

日田市埋蔵文化財調査報告書第112集

平成26年3月31日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1

印刷 山本印刷株式会社
大分県日田市大町3986-3



日田市